

## 第五篇 私の海の冒険

## 第二十二章 どうして海の冒険を始めたか

島 寶

謀叛人どもは引返しては來なかつた、——森の中から發砲さへして來なかつた。彼等は、船長の言ふのによれば、「その日の食糧だけは貰つて」しまつたのである。それで私たちはその場所を自分たちだけのものに出來たし、負傷者の傷を調べたり食事をとつたりする平穩な時間であつた。大地主さんと私とは、危険をも構はずに、屋外で料理をした。そして屋外にゐてさへ、醫師が手當をしてゐる負傷者の高い呻き聲が聞えて來るのが怖くて、自分たちのしてゐることが殆どわか  
らないくらゐであつた。

戦闘で倒れた八人の中で、たつた三人だけがまだ息があり、——それは、銃眼のところを撃たれた海賊の一人と、ハンターと、スモレット船長とである。そしてこの中の初めの二人は死んでゐるも同様だつた。實際、謀叛人の方は、先生の外科手術を受けてゐるうちに死んだし、ハンターは、私たちが出來るだけのことはしたが、一度も意識を恢復しなかつた。彼はその日中死生の間をさまよひ、私の家で卒中の發作に罹つたあの老海賊のやうに荒い息遣ひをしてゐた。しかし、彼の胸の骨はあの一撃で打ち砕かれてゐたし、頭蓋骨は倒れた時に挫けてゐて、その夜のうちに、

何の徴候もなく聲も立てずに、彼は神の許へ行つてしまつた。

船長はと言へば、彼の傷はいかにも重くはあつたが、しかし危険なものではなかつた。どの器官にも致命傷は負つてゐなかつた。アングラスの弾丸が——といふのは最初に船長を射撃したのはジョーブの奴だつたからであるが——肩胛骨を折つて肺に觸れてゐたが、ひどいことはなかつた。第二弾は脛脛の筋肉を少し切り裂いて引違へただけだつた。彼はきつと恢復するが、しかしその間、これから數週間は、歩いて腕を動かしてもいけないし、出來る時には口を利くことさへよくない、と先生が言つた。

私自身の偶然に受けた指關節の切傷は、ほんの蚤の喰つたくらゐるものだつた。リヴジー先生はそれに膏藥を貼つて、おまけに私の耳をひつばつた。

食事の後に、大地主さんと先生とは船長の傍に暫く坐つて相談をした。そして思ふ存分にしゃべり合つてしまふと、それは正午を少し過ぎた頃であつたが、先生は自分の帽子とピストルとを取り上げ、彎刀を佩び、例の海圖をポケットに入れ、銃を肩にかけて、北側の防柵を乗り越え、さつさと樹立の中へ入つて行つた。

グレーと私とは、上官たちの相談してゐるのが聞えないやうにと、丸太小屋のずつと端の方に一緒に坐つてゐるが、グレーは、醫師が出て行つたのに全く呆氣に取られて、パイプを口から取り出したまま、それをまた口に啣へるのもすっかり忘れたほどだつた。

「おやおや、」と彼は言つた。「一體全體、リヴジー先生は氣でも違つたんかい？」

「なあに、そんなことはないさ。」と私が言った。「気が違ふといふことになれあ、この僕たちの中では先生が一番おしまひだよ。僕はさう思ふさ。」

「ぢやあ、兄弟」とグレーが言った。「先生は気が違つてゐねえんかも知れねえ。だが、あの人の方が気が變になつてゐるのでねえとするとだ、いいかい、このわつしの方が變なのだな。」

「僕はかう思ふよ、」と私が答へた。「先生には何か思ひつきがあるんだとね。そしてもし僕と思ふ通りなら、先生は今ベン・ガンに會ひにいらしたんだよ。」

寶

後で明白になつたことだが、私の思つた通りだつた。しかし、とかくするうちに、小屋の中は息苦しいまでに暑く、防柵の内側の狭い砂地は眞晝の太陽に照りつけられて燃え立つやうだつたので、私の頭にはまた一つの考へが浮び始めた。それは決してさほど正しい考へではなかつた。

島

私に思ひ浮び始めたといふのは、先生を羨むことなのであつた。先生は森のひいやりとする樹蔭を歩きながら、周りに鳥の啼くのを聞いたり、松の樹の心地よい香を嗅いだりしてゐるのに、私は、暑さで融けた樹脂のくつついた衣服を着て、焙られるやうな思ひをしながら坐つてゐて、自分の周りには血がたくさん流れてゐるし、あたり中に死體がごろごろ横つてゐるので、それを見てゐると、この場所がつくづく厭になり、その厭だといふ氣持は殆どここが恐しいといふくらゐに強いものだつた。

私が丸太小屋を洗ひ落したり、それから食後の食器を洗つて始末してゐる間中、この厭だといふ氣持と羨ましいといふ氣持は益々強くなる一方で、たうとうしまひには、自分がパン囊の傍に

ゐて、その時誰も私を見てゐないのを幸ひに、逃げ出す用意の手始めに、上衣の兩方のポケットに堅パンを一杯詰め込んだ。

私は馬鹿だつた、と言はれても仕方がない。確かに私は馬鹿な大膽過ぎることをやらうとしてゐたのだ。しかし、自分の出来るだけの用心をしてそれをやる決心だつた。それだけの堅パンがあれば、どんなことが起つたにしても、少くとも、次の日のよほど遅くまではひもじい思ひをすることはなかつたらう。

次に私が身につけたものは一對のピストルであつた。そして角製火薬筒と弾丸とは既に持つてゐたので、武器はこれで十分だと思つた。

私が頭に描いた計畫はと言へば、それはそれだけとしては悪い計畫ではなかつた。碇泊所を東で外海と分つてゐる例の砂の出洲を下つて行つて、昨夕目についたあの白い岩を見つけ出して、ベン・ガンがボートを隠しておいたのがそこかどうかをつきとめようといふのだ。これは確かにやる価値のあることだと私は今も信じてゐる。しかし私は圍柵から出ることは許されまいと思ひこんでゐたので、私の唯一の方法は、誰も氣をつけてゐない時に何とも言はずに無斷でこつそり抜け出すことであつた。これは、計畫そのものをまで悪いものにするくらゐな、悪いやり方であつた。しかし私はほんの子供だつたし、ぜひやらうと決心してゐたのだ。

さて、たうとう素晴らしい機會を見つけることになつた。大地主さんとグレーとは頻りに船長に繻帯を巻く手傳ひをしてゐた。誰も見てゐる者がなかつた。私は跳び出して柵壁を越え樹立の茂

みの中へ駆け込み、私のゐないことが氣づかれないうちに、もう仲間の人たちの呼び聲の聞えないところまで行つてゐた。

これが私の二度目の愚かな行ひで、小屋を護るのに健康な人をたつた二人だけ残して出たのだから、一度目のあの冒険とは遙かに悪かつたのだ。しかし、これも、一度目の時のやうに、私たちみんなを救ふことの助けになつたのである。

私は島の東海岸をさして眞直に進んで行つた。碇泊所から決して目を留められないやうにするために、出洲の外海に面した側を下つて行くことにしてゐたからである。まだ暖かくて日が照つてはゐるけれども、もう午後も大分遅くなつてゐた。喬木の森を縫ふやうにしてどんどん歩いて行くと、ずつと前の方から間断なく雷のやうに轟いてゐる寄波の音が聞えたばかりではなく、樹の葉のざあざあ鳴る音や大枝の擦れ合ふ音までが聞えて來たので、海風がいつもよりも強く海岸に吹きつけてゐることがわかつた。間もなく、冷い風が私の體にあたつて來た。そして更に數歩行くと、森の縁の開けたところへ出て、見渡すと、海は水平線までも青々として日に照され、寄波は磯に沿うてのたうち白波を立ててゐるのだつた。

私は寶島の周圍では海が靜かだつたのを一度も見ることがない。太陽が頭上に輝きわたり、空氣はそよとも動かず、海面は波立たずに青々としてゐるやうとも、かういふ大浪はいつも外海に面した海岸には何處でも打ち寄せて、晝も夜も雷のやうに轟きわたつてゐるのだつた。それで私にはこの島では浪の音の聞えない處が一箇所でもあらうとは殆ど信じられない。

私は大喜びで寄波の傍をずつと歩いて行き、たうとう、もう十分に南の方まで來たと思つて、何かのこもり茂つた灌木に身を隠して、用心しながら出洲の背へ這ひ上つた。

私の背後は海で、前面は碇泊所であつた。海風は、いつになく烈しく吹いたためにいつもよりも早く吹き盡してしまつたとしてもいふ風に、既に止んでゐた。その後には、南南東からの弱い變り易い微風が吹いて、大きな層をなした霧を運んで來た。そして碇泊所は、骸骨島の風蔭で、初めて私たちが入つて來た時のやうに靜かで鉛のやうにどんよりしてゐた。ヒスパニオーラ號は、その滑かな一面の鏡のやうな水面に、楯冠から吃水線までくつきりと映つてゐて、海賊旗が斜桁上外端にぶら下つてゐた。

その舷側には一艘の快艇が横附けになつてゐて、シルヴァーがその艇尾座にをり——彼は私にはいつでも見分けがついた——それから、二人の男が本船の船尾の舷牆に凭れてゐたが、その中の一人は赤い帽子をかぶつてゐた。——まさしく、數時間前に防柵に馬乗りになつてゐるのを見たとあの惡漢だ。見たところでは彼等はしやべつたり笑つたりしてゐるやうだつた。尤も、その距離——一マイル以上——では、無論、言つてゐることは私には一語も聞き取れなかつたが。と、突然、實に怖しい、この世のものとは思へぬ叫び聲がして、最初は私はひどくびつくりしたが、直ぐフロント船長の聲を思ひ出し、その鳥が飼主の手頭に乗つてゐるのがその鮮かな羽毛の色でそれと見分けられるやうな氣さへした。

それから間もなくその端艇は本船を離れて岸に向つて漕いでゆき、赤い帽子をかぶつた男とそ

の仲間の男とは船室の昇降口から下へ降りて行つた。

ちやうどその時に太陽は遠眼鏡山の背後に沈んで、霧がずんずん集つて来るので、いよいよ本式に暗くなりかけて来た。私は、もしその夜ボートを見つけるのなら、一刻もぐづぐづしてはゐられないと気がついた。

例の白い岩は、矮林の上に十分見えてはゐるが、まだ八分の一マイルばかり出洲を下つたあたりにあつて、矮木の間を時々四つん這ひになつて這ひながらそれに近づくまでには、かなりの時間がかかつた。そのごつごつした岩の面に私が手をかけた時には、殆ど夜になつてゐた。岩の直ぐ下手に、緑の芝地の極く小さな凹地があつて、それが、土手と、その邊に頗るたくさん生えてゐる膝くらゐまでの高さのこんもりした下生とで隠されてゐた。そして、この凹みの真中に、果して、山羊の皮で作つた小さなテントがあつた。ちやうどイギリスでジブシー人が持ち廻つてゐるやうなテントだつた。

凹地の中へ降りて、そのテントの端を上げてみると、ベン・ガンのボートがあつた。——まさしく紛れもない手製のものだつた。強靱な木を不器用な一方に偏つた梓組にして、それに、毛の方を内側にした山羊の皮を張つたものである。これは私にさへ極めて小さいので、大きな大人を乗せて浮ぶことが出来ようとは私には殆ど想像出来にくらゐであつた。出来るだけ低く取附けた腰掛梁が一つと、舳に足架のやうなものと、推進用の「兩」櫂が一本とあつた。

私はその當時は古代のブリットン人が造つたやうな革舟をまだ見てゐなかつたが、その後になつ

て見たことがある。それで、ベン・ガンのボートを一番はつきり説明するには、嘗て人間の造つた最初の最もまづい革舟のやうなものだと言へばいいと思ふ。しかし、それは革舟のあの大きな便益は確かに持つてゐた。即ち、極めて軽く持ち運び易いのである。

さて、もうボートを見つけてしまつたのだから、私も今度だけは隠れ遊びもたんのうしたらうと思はれるだらう。けれども、それまでの間に、私は別の考へを思ひつき、それがとてもやりたくなつてゐたので、たとひスモレット船長にさへ逆つてでもそれを實行したらうと思ふ。それは、夜陰に乗じてそつと海へ乗り出し、ヒスパニオーラ號の錨索を切つて、何處でも流れ著く處へ船を坐礁させようといふのであつた。私は、謀叛人どもが、その朝撃退されてからは、錨を揚げて海へ出て行くことを何よりも望んでゐるものと、すつかりきめこんでゐた。で、それを邪魔してやるのは面白いことだらうと思つた。そして、あのやうに番人どもに一艘のボートも残しておかないのだから、それは殆ど危険なしに出来さうだと考へたのである。

私は眞暗になるのを待つために腰を下して坐り、堅パンをたらふく食べた。その夜は私の目論には萬に一つといふ詭へ向きの夜だつた。霧はその時は空をすつかり蔽うてゐた。晝の名残の光がだんだん淡くなつて全く消えてしまふと、眞の暗闇が寶島を包んだ。そして、たうとう、私が革舟を擔いで、夕食を食べたその凹地から躓きながら手探りして出た時には、その碇泊所全體で眼に見える箇所はたつた二つしかなかつた。

一つは、岸の大きな焚火で、その傍に敗北した海賊どもが濕地で酒宴を開いてゐた。もう一つ

は、暗闇の中のほんの朦朧たる明りで、碇泊してゐる船の位置を示してゐるものだった。船は退潮につれてぐるりと廻つてゐて、——船首が今私の方へ向いてをり、——船中の唯一の灯は船室にあつたのだ。それで、私に見えたのは、船尾の窓から流れ出る強い光線が霧に反映してゐるものに過ぎなかつたのである。

退潮は既に暫く續いてゐたので、私は長い一帯のじくじくした砂地を徒渉しなければならなかつた。そこでは何回も踝の上までもずぶずぶと沈んだ。それからやつと退いていつてゐる水の縁のところまで来たので、少し水の中へ入つて行つて、多少力を出して機敏に革舟を龍骨のところを下にして水面に浮べた。

## 第二十三章 退潮が流れる

この革舟は——それを使はない前から十分わかつてゐたが——私くらゐの脊や重さの人間には極く安全なボートで、荒海でもふはふはと浮くし敏捷に動いた。しかし、操縦するにはこの上もなくひねくれた偏屈な舟だった。どうやつてみても、いつも風下へばかり流れるし、ぐるぐるぐる廻るのがそいつの一番得意の手だった。ベン・ガンでさへあの舟が「その癖がわかるまでは扱ひにくい」奴だつたといふことを認めてゐる。

無論、私にはその癖がわかつてゐなかつた。その舟は私の行かねばならぬ方角以外のあらゆる方向へぐるぐる廻つた。大抵の時は横向になつてゐたので、潮がなかつたなら私は到底船に著けなかつたらうと思ふ。幸運にも、私がどう權を漕いでゐても、潮は舟を絶えず押し流してゐた。そしてちやうど行手にヒスパニオーラ號があつて、殆どそれに會ひ損ふ筈がなかつた。

初めは船は私の前に何か暗闇よりもつと黒いものの汚點のやうにぼうつと見えてゐたが、それからその圓材や船體が形をなして見え始めたかと思ふと、次の瞬間には、といふやうに思はれたのであるが（何故なら、先へ進むにつれて、退潮の流れがだんだん疾くなつて來てゐたから）、私はもう船の錨索の傍に來てゐたので、直ぐにそれを掴まへた。

錨索は弓の弦のやうにびんと張つてゐた。——船はそれほど強く錨をひつばつてゐたのだ。船體の周りでは、眞黒な闇の中で、漣を立てた潮流が小さな山川のやうに泡立ちさざめいてゐた。私の船用大形ナイフでぶつつりと切つてやれば、ヒスパニオーラ號はぶんぶん帆を唸らせながら潮流と共に流れ下るだらう。

ここまではよかつた。しかし次に私の思ひ浮べたのは、びんと張つてゐる錨索を急に切るといふのは、蹴る馬のやうな危険なものだといふことだつた。もしヒスパニオーラ號を錨から切り離すやうな無鐵砲なことをしようものなら、九分九厘まで、私と革舟とはまるつきり空中へ叩き飛ばされるだらう。

それで私はそのことはすつかり思ひ止まつた。そして、もし幸運が再び私に特別に恩恵を與へ

てくれなかつたなら、私は自分の計畫を放棄しなければならなかつたらう。けれども、南東南から吹き始めてゐた弱い微風は、日が暮れてからは、次第に南西風に變つてゐた。ちやうど私が考へこんでゐる間に、一陣の風が起つて、ヒスパニオーラ號に吹きつけ、船を潮流の中へ無理に押し上げた。そのために、非常に嬉しかつたことには、錨索が私の手の中で弛んだのが感じられ、それを掴んでゐた手がちよつとの間水の下へ入つた。

そこで私は決心して、大形ナイフを取り出し、齒でそれを開いて、索の股を一つ一つと切り、たうとう船は二つの股で揺れ動いてゐるだけになつた。それから私はちつとして、もう一度風が吹いて来て索の緊張が緩んだらこの残りの股を切斷しようとして待つてゐた。

この間中、船室から高い聲が聞えてゐた。が、實を言へば、私は他の考へにすつかり氣を取られてゐたので、それには殆ど耳を藉さずゐた。けれども、もう他にすることがなくなつたので、もつとそれに注意し始めた。

一方の聲は、以前フロントの砲手だつたといふ舵手のイズレール・ハンツの聲だと私にはわかつた。もう一方は、勿論、例の寝帽をかぶつた男だつた。二人とも明かに酒に酔つてゐたが、それでもまだ飲み續けてゐた。といふ譯は、私が耳を傾けてゐる間にさへ、その中の一人が、酔つ拂つた叫び聲をあげながら、船尾の窓を開けて何かを抛り出したが、それを私は空處だらうと判斷したからである。しかし彼等は酩酊してゐるだけではなかつた。猛烈に怒つてゐることは明かだつた。罵り言葉が霰のやうに飛び、時々はきつと殴り合ひになるに違ひないと思ふほどの呶

鳴り聲がした。けれどもその度に喧嘩は次第にやんで、聲は暫くの間ぶつぶつと低くなり、やがてまた次の喧嘩が始まり、それも何事もなく次第にすんでゆくといふ風だつた。

岸の方には、岸邊の樹立を通して野營の大きな焚火があかあかと燃えてゐるのが見えた。誰かがのろい單調な古びた水夫の唄を歌つてゐて、一節の終り毎に聲を下げて震はし、歌ひ手に根氣がなくなつて止めるより他にはまるで終りが無いやうに思はれた。私はその唄を航海中に一度ならず聞いたことがあつて、かういふ文句を覚えこんだ。

「七十五人で船出をしたが、  
生き残つたはただ一人。」

そして、これは、その朝あれほど無残にも死傷者を出した連中にとつては、幾らか陰慘にも適切過ぎる唄だと、私は思つた。しかし、實際、私の見たところから考へると、かういふ海賊たちは皆、彼等が船を走らせる海と同じやうに無神経なものだつたのだ。

やがて風が吹いて来た。スクーター船は闇の中で斜に動いて近づいて来た。私は錨索がもう一度弛んだのを感じたので、ぐつと力をこめて残りの繩をぶつつりと切つた。

風は革舟にはほんの僅かしか作用を及ぼさなかつたので、私はもう少しでヒスパニオーラ號の船首にぶつつけられようとした。同時にそのスクーター船は後端を中心にして潮流を横切つてゆ

つくりと廻つて兩端が今までと反対の位置になりかけた。  
私は今にも革舟が顛覆するかと思つたので、死物狂ひになつて努力した。そして革舟を直接に押し離すことが出来ないとかかつたので、今度は船尾の方へ眞直に押し進んで行つた。遂に私はその危険な隣人から免れた。そして最後に革舟をぐつと推進させたちやうどその時に、私の手がふと船尾の船牆を越えて水中に垂れ下つてゐる一本の軽い索にあたつた。と、即座に私はそれを擱んだ。

どうしてそんなことをしたのか自分でも殆どわからない。初めはただ本能だつたのだ。が、一度それを手に握つて、それがしつかりしてゐるのがわかると、好奇心がむらむらつと湧き起つて来て、船室の窓からちよつと覗いてやらうと決心した。

私はその索を手繰つて引きよせ、もう十分近づいたと思つた頃に、非常な危険を冒して自分の半身ほど立ち上り、さうして船室の天井と室内の一部とを見渡した。

この時分には、スクーター船とそれの小さな伴船とはかなり速く水を分けてすうつと流れてゐた。實際、私たちは既に野營の焚火と平行になるところまでも来てゐた。船は絶えず水沫を跳ばしながら無数の漣を押し切つて進み、ざあざあ大きな音を立ててゐた。それで、窓の縁の上へ眼をやるまでは、私は何故あの番人どもが一向驚かないのか合點がゆかなかつたのだ。だが、一目見ると十分だつた。また、そのぐらぐらしてゐる小舟からは、一目だけしか見られなかつた。その一目で、ハンズと彼の仲間の男とが絡み合つて猛烈な組打をやつてをり、互に相手の喉をひつ

擱んでゐるのが見えたのである。

私は再び腰掛梁にどかんと腰を下した。ちやうどよい時だつた。すんでのことに舟から水中へ落ちるところであつた。暫くの間は、私には、煙つたランプの下で一緒にゆらいでゐたあの狂暴な眞赤になつた二つの顔の他には、何一つも見えなかつた。それで私は眼を閉ぢて、もう一度眼を闇に馴らさうとした。

例の果しのない唄もたうとう終つて、野營の焚火を圍んでゐる人數の減つた仲間全體は、私の度々聞いたあの合唱をやり出してゐた。――

「死人箱にやあ十五人――」

よいこらさあ、それからラムが一罇と！

残りの奴は酒と悪魔が片附けた――

よいこらさあ、それからラムが一罇と！

ちやうど私が、酒と悪魔とが正にその瞬間にヒスパニオーラ號の船室でどんなに活躍してゐるかを考へてゐた時に、急に革舟がぐつと傾いたのに驚かされた。同時にそれはぐらぐらとして、それから針路を變へたやうに思はれた。速力はその間に異様に増してゐた。

私は直ちに眼を開けた。周り中には一面に漣があり、鋭いざあざあいふ音を立てて泡立ち、微

かに燐光を發してゐた。私の舟は依然としてヒスパニオーラ號の船跡の數ヤードのところをぐるぐる廻つてゐたが、そのヒスパニオーラ號までも針路がよろよろしてゐるやうであつたし、その圓材が夜の闇の中で少し揺れ動いてゐるのが見えた。いや、もつと見つめてゐると、その船もやはり南の方へ方向を轉じてゐるのが確かにわかつた。

私は肩越しに振り返つて見た。すると心臓がどきんとして肋骨にぶつかつたやうな氣がした。自分の眞後に、野營の焚火の光があつたのである。潮流は直角に曲つてゐて、それと共に高いスクリーナー船と小さな踊つてゐるやうな革舟とをぐるりと押し流して來たのだ。だんだん速くなり、だんだん烈しく泡立ち、だんだん高い音を立てながら、潮は瀬戸を通つて外海へとぐるぐる廻りながら進んでゆく。

突然、私の前にあるスクリーナー船は激しく針路を逸して、多分二十度も曲つた。すると殆ど同時に船中で叫び聲が起り、續いて別の叫び聲がした。船室昇降梯子をどかどかと歩く足音が聞えた。それで、あの二人の醉漢もたうとう喧嘩を中止して自分たちが災難に遭つてゐることに氣がついたのだといふことがわかつた。

私はそのみすほらしい小舟の底にべつたりと寝そべつて、自分の魂を神にひたすらに委ねてゐた。海峡の終るところで、私たちはきつと荒波の碎けてゐる沙洲にぶつつかるに違ひなく、そこで私のすべての心勞も迅速に終つてしまふだらうと思つた。そして私は死ぬことは多分堪へられたらうが、近づいて來る運命を傍觀するのは堪へられなかつた。

絶えず大浪にあちこちと押しやられ、時々飛び散る飛沫に濡れ、今度水の中に突き込まれたら死ぬだらうと絶間なく思ひながら、さうして私は何時間も横つてゐたに違ひない。次第に疲れが増して來た。かういふ恐怖の中でさへ、私の心は痺れたやうになり、折々は無感覺になつた。遂にはたうとう眠つてしまひ、波に揺られる革舟の中で、私は横になつて故郷と懐しい「ペンボ  
1提督屋」とを夢にみた。

## 第二十四章 革舟の巡航

眼が覺めた時はもうすっかり夜が明け放れてゐて、私は寶島の南西端のところを漂うてゐるのだつた。太陽は昇つてゐたが、大きな山容の遠眼鏡山の背後にあつて私にはまだ見えなかつた。その山はこつち側では恐しい斷崖をなして殆ど海へ下つてゐた。

ホールボリン岬と後橋山とが私の直ぐ近くにあつた。山は禿山で暗い色をしてをり、岬は四五十フィートの高さの斷崖になつてゐて、その縁には落ちて來た岩石がたくさんごろごろしてゐた。私は海の方へ四分の一マイルも出てゐないので、遭ぎよせて上陸しようといふのが最初に考へたことだつた。

その考へは間もなく斷念した。ごろごろしてゐる岩石の間には碎け波が噴き上つて轟いてゐた。



高い反響が次から次へと起り、ひどい飛沫が飛び散つてゐた。それで、私は、近よつたところで、荒磯に打ちつけられて死ぬか、でなければ、突き出た險岩を攀ち登らうとして徒らに體力を使ひ盡すだけだとわかつた。

それだけではなかつた。巨大なぬらぬらした怪物——謂はば、非常な大きさの蝸牛カタツムリの柔かいやうなもの——が、岩石の平たくなつた上と一緒に這つたり、ざぶんと高い水音を立てて海の中へ落ち込んだりしてゐるのが、見えたのである。さういふものが五六十匹も群つてゐて、その吠える聲は岩々にこだましてゐた。

私はその後になつて、それが海鹽しほといふものであり、全然害をしないものであることを知つた。しかし、磯が險難で寄波が高く荒立つてゐる上に、この動物の恰好を見ては、私とその上陸所が厭になるのは十二分であつた。さういふ危難に向ふくらゐなら、むしろ海上で餓死する方がよいと思つた。

とかくするうちに、もつとよい機會と思はれるものが前に現れた。ホールボリン岬の北に、陸がずつと續いてゐて、潮が低いので、長く延びた黄ろい砂地を露はしてゐた。その北には、もう一つ、別の岬——例の海圖には森サン・オグ・マロワの岬と記されてゐるもの——があつて、高い緑の松の樹で蔽はれ、その樹が海の縁までも生えてゐた。

私は、シルヴァーが寶島の西海岸全體に沿うて北の方へと流れてゐる潮流があると言つたのを思ひ出した。そして、自分の位置から考へて、自分が既にその潮流に乗つてゐると知つたので、

ホールボリン岬を後にして、それよりは都合がよささうに見える森の岬に上陸を企てるために體力を使はずに貯へておくことにしよう、と考へたのである。

海には大きな滑なめかなうねりがあつた。風は南からむらなくそよそよと吹いてゐたので、風と潮流とは喰違ひがなく、大浪はぐうつと高まつてはまた碎けずに下つて行つた。

もしさうでなかつたなら、私はとづくに命を失つてゐたに違ひない。ところが、さういふ譯だつたから、私の小さな軽いボートが易々と安全に波に乗つてゆく有様は驚くべきものだつた。私コラックが舟の底にちつと横つてゐて、ただ片眼だけを舟縁の上へやつてゐると、幾度も、大きな青い波の頂上が私の直ぐ上にぐうつと高く上るのが見えた。それでも草舟はただちよつと跳ね上つて、彈機仕掛のやうに踊り、鳥のやうに軽々と向側の波窪へ降りてゆくのであつた。

少ししたつと私はずるぶる大膽になり出して、自分の權を漕ぐ手並を試してみようと起き上つた。しかし、重さの按排が少し變つただけでも、草舟の動作には甚しい變化が生ずるのだつた。そして私が動くか動かないに、ボートは、今までの穩かな踊るやうな運動は直ちにやめて、眩暈めまいがするほどの峻しい水の斜面を眞直に走り下つて、次の波の横腹へばつと水煙うづほをあげながら舳を深く突つ込んだ。

私はびしよ濡れになつて度膽を抜かれ、直ぐさま元の位置に返つた。すると草舟は再び落著いたやうで、私を前のやうにふはふはと大浪の間を運んでくれた。この舟には手出しをしてはならぬといふことは明かだつた。で、自分にはこの舟の針路を左右することは毫も出来ないのだから、

この分では、私には陸へ著けるどんな望みが残されてゐるだらうか？  
私は非常に怖くなつて來たが、それでも心を亂さずゐた。先づ第一に、十分に用心して體を動かしながら、自分の航海帽で少しづつ革舟の塗をかひ出した。それから、もう一度眼を舟縁の上へやりながら、どうしてこの舟がこんなに靜かに大浪を滑り抜けてゆくのかといふことを研究しにかかつた。

すると、どの波も、海岸や船の甲板から見えるやうな、大きな、滑かな、つやつやした山ではなくて、まさしく、陸上の山脈のやうに嶺や平坦な處や谷間がたくさんあるものだ、といふことがわかつた。革舟は、なすがままにさせておくと、くるくる廻りながら、その低い處を謂はば縫ふやうにしてゆき、波の峻しい斜面や高い直ぐ崩れ落ちる頂上を避けてゆくのであつた。

「ははん、なあるほど」と私は思つた。「僕がかうして寝てゐて、釣合を失はずにゐなければならぬことは確かだ。しかしまた、櫂を舟縁に置いて、時々平らな處で陸の方へ一推し二推しやれることも確かだぞ。」かう思ふが早いか實行した。私は兩脇で體を支へて實に苦しい姿勢をしながら寝て、折々一二本弱いのには漕いでは舳を岸の方へ向けた。

これは頗るくたびれもするし、まだるつこくもある仕事ではあつたが、それでも私は確かに進んでゐるのが眼に見えた。そして、森の岬に近づいて來た時には、その岬にはきつと著き損ふに違ひないことはわかつたけれども、それでも數百ヤード東の方へ來てゐた。實際、私は岸に迫つた。涼しげな緑の梢が一緒に風に揺れ動いてゐるのが見え、次の岬には間違ひなく著けるにき

まつてゐると思つた。

その時に、非常に困つたことには、私は咽喉の渴きに苦しめられかけて來た。太陽が頭上からかんかん照りつける、それを波が千倍にも反射する、海水が私にかかつて乾き、唇までも鹽で硬ばる、かういふことが一緒になつて咽喉は焼けつき頭がづきづき痛み出した。で、そんなに間近に樹立が見えると、私はそこが戀しくてたまらなかつた。しかし潮流は間もなく岬を通り越して私を流して行つた。そして次の海の視界が展開した時に、私は或るものを見て、それが私の考への性質を變へたのであつた。

ちやうど私の正面に、半マイルと離れてゐないところに、私は帆を揚げて走つてゐるヒスパニオーラ號を見たのだ。勿論、私は捕虜にされるものと思つた。けれども、水のないのにひどく苦しめられてゐたので、さう考へると嬉しいのか悲しいのか殆どわからなかつた。そして、それがどちらとも判断がつかないうちに、私はすつかり驚いて、ただ眼を丸くして訝るより他にしようがなかつた。

ヒスパニオーラ號は大艦帆と二つの斜檣帆とを張つてゐて、その美しい眞白な帆布は雪か銀のやうに太陽に輝いてゐた。私が最初にその船を見た時には、すべての帆が風を受けて膨らんでゐて、北西へ針路を向けてゐた。それで私は船に乗つてゐる人たちは島をぐるりと廻つて碇泊所へ戻つて行かうとしてゐるのだらうと思つた。ところが、やがて船がだんだんと西の方へ轉回しかけたので、彼等が私を認めて、追つかけて來ようと船首を廻してゐるのだと考へた。しかし、た

うとう、船は真正面に風上へ向き、すつかり逆帆を喰つて、帆を風に震はせながら、暫くはそこに立往生した。

「へまな奴らだな。」と私は言つた。「彼奴らはまだやつぱり鼻のやうに酔つ拂つてゐるのに違ひない。」そして、スモレット船長ならどんなに彼等を叱りとばして追ひ使つたらうと思つた。

とかくするうちに、スクーナー船は次第に風下へ向ひ、再び別の針路を執つて、一分くらゐの間疾く帆走したかと思ふと、もう一度ちやうど風上に向つて停つた。かういふことを再三再四繰返した。彼方此方へ、上つたり下つたり、北へ、南へ、東へ、西へと、ヒスパニオーラ號は急に突き進み、その度毎に初めにやつたやうに止つて、帆布をものうげにばたばたさせるのだつた。

誰も舵を操つてゐないのだといふことが私にはもう明かになつて來た。そして、もしさうとすれば、あの連中は何處にゐるのだらう？ 彼等は正體もなく酔ひつぶれてゐるか、それとも船を見棄ててしまつたのだらうから、多分、もし私が船に乗り込めるならば、船を船長に返せるかも知れない、と私は考へた。

潮流は革舟とスクーナー船とを同じ速度で南の方へ押し流してゐた。(註七〇)スクーナー船の方の帆走はずるぶん氣儘で間歇的で、ずるぶん永い間動きが取れなくなつてうろろしてゐることがあつたので、潮流とは遅くはならないにしても、確かに少しも速くはなかつた。もし私が起き上つて櫂を漕ぎさへしたなら、きつとその船に追ひつけると思つた。この計畫はちよつと冒険のやうなところがあつて私の興味を湧き起し、船首の昇降梯子の傍に水樽があることを思ふと私の勇氣は

二倍になつた。

起き上ると、殆ど直ぐにまたばつと水煙のお見舞を受けた。が今度は自分の目的をやり通すことにした。そして出来るだけの力を揮ひ用心をして、舵を操られてゐないヒスパニオーラ號を追つて漕ぎ出した。一度ひどく波をかぶつたので、心臓を鳥のやうにどきどきさせながら、漕ぐのを止めて塗をかひ出さねばならなかつた。けれども次第に慣れて來て、ただ時々軸をぶつつけたりに顔に白波をぶつかけられたりするだけで、波の間を革舟を進めて行つた。

私は今や急速にスクーナー船に近づいてゐた。舵柄がばたんばたん動く度にそれについてゐる眞鍮がびかびか光るのまで見えた。それでも一人の姿も甲板には見えなかつた。船は見棄てられたのだと想像しない譯にはゆかなかつた。もしさうでなければ、あの連中は下で酔つて寝てゐるのだ。それなら多分私は彼等を當木で塞いでしまつて、船を自分の思ふままに出来るかも知れない。

暫くの間は船は私には何より困ることをしてゐた。——ちつとしてゐることだ。船は正南へ向ひ、無論、始終針路がぐらぐらした。風下へ向く度毎に帆は幾分膨らみ、さうすると直ぐにまた風の方へ向くのだ。これが私には何より困ることだと言ふ譯は、船は、帆布が大砲のやうにばたばた鳴り、滑車が甲板の上で轉がつてがらがら音を立て、さういふどうにも出来ないやうな様子に見えながら、それでも猶、潮流の速さのためだけではなくて、當然にも大きいものである風壓を全部受けるために、やはり私から向ふへ走り續けてゐたからである。

しかし、遂に、いよいよ機會が來た。風が暫くの間落ちて極く弱くなり、潮流が次第にヒスパニオーラ號を廻して、船は中央を軸にしてゆつくりと回轉し、遂には船尾を私に向けた。船室の窓はやはり開けつ放しになつてをり、テーブルの上に懸つてゐるランプは晝になつてもまだやはりともれてゐた。大橋帆は旌旗のやうにだらりと垂れた。潮流がなかつたなら船はちつとも動かなかつたのだ。

それまで暫くの間は私は船と遠ざかつてさへゐた。が、かうなつて來ると、努力を二倍にして、もう一度船に追いつかうとし始めた。

もう船から百ヤードとないところまで來た時に、突然また風が吹いて來た。船は左舷に風を受け、身を屈めて燕のやうにすつと波を掠めながら再び動き出した。

私は最初は絶望しかけたが、直ぐにそれは喜びに變つた。船は廻つて私に舷側を向け、——猶も廻つて、私との距離を半分、それから三分の二、それから四分の三と縮めて來た。龍骨前端部の下で波が白く泡立つてゐるのが見えた。革舟の中の私の低い位置からは、船は非常に高いものに見えた。

それから、不意に、私はわかつて來た。それまでは考へる餘裕が——身を動かして自分を救ふ餘裕が殆どなかつたのだ。私が一つのうねり波の頂にゐる時に、スクリーナー船が次のうねり波を越えて下つて來た。第一斜檣が私の頭上にあつた。私は跳び立つて、革舟を水の下へ強く蹴つて飛び上つた。片手で第二斜檣を掴み、片足は支索と轉桁索との間にひつかけた。そしてそこにし

がみついて喘いでゐる時に、鈍い物音がして、スクリーナー船が革舟にぶつつかつてそれを打ち壊して、私が戻る處もなしにヒスパニオーラ號に残されたのだといふことがわかつた。

## 第二十五章 海賊旗を引下す

私が第一斜檣の上につかるかのつからないに、第三斜檣帆が大砲のやうな音を立てて煽られ、今までと反對の舷に風を受けることになつた。さうして反對になつたためにスクリーナー船は龍骨のところまでも震へた。だが、他の帆はやはり風を受けて膨らんでゐたので、次の瞬間にはその斜檣帆は再び煽り返されて、だらりとぶら下つた。

このために私はもう少しのことで海の中へはね飛ばされるところだつた。それで、もう一刻もぐづぐづせずに、第一斜檣を這つてゆき、甲板の上へ頭を先にして轉がり下りた。

私は最上前甲板の風下の側にゐたので、やはり風を受けて膨らんでゐる大橋帆のために、後甲板の或る部分には見えなかつた。誰一人も見當らなかつた。あの謀叛以來一度も洗つたことのない甲板の板には、たくさんの足跡がついてゐた。そして、頸のところを叩き割られた空欄が一本、排水孔の中を生きてゐるもののやうに彼方此方と轉がつてゐた。

突然ヒスパニオーラ號は真正面に風上に向つた。私の背後の斜檣帆はばたばたと大きな音を立

てた。舵はどんとぶつつかつた。船全體が氣持の悪いほど動き震へ、同時に大縦帆の下桁が船の内側に揺れ動き、帆が滑車のところで唸つて、私に風下の後甲板が見えるやうにした。

二人の番人は、なるほど、そこにゐた。赤帽の男は、木挺のやうに硬ばつて、仰向に倒れ、兩腕を十字架のやうに伸ばして、開いた唇の間から齒を見せてゐた。イズレール・ハンズは、舷牆に倚りかかつてゐて、頤を胸につけ、兩手は前へ擴げて甲板に投げ出し、顔は、日に焦けた表皮の下が、脂蠟燭のやうに蒼白かつた。

暫くの間は船は悍馬のやうに跳びはねたり横へ動いたりし、帆は今左舷に風を受けて膨らんだかと思ふと、次には右舷からの風で膨らみ、帆の下桁があちこちと廻るので、そのために橋がぎいぎいと高い音を立てた。それにまた、時々、舷牆を越えてはあつと水煙が飛んで來たり、船首をうねり波に猛烈にぶつつけたりした。今はもう海の底へ沈んでしまつた、あの手製の一方に偏つた革舟よりも、この艦装した大きな船の方がずつとひどく揺れるのだつた。

スクーター船が跳び上る度に、赤帽の男はあちこちと滑り動いた。しかし——見てゐて物凄いいことには——彼の姿勢も、齒を露はしたにやにや笑ひの表情も、さういふ手荒い取扱ひを受けても、少しも變らないのであつた。また、船が跳び上る度に、ハンズの方はだんだんに一層體を沈めて甲板へずり下つてゆくやうで、兩脚は絶えず前へ滑り出し、體全體が船尾の方へ傾いてゆくので、その顔は、だんだんと私に見えないやうになり、たうとう、片耳と、一方の頬髯の擦り切れた捲毛だけしか、見えなくなつてしまつた。

同時に、私は、二人どもの周りに、甲板の板にどす黒い血のはねかつた痕を認めたので、彼等が酔つた怒りにまかせて互に殺し合つたのに違ひないと思ひかけて來た。

私がかうして眺めて不審に思つてゐる間に、靜かな瞬間、船がちつとしてゐる時に、イズレール・ハンズは少し向き直つて、低い呻き聲を出しながら、身を振つて私の最初に見た時の位置に戻つた。その呻き聲は苦痛と死ぬほどの衰弱とを語つてゐて、呻く時の顎をだらりと開けた様子は私の心に哀れを催させた。しかし、林檎樽で竊み聞きした話を思ひ出すと、憐みの情はすつかりなくなつた。

私は船尾の方へ歩いて行つて、大橋のところまで行つた。

「來たよ、ハンズさん。」と私は皮肉に言つた。

彼は大儀さうに眼玉を廻した。が、餘りにひどく弱つてゐて驚きを言ひ現すことも出來なかつた。出來たのは一言「ブランドイーを。」と言ふことだけだつた。

これはもうぐづぐづしてゐてはならぬと私は思つた。で、また甲板を横切つて突然傾いた帆の下桁をくぐり抜けながら、船尾へ走つて行つて、船室昇降口の階段を下つて船室へ入つた。

そこは殆ど想像も出來ないほどの亂雑な有様になつてゐた。錠を下した箇處は何處も皆、海圖を捜すのに打ち壊して開けてあつた。床には泥がべたべたついてゐた。悪黨どもが野營の周りの沼地を涉つて來た後に、ここに坐つて酒を飲んだり相談をしたりしたのだ。一面に眞白に塗つて、鑛金で玉縁にしてある隔壁には、きたない手の痕がついてゐた。何ダースといふたくさんの空縁

が、船の揺れ動くのにつれて、隅で一緒にがちや音が立ててゐた。先生の醫書が一冊テーブルの上に開いてあつて、その紙が半分ほど引きちぎつてあつた。煙草の火をつけるのに使つたのだらうと思ふ。かういふ有様の真中に、ランプはまだやはり薄暗い焦茶色のくすぼつた光を投げてゐた。

私は穴藏へ入つて行つた。樽はみんななくなつてゐたし、罎の方は實に驚くほど多數が飲み干したり投げ棄てたりしてあつた。確かに、謀叛が始まつて以來、彼等は一人でも嘗て素面であられる筈がなかつたのだ。

私はそこそこ捜し廻つて、ブランドイーが幾らか残つてゐる罎を一本見つけたので、ハンズにやることにした。それから自分には、堅パンと、漬けた果物を幾つかと、乾葡萄の大きな房を一つと、チーズを一片見つけ出した。これだけのものを持つて甲板へ出て行き、自分の分は舵手の手には決して届かない、舵の頭の蔭のところに置き、前部の水樽のところまで行つて、水をぐらつと十分に飲んで、それから、漸く、ハンズにブランドイーをやつた。

彼はその罎を口から離すまでには一ジルは飲んだに違ひない。

「ああ、うまかつたな、畜生。こいつがほしかつたんだ！」と彼が言つた。

私は既に自分の場所に腰を下して食べ始めてゐた。

「大分怪我したかい？」と私が尋ねた。

彼はふうふう言ひ出した。といふよりも、むしろ、吠えたと言つた方がいいかも知れない。

「もしあの醫者が船にゐたら、己あ直ぐに癒つたらうがな。だが己にやあ運がねえんだ、この通りにな。が、これ己だけのことさ。そこにゐる間拔めはすつかりくたばつてやがるぜ、其奴は。」と彼は言ひ足して、赤い帽子をかぶつた男を指した。「奴はどのみち船乗ぢやなかつたんだ。ところでお前はどつから来たんだい？」

「うむ、僕はこの船を占領しに来たんだま、ハンズ君。だから、追つて何とかお達しがあるまでは、君は僕を船長と思つてゐてくれ給へ。」と私は言つた。

彼はずるぶん苦々しい顔をして私を見たが、何とも言はなかつた。幾分か顔の色がよくなつては来たが、まだやはり體の工合がひどく悪いやうに見え、船ががたんがたん動く度に、やはり向ふへのめり、ずり下つてゐた。

「それはさうと、ハンズ君、」と私は言ひ續けた。「僕はあんな旗を揚げておくことは出来ないよ。だから、失禮だけれど、あれを引下すぜ。あんなものよりはなない方がましだ。」

そして、私は、再び帆の下桁をくぐり抜けながら、旗索のところへ走つて行き、彼等のいまいましい黒い旗を下して、それを海の中へ抛り投じた。

「國王陛下萬歳！」と私は帽子を打ち振りながら言つた。「そしてシルヴァー船長はもうおはらひ箱だ！」

ハンズは、その間もずつと顔を胸につけながら、鋭くするさうに私を見つめてゐた。

「己の考えぢやあ、」と彼はたうとう言ひ出した。——「己の考えぢやあな、ホーキンス船長、」

お前だつて幾らか岸に著きてえんだろ、なあ。で、相談をするとしようぢやねえか。」  
 「ああ、よからう、喜んで相談に乗るよ、ハンツ君。言つてみ給へ。」と私は言つた。そしてまたむしやむしやと食べ出した。

「この男はな、」と彼は、死骸を力なく顧で示しながら、言ひ始めた。——「オプライエンツで名で、——げびたアイルランド人さ、——この男と己とが、船を戻すつもりで、船に帆を張つたのさ。ところがだ、奴はもう死んぢやつた、奴はよ、——塗みてえに死んぢやつた。で、誰が一體この船を走らせるかね。己の考るとこぢや、己がお前に教へてやらなきやあ、お前はそんなことの出来る人間ぢやねえ。そこでだ、いいかな、おい、お前は己に食物だの飲物だの、それから傷のどこを縛る古い肩巾かハンケチだのを持つて来てくれるんだ。いいかい。さうすりや、己はお前に船の動かし方を教へてやらう。それなら何もかも五分五分だらうと思ふがな。」

「僕も一つ言ひたいことがあるんだがね。」と私が言つた。「僕はキッド船長の碇泊所へは戻らない。北浦へ入つて行つて、あそこで船をそうつと濱に乗り上げるつもりなんだ。」

「なるほど、そりやさうだろ。」と彼は叫んだ。「なあに、己だつてそんなにひでえ阿呆でもねえ、つまりはな。わかつてるよ。わからねえものかい？ 己は自分の賽を投げてみて、負けたんさ。そして勝つてるのはお前なんだ。北浦だと？ まあ、仕方がねえや、ねえとも！ お前の手傳ひをしてこの船を仕置波止場まででも廻してやらうよ、畜生！ してやるとも。」

さて、この言葉には幾分條理の通つたところがあるやうに、私には思はれた。それで、私たち

は即座に相談を纏めた。三分もたつうちに、私はヒスパニオーラ號を追風で易々と寶島の岸に沿うて走らせてゐて、心の中には、正午前に北の岬を廻つて、更に高潮になる前に北浦まで間切つて行き、高潮になつた時に船を安全に濱に乗り上げて、潮が退いて上陸出来るやうになるまで待たう、といふ楽しい希望を抱いてゐた。

それから私は舵柄を括りつけて、下へ降り、自分の衣類箱のところへ行つて、母に貰つた柔かい絹のハンケチを取つて來た。そのハンケチで、私も手傳つて、ハンツは腰に受けた血の出てる大きな突傷を繙帯し、そして、少しばかり食べ、ブランドイーをまた一口二口飲むと、彼は眼に見えて元氣つき、前よりは眞直にも坐り、大きな聲ではつきりも口を利き、すべての點で別人になつたやうに見えた。

風は素晴しく私たちに役立つてくれた。船は追風を受けて鳥のやうにすすつと走り、島の岸は閃くやうに過ぎ去り、眺望は一分毎に變つて行つた。間もなく高臺を通り過ぎ、矮生の松が疎にちらほらと生えてゐる低い砂地の傍をどんどん進み、やがてそこもまた通り越して、島の北の端をなしてゐる岩山の角を廻つてしまつた。

私は自分の新しい司令者たる地位に大いに得意だつたし、日の照つてゐる晴れわたつた天候とこのやうに刻々に違つてゆく海岸の展望とで愉快だつた。今はもう水ももうまい食物もたつぷりあるし、柵壁を脱走したことでこれまでひどく私を責めてゐた良心も、自分がこの大きな獲物を手に入れたために静められた。だから、甲板のあちこちと私の後を追うて嘲弄するやうに見てゐる

舵手の眼と、彼の顔に絶えず浮んでゐる變な微笑さへなかつたなら、私にはその上望むものは何一つなかつたらうと思ふ。その微笑は、何か苦痛と衰弱とのやうなものを含む微笑——裏れた老人の微笑だつた。が、その他に、私の働いてゐるのを狡猾にぢろぢろぢろと見守つてゐる彼の表情には、ちよつぱり嘲弄のやうなものが、どこか陰險なところが、あつたのだ。

## 第二十六章 イズレール・ハンズ

風は、望み通りに吹いてくれて、今度は西風に變つた。それで私たちはそれだけ易々と島の北東の角から北浦の入口まで帆走することが出来た。ただ、投錨することは出来ないし、潮がもつと十分に満ちて来るまでは船を濱に乗り上げる譯にはゆかなかつたので、私たちは無聊に苦しんだ。舵手は停船の仕方を私に教へてくれた。私はずるぶる何度もやつてみて漸くうまくいつた。それから二人とも黙つたまま坐つて、また食事をした。

「船長」と彼はやがて、前と同じあの不愉快な微笑を浮べながら、言ひ出した。「ここに己の船仲間のオブライエンがあるがねえ。お前此奴を船から抛り出してくれちやどうだい。己は大概はものを氣にする男ぢやねえし、此奴をばらしたことなんぞ何とも思つてやしねえ。だが、かうしておいても別に飾りにもなるめえと思ふが、え、どうだね？」

「僕はそんなに力がないし、それにさういふ仕事は嫌ひだ。その男がそここころがつてゐたつて、僕あ構はないよ。」と私が言つた。

「この船は縁起の悪い船さ、——このヒスパニオーラ號はね、ジム。」と彼は眼をしばたたきながら話し續けた。「このヒスパニオーラ號ぢやずるぶるたくさん人が殺されたよ、——お前や己がプリストルで乗り込んでからこつち、可哀さうに死んぢやつた水夫はとでもたくさんなものだ。己あこんな不運な目に遭つたことがねえ。ねえとも。それに、このオブライエンの奴もゐるが、——此奴も死んでる。さうだろな？　ところと、己あ學問がねえが、お前は讀み書きも勘定も出来る子だ。で、ぶちまけて言ふが、お前は、死んだ人間つてもものは死んでそれつきりのものと思ふか、それとも、また生き返つて来るものと思ふかね？」

「人間の體は殺すことが出来るがね、ハンズ君、魂は殺せないものだよ。君だつてそんなことぐらゐはちやんと知つてる筈だ。」と私が答へた。「そこにゐるオブライエンは今ぢや別の世界にゐるんだ。そしてそこから多分僕たちを見てゐるだらうよ。」

「ああ！」と彼は言つた。「やれやれ、そいつあいけねえ、——そいぢや人を殺すなんて暇潰しみてえなもんだなあ。だが、己のこれまでの経験ぢやあ、魂なんてものは大したものぢやねえ。己は魂つて奴を相手に一か八かやつてみてやらうよ、ジム。ところで、お前はもう存分にしやべつたんだから、一つ頼みがあるんだ。お前、あの船室へ降りて行つて、己にあれを——ええと、あのう——えい、畜生！　名が思ひ出せねえぞ。うん、さうさう、お前、葡萄酒を一罇、持つて



来てくんねえか、ジム。このブランディーは己にや強過ぎて頭へ来るんでね。」

ところで、舵手のかうして口籠つたのはちよつと不自然に思はれた。それに、ブランディーよりも葡萄酒の方がよいと言ふのに至つては、私は全然ほんたうにしなかつた。話全體が口實なのだ。彼は私に甲板から去らせたいのだ。——それだけは明かだつた。けれども、どういふ目的でさうするのか、私にはどうしても想像がつかなかつた。彼の眼は決して私の眼と遭はなかつた。その眼は、空を見上げたり、死んでゐるオブライエンをちらりと見たり、あちこちと、上へ下へと、絶えずきよきよしてゐた。その間も始終、彼は微笑し、ひどく気が咎めて極りの悪いやうな様子で舌をべろべろ出してゐるので、彼が何かを企らんでゐるのだといふことは小さな子供にでもわかつたらう。しかし、私は、自分の有利な點が何處にあるかもわかつてゐたし、こんなひどく愚鈍な奴には自分の疑念を最後まで容易に隠しておくことが出来ることわかつてゐたので、直ぐに返事をしてやつた。

島

賣

「葡萄酒かい？」と私は言つた。「その方がずつといいとも。白がいいか、それとも赤がいいかね？」

「さうさな、己にやどつちだつて同じだよ、兄弟。」と彼は答へた。「強くつて、たつぷりありせえすりや、そんなこたあ構ふもんか。」

「よしよし。」と私は答へた。「ポート葡萄酒を持つて来てあげよう、ハンズ君。だが、探さなくちやならんだらうよ。」

さう言つて、私は出来るだけ大きな音を立てて船室昇降階段を駆け降りると、靴を脱いで、圓材の出でゐる廊下をそつと走つて行き、前甲板下水夫部屋の梯子を上つて、船首の昇降口から頭をひよいと出した。私がそんなところにあるやうとは彼が思ひもよらぬといふことは私にはわかつてゐた。しかしそれでも私は出来る限りの用心をした。すると、確かに、私の最悪の疑ひが全くほんたうであるといふことがわかつたのであつた。

彼は両手と兩膝とで自分のゐた場所から體を上げてゐた。そして、動く度に脚がかなりびり痛むやうではあつたが——呻き聲を抑へ隠すのが私に聞き取れたから——それでも、かなりの速さで甲板を横切つて身を曳きすつて行つた。半分ほどのうちに彼は左舷の排水孔のところへ行つて、一巻きの綱の中から、柄までも血塗れになつてゐる長いナイフ、といふよりもむしろ短剣を取り出した。下顎を突き出しながら、ちよつとの間それを見て、切先を手にあてて試してから、ジャケツの懐の中へ急いで隠すと、また元の場所へ戻つて舷牆に凭れかかつた。

これだけわかれば十分だつた。イズレルは動き廻ることが出来る。彼は今では武器を持つてゐる。そして彼が私を遠ざけるのにあれほど骨折つたのなら、私を殺すつもりであることは明かだつた。その後には彼がどうするつもりなのか——北浦からあの濕地の間にある野營まで眞直に島を横切つて這つて行かうとするつもりなのか、それとも、大砲を發射して、彼の仲間たちが眞先に助けに来てくれるのを頼みにするつもりなのかといふことは、無論、私にはわからないことだつたが。

しかしながら、私は彼を一つの點で信頼することが出来ると確信した。といふのは、その點で私たちの利害が一致してゐたからだ。それはこのスクーター船の處置といふことである。私たちは二人とも、船を何處かの避難所へ十分安全に乗り上げさせて、時機の來た時には、なるべく骨も折らず危険もなしに再び海へ出られるやうにしておきたい、と望んでゐるのだ。それで、それをやつてしまふまでは自分の命は確かに助けておかれるだらうと私は考へた。

このやうに心の中でいろいろと考へてゐる間も、私は體を遊ばせてはゐなかつた。そつと船室へ戻つて、また靴を穿き、手當り次第に葡萄酒の罇を一本掴むと、それを申譯の理由に持つて、再び甲板に出て行つた。

ハンズは私が降りて行つた時のやうにしてゐて、すつかり體を丸めて、光にも堪へられないほど衰弱してゐるとでもいつた風に眼瞼を伏せてゐた。しかし、私が來ると顔を上げ、よく慣れた手付で罇の頸を叩き折り、「運がいいやうに！」といふ彼の氣に入りの乾杯の言葉を言ひながら、ぐうつと飲んだ。それから暫くはぢつとしてゐるが、今度は嚙煙草を一本ひつぱり出して、私に

一片切つてくれと頼んだ。

「そいつを一片切つてくんねえ。己はナイフを持つてゐねえから。よし持つてたつて、切るだけの力もねえ。ああ、ジム、ジム、己あやり損つたやうだよ！ 一片切つてくれ。それがどうやらこの世の噛み納めらしいよ、兄弟。己あもう墓場へ行くんだ、きつとな。」

「よし、」と私が言つた。「煙草を切つてあげよう。だが、もし僕が君で、自分がそんなに工合

が悪いと思つたら、キリスト教徒らしくお祈りするがねえ。」

「何故だい？」と彼は言つた。「え、何故だか言つてくれよ。」

「何故だつて？」と私は叫んだ。「君はつい今しがた死人のことを僕に尋ねたぢやないか。君は自分の信用を破つたんだ。君は罪を犯したり偽りを言つたり人の血を流したりして暮して來たんだ。今だつて君の殺した人間が君の足許にころがつてゐる。それなのに君は何故つて訊くんだね！ 神様のお慈悲をお願いするためだよ、ハンズ君、そのためさ。」

私は、彼が血塗れの短劍をポケットの中に隠してゐて、それで私を殺してしまはうと企らんでゐることを思ふと、思はず少し熱して話した。彼の方は、葡萄酒をぐつと飲むと、ひどく眞面目くさつて口を利き出した。

「三十年も己は方々の海をわたり廻つて、その間にやい目にも悪い目にも遭へば、もつとい目にももつと悪い目にも遭つたし、いい天氣にも悪い天氣にも遭つたし、食物がなくなつたこともあれば、斬り合ひをやつたこともあるし、その他いろんな目に遭つたよ。ところでね、實際のところ、己あいい事をしていい目に遭つたつてこたあまだ一度だつてねえ。先に打つてかかる奴が己あ好きだ。死人は咬みつかねえ。これが己の考えといつたところさ、——アーメン、まあそれでいいや。時にねえ、おい、」と彼は、急に口調を變へて、言ひ足した。「こんな馬鹿つ話はこれつくれえでたくさんだ。潮がもうずるぶんさして來たぜ。さあ、ホーキンス船長、己の指圖する通りにやるんだ。さうすりや船は直ぐに走り出して片附いちまはうぜ。」

すつかりで二マイル足らず船を走らせればよかつたのだ。けれどもこの航行はなかなか面倒だつた。この北の碇泊所の入口は狭くて浅い上に、東と西とに陸があるので、スクーター船を入れるにはよほどうまく操縦しなければならなかつた。が、私は上手な機敏な助手だつたと思ふし、ハンズは優れた水先案内人だつたと信ずる。といふのは、船は、見るも氣持のよいくらの正確に手際よく、代る代る針路を變へて、岸を掠めながら、ひらりひらりと身を交すやうにして入つて行つたからである。

岬を通り過ぎるや否や、陸地が私たちのぐるりに迫つて來た。北浦の岸は南の碇泊所の岸と同様に樹木がこんもりと生ひ茂つてゐた。が灣内はもつと狭くて長く、廣い河口のやうで、實際またさうなのであつた。私たちの真正面の、南の端に、もうぼろぼろに腐朽してしまつて見る影もない船が一艘見えた。もとは三本櫓の大きな船であつたのだが、ずるぶん永い間雨風に曝されてゐたので、ぼたぼた水を滴らしてゐる海藻が大きな蜘蛛の巣のやうに周圍にぶら下つてゐたし、甲板には海岸に生える灌木が根をおろしてゐて、今ちやうど花が一杯咲き亂れてゐた。それは實に傷ましい光景であつたが、しかしまたこの碇泊所が穩かなところであることを私たちに示してゐた。

「おい、あそこを見ろよ。」とハンズが言つた。「船を乗り上げるにや持つて來いの處があらあ。細かな平たい砂地で、ちつとの風もねえし、ぐるりにやあずつと樹があるし、あの古船の上をや庭みてえに花が咲いてるぜ。」

「で、乗り上げたら、また船を出すにはどうするんだらう？」と私は尋ねた。

「なあに、それあかうさ。」と彼が答へた。「干潮の時に綱を持つてあつちの向側の岸へ行くんだ。あのでつけえ松の樹のどれか一つにその綱をぐるりと巻く。それからそいつを持つて歸つて、揚錨絞盤に巻いて、潮を待つてゐるんだ。満潮になつたら、みんなでその綱をひつれば、船はひとりで出るみてえにすうつと出るよ。さあさあ、坊や、用意するんだ。船着場が近いのに、船足が速過ぎるぞ。少し面舵——さうだ——ようそろ——面舵——少し取舵——ようそろ——ようそろ！」

そんな風に彼は命令を下すと、私は息もつかずにそれに従つた。そのうちに、突然、彼は「さあ、おい、開け！」と叫んだ。そこで私は舵輪をぐつと風上に操つた。するとヒスパニオーラ號は急速にぐるりと廻つて、低い樹の茂つた岸をめがけて眞向になつて走つた。

かういふ操縦に興奮してゐたために、それまでは私が絶えずぶん油断なく舵手を警戒してゐたのが、幾分お留守になつてゐた。その時でさへ、私は、船が水底に觸れるのを今か今かと待ちながら、やはり非常に面白がつてゐたので、自分の頭上に懸つてゐる危難をすつかり忘れてしまひ、右舷の舷牆の上から首を伸ばしながら、船首の前に廣く擴がつてゐる漣を見つめてゐたのである。それで、急に何だか不安になつて、頭を振り向けなかつたなら、私はひとたまりもなく殺されてしまつたことであらう。恐らく、靴か何かのきしむ音が聞えたのか、彼の影の動くのが眼尻で見えたのかも知れない。それとも、恐らく、猫のやうな本能のためであつたかも知れない。

が、とにかく、私が振り返つた時には、果して、ハンズが、右手に例の短剣を握つて、私の方へ既に半分も近よつてゐたのであつた。

私たちは眼と眼とがぶつかつた時には二人とも大きな聲を立てて叫んだに違ひない。しかし、私の聲は恐怖の金切聲であつたが、彼のは突つかかつて来る牡牛のやうな憤怒の唸り聲だつた。それと同じ瞬間に彼は前へ躍りかかり、私は船首の方へ横さまに跳んだ。その時に、私は掴んでゐた舵柄を放すと、それが風下の方へ烈しく跳ねた。このために私は命が助かつたのだと思ふ。といふ譯は、その舵柄がハンズの胸にあたつて、彼は暫くの間びたりと止つたからである。

彼が立直れないうちに、私は彼に追ひつめられてゐた隅つこから無事に出て、甲板中をあちこち逃げ廻れるやうになつた。大橋の直ぐ前で立ち止つて、ポケットからピストルをひき出すと、彼がもう向を變へて眞直に私をまた追つて來てゐたけれども、冷静に狙ひを定めて、引金を引いた。撃鉄はかちつと落ちたが、火花も出なければ音もしなかつた。點火薬が海水のために役に立たなくなつてゐたのだ。私は自分の不注意がいまいまいましかつた。何故もつとずつと前に自分の唯一の武器に火薬を入れ換へ弾丸を籠め換へておかなかつたのか？ それをしておいたなら、今のやうに、この屠殺者の前に逃げ廻つてばかりゐる羊のやうな目に遭はなかつたらうに。

彼は負傷してはゐるが、素速く動くことは驚くべきほどで、彼の白髪交りの髪の毛は顔に振りかかり、その顔は焦心と憤怒とで英國商船旗のやうに眞赤だつた。私は自分のもう一挺の方のピストルを試してみる暇もなかつたし、また、實際、役に立たないにきまつてゐると思つたので、

試してみようといふ氣持も大してなかつた。ただ、一つのことだけは私にははつきりわかつてゐた。私はただ彼の前から逃げるだけではない。そんなことをしてゐれば、彼は、ちよつと前に私をもう少しで船尾へ追ひ込ませようとしたやうに、おきにまた船首へ追ひ込んでしまふだらう。さうして掴まつたが最後、あの九インチか十インチもある血塗れの短剣でぐざりとやられて、それがこの世の最後となるだらう。私は、かなりの大きさの大橋に掌をあてて、全神経を張りつめて待つてゐた。

私が逃げ廻るつもりだといふことを見て取ると、彼も立ち止つた。そして暫くの間は、彼の方は剣で打つてかかる眞似をし、私の方はまたそれに對應する動作をしてゐた。それはまるで私が故郷の黒丘入江の岩のあたりでよくやつたやうな遊び事であつた。だが前には、勿論、今のやうに胸をひどくどきどきさせてやつたことは一度もなかつた。それでも、やはり、それは子供の遊び事だつた。そして、私はこんな腿に負傷をしてゐる大分年とつた水夫なんぞに負けるものかと思つた。實際、私は大いに元氣が出かかつてゐたので、この事件の結末がどうなるかといふことを二三ちらちらと考へてみる事が出来た。そして、自分がこれを永びかせる事が出来るといふことは確かにわかつたが、また、結局逃げおほせてしまふ見込がないといふこともわかつた。

さて、かういふ有様になつてゐるうちに、突然ヒスパニオーラ號は乗り上げて、ぐらぐらとし、ちよつとの間砂地に擱坐したかと思ふと、どつと左舷へ傾いて、甲板が四十五度の角度になり、

一桶ほどの水が排水孔の中へはね込み、甲板と舷牆との間に水溜りのやうになつて溜つた。

私たちは二人ともその途端にひつくり返り、二人とも殆ど一緒になつて排水孔の中へ轉がり込んだ。死んでゐる赤帽の男も、兩腕をやはり擡げたまま、硬ぼつて私たちの後から轉げて來た。私たちは實際極く近くなつてゐて、私の頭が舵手の脚にごつんとぶつつかつて私の齒が音を立てたくらるであつた。さうして打ちあつたけれども、再び立ち上つたのは私の方が先であつた。何故なら、ハンズは死體と絡み合つてゐたからである。このやうに船が急に傾いたために甲板は走り廻る場所ではなくなつてしまつた。私は何か新たな逃げる方法を見つけないければならなかつた。それも直ぐ見つけなければならなかつた。敵は私に觸れんばかりのところにあるからだ。咄嗟に私は後、(註七五)檣の横靜索に跳びついて、索を手繰りながらずんずんと攀ぢ登り、檣頭横桁に腰を下すまでは息もつかなかつた。

私はさうして機敏にやつたために助かつたのだ。私が上へ逃げ上つてゐる時に、短劍が私の下半フイートとないところに突き刺さつたのである。そして、イズレール・ハンズが口をぼかんと開け顔を私の方へ振り上げながら突つ立つてゐる有様は、全く驚きと失望との彫像のやうだつた。私はちよつと暇が出來たので、時を移さず自分のピストルの點火薬を換へ、それから、一挺が何時でも使へるやうになると、念に念を入れるために、もう一挺の方の彈薬を取り出して、それも初めから新たに裝填し直しにかかつた。

私がかういふ事を始めたのでハンズはびつくり仰天した。彼には形勢が彼の方に悪くなつてゐる

ることがわかりかけた。そして、どうしようかと明かに躊躇した後、彼も亦横靜索に大儀さうに掴まつて、短劍を齒で啣へながら、ゆつくりと苦しさに登り始めた。負傷した足をひきずり上げるには、非常に時間もかかり、幾度も呻き聲を出さねばならなかつた。それで、彼が三分の一より上へさほど上らないうちに、私は悠々と自分の準備をすましてしまつた。それから、どちらの手にもピストルを持つて、彼に話しかけた。

「ハンズ君」と私は言つた。「もう一步でも上つてみ給へ。君の腦天を撃ち抜くよ！ 死人は咬みつかない筈だね。」と言ひ足して、私はくつくつと笑つた。

彼は直ぐさま止つた。その顔がびりびり動いてゐるので、何かを考へようとしてゐるのだといふことが、私にはわかつた。ところがその考へ方がいかにもろろしてゐて骨折つてゐるので、私は、今の安全な立場にゐて、聲を立てて笑つた。たうとう、彼は一二度唾を嚙みこんでから、口を利き出したが、顔にはやはり極度に困りきつた同じ表情を浮べてゐた。口を利くために口から短劍を取らねばならなかつたが、しかしその他には彼は少しも動かさずにゐた。

「ジム」と彼は言つた。「已たちあどうも料簡れいけんがいけねえやうだ、お前も已もな。で、仲直りしなけりやなるめえ。船があんなによろけせえしなけれあ、已はお前をつかめえたんだがな。だが已にやあ運がねえんだ、全くよ。で、已は降参しなくちやならねえやうだ。船長をしたこともある人間が、お前みてえな小僧つ子に降参するなあ、辛つらえこつたよ。なあ、ジム。」

私は彼の言葉を面白がつて聞きとれ、微笑し續けて、飼場の雄鶏のやうに得意になつてゐた。

と、はつと思ふ間に、彼の右手が肩の後へ行つた。何か空気を切つて矢のやうにびゆうつと飛んで来た。私は打たれた感じがしたかと思ふと次には烈しい痛みを感じ、肩のところを櫓に突き刺された。その瞬間の怖しい痛みと驚きとで——それは自分の意思でしたのだとは私は殆ど言へないし、意識した狙ひはなしにやつたのだと確信するが——私のピストルが二挺とも發射して、二挺とも私の手から離れた。落ちたのはそのピストルだけではなかつた。息の詰つたやうな叫び聲と共に、舵手は横綱索を掴んでゐる手を放して、頭を先にして海の中へ落ち込んだのである。

## 第二十七章 「八銀貨」

船が傾いてゐるために、櫓はずつと遠く水の上へ突き出てゐて、櫓頭横桁の私の棲木の下には、灣の水面の他に何もなかつた。ハンヅはさほど上まで上つてゐなかつたので、従つて私よりは船の近くにゐて、私と舷牆との間に落ちた。彼は一度だけ白波と血との石鹼泡のやうになつた水面へ浮び上つたが、それからまた沈んで、それつきり浮き上らなかつた。水が静まると、船の舷側の影の、綺麗な、びかびかする砂の上に、彼が體をちぢこめて横つてゐるのが見えた。一二尾の魚が彼の體の前をすいすいと通つて行つた。時々、水が震へると、彼が起き上らうとでもするやうに少し動いたやうに見えた。しかし、それでも、彼は撃たれた上に溺れたのだから、すつかり

死んでゐたのだ。私を殺さうとしたその場所で魚の餌食になることになつたのだ。

私はこのことを確信するや否や、急に氣持が悪くなり、氣が遠くなり、恐しくなり出して来た。熱い血が背中と胸とにたらたらと流れてゐた。短劍が私の肩を櫓に突き刺してゐる箇處は、熱した鐵のやうに焼けつくやうに思はれた。だが、私を苦しめたのは、かういふ實際の痛みはさほどでもなかつた。それなら自分には聲も立てずに我慢が出来るやうに思はれたからだ。私を惱ませたのは、櫓頭横桁からあの靜かな綠色をした水の中の舵手の死體の傍へ落ちはしまいかといふ、心に抱いてゐる恐怖であつた。

私は爪がづきづきするまで両手でしがみつき、危険を見まいとでもするやうに眼を閉ぢた。すると次第に心が落著いて来て、動悸もいつもの速さに靜まり、再び我に返つた。

最初に思つたのは短劍を抜き取らうといふことだつた。が、餘りに強く突き刺さつてゐたのか、それとも怖くて出来なかつたのか、とにかく私は烈しく身震ひをして止めてしまつた。ところが、全く奇態なことには、さうして身震ひしたためにその事が出来てしまつた。ナイフは、事實、もう少しのことで全く外れるところだつたのだ。それは皮膚をほんのちよつとだけ刺してゐたので、身震ひするとそこが裂き取れたのである。尤も、血は前よりは盛んに流れ出たが、私は再び自分の自由になり、ただ上衣とシャツとを櫓に打ちつけられてゐるだけとなつた。

この上衣とシャツとは急に體をぐいと動かして切り取り、それから右舷の横綱索を傳つて再び甲板に戻つた。私は心弱くなつてゐたので、イズレールがついさつきそこから落ちた、水の上へ

差し懸つてゐる左舷の横静索を、再び傳つて降りる気にはどうしてもなれなかつたのだ。  
私は船室へ下りて行つて、自分の傷に出来るだけのことをした。その傷はするぶん痛んだし、まだどんどん出血してゐた。しかし深い傷でもなければ危険な傷でもなく、また腕を動かしてもひどく苦痛だといふこともなかつた。それから私はあたりを見廻し、船が今では或る意味で自分のものだつたから、その船の最後の乗客をも船から掃ひ出してやらうと思ひ立つた。——例の死人のオブライエンである。

彼は、前に言つたやうに舷牆に突き當つて、そこで、氣味の悪い不恰好な人形のやうにころがつてゐた。なるほど人間の大きさはしてゐるが、人間らしい色や人間らしい綺麗さとは何と違つてゐることだらう！ その場所にゐてくれたので、私は容易に彼を始末することが出来た。それに、私は悲惨な冒険に慣れたために死人に對する恐怖が殆どすつかりなくなつてゐたので、糠の囊か何かのやうに彼の腰を掴んで、ぐつと一度持ち上げると、船の外へ投げ落した。彼はどぶんと音を立てて水の中へ沈んで行つた。赤い帽子は取れて、水面に浮んだ。そしてはねかつた水が靜まると、彼とイズレルとが並んで横つてゐるのが見えて、二人とも水が揺れるにつれてゆらゆらしてゐた。オブライエンは、まだ極く若い男なのに、頭がひどく禿げてゐた。その禿頭を、彼は自分を殺した人間の膝につけて横つてゐた。そして敏捷に動く魚がその二人の上をあちこちと泳いでゐた。

私は今では船にただ一人となつた。潮はつい今變つたばかりであつた。太陽はやがて沈まうと

してゐて、既に西岸の松の樹の影がちやうど碇泊所のあたりに射しかけて、甲板の上に模様をなして落ちてゐた。夕風が吹き起つてゐて、それは東にある峯の二つある山のためによほど受け止められてはゐるけれども、それでも索具は靜かに少し歌ふやうに鳴り出してゐたし、垂れてゐた帆はあちこちとばたばたし出してゐた。

私は船が危険になつたのがわかりかけた。で、斜橋帆を急いで下して甲板へばたばた落した。が大橋帆の方はそれよりは厄介だつた。勿論、スクーナー船が傾いた時に、帆の下桁が舷外へぐらりと廻つて、帆桁帽と一二フィートの帆布とが水の中へ入つてさへゐた。このために尙更危険だと私は思つた。それでも、非常に強く張りつめてゐるので手を出すのが恐しいやうな氣もした。たうとう、私はナイフを取り出して揚索を切つた。すると斜桁上外端が直ちにばつたりと落ちて、弛んだ帆布の大きな腹部が水の上に擴がつて浮いた。そして、どうひつばつてみても下索は動かすことが出来なかつたので、私に出来たのはそれだけだつた。それ以上のことでは、ヒスパニオリ號は、私自身と同様、運に頼るより他はなかつた。

この時分には碇泊所全體はすつかり影になつてしまつてゐたが、——落陽の最後の光線が、森の隙間から射して来て、あの破船を覆うてゐる花に、寶石のやうにきらきらと輝いたのを、私は今も忘れられない。もう寒くなりかけて来た。潮は急速に外海の方へ流れて行つてゐて、スクーナー船は益々傾いて船梁が垂直になるほどになつた。

私は船首の方へ這つて行つて下を覗いた。よほど浅いやうだつたので、まさかの時の用心にあ

の切れてゐる錨索に両手で掴まつて、そうつと船の外へ體を下して行つた。水は私の腰までもなかつた。砂は固くて、漣の痕が一面についてゐた。それで、大橋帆を灣の水面に廣く曳きすつて、傾いてゐるヒスパニオーラ號を後に残して、私は大元氣で岸まで徒渉した。殆ど同時に太陽は全く沈み、風は揺れ動いてゐる松林の間で薄暮の中を低くひゆうひゆうと鳴つてゐた。

ともかく、たうとう、私は海から上つたし、また空手で戻つて來たのでもなかつた。あそこに、ヒスパニオーラ號が、たうとう海賊どもの手からすつかり離れて、いつでも味方の人々を乗せて再び海に出られるやうになつてゐるのだ。私は何よりも柵壁へ歸りついて自分の手柄話をしたくてたまらなかつた。あるひは私は自分のやつた隠れ遊びについてちよつとくらゐ叱られるかも知れない。がヒスパニオーラ號を取戻したことはさういふ文句をすつかり決著させてしまふだけの答になるのだ。そして私はスモレット船長でも私がただ暇潰しをしてゐたのではないと言つてくれるだらうと思つた。

そんなことを思ひながら、素敵な元氣で、丸太小屋の味方の人たちの方へ戻りかけた。ふと、キッド船長の碇泊所へ注いでゐる川の中の一番東にあるのが自分の左手にある二つ峯の山から流れ出てゐることを思ひ出したので、川幅が狭い間に流れを渡つておかうと思つて、その方向へ進路を曲げた。森はかなり開けてゐて、低い方の山嘴に沿うて行くと、やがてその山の角を廻つてしまひ、それから間もなくその川を脛の半ばまで水に入つて涉つた。

涉つてしまふと、私がああ置去り人のペン・ガンに出會つた處の近くへ來た。それで眼を四方

へ配りながら、一層用心して歩いた。もう殆ど薄暗くなつてゐて、私が二つの峯の間の割目が開けてゐる處まで來ると、一條のゆらゆらした火の光が空に映えてゐるのに氣がついた。そこにはあの島の男が盛んに火を燃して夕食の料理をしてゐるのだらう、と私は考へた。しかし、どうして彼がそんなに不注意に自分の居所を示してゐるのかと、心の中で不審に思つた。といふのは、あの光が私に見えるくらゐだから、海岸の沼地に野營してゐるシルヴァーの眼に入らない譯がなかつたからである。

だんだんと夜は益々暗くなつて來た。私はただ自分の目指す方向へめちやくちやに進んで行くだけだつた。私の背後の二つ峯の山も、右手の遠眼鏡山も、だんだんと微かにぼんやりして來た。星も稀で光が薄かつた。私は、自分のさまよひ歩いてゐる低地で、絶えず藪の中で躓いたり砂の凹穴の中へ轉がり込んだりした。

急に何だかあたりが明るくなつた。見上げると、淡い微かな月光が遠眼鏡山の頂上に射してゐた。それから間もなく、何か幅の廣い銀色のものが樹々の後に下へ低く動いてゆくのが見え、月が昇つたことがわかつた。

これを助けにして、残りの道程を急いで進み、時には歩いたり、時には走つたりして、氣をあせりながら柵壁へ近づいて行つた。それでも、柵壁の前にある森の中へ入りかかつた時には、さすがに歩みを弛めて少しは氣をつけて進むだけの用心はした。誤つて自分の味方の人に撃ち倒されては、私の冒険も情ない結末となつてしまふからだ。



月はだんだんと高く昇つた。その光は森の幾分開けた箇處を通して此處彼處に廣く注ぎ始めた。ところが、私の眞正面に、それとは違つた色の光が樹立の間に見えて來た。それは赤い熱さうな光で、時々少し暗くなり、——ちやうど、くすぶつてゐる篝火の餘燼のやうであつた。

どうしても私にはそれが何なのかわからなかつた。

たうとう私は開拓地の縁のところまで下つて來た。その西端は既に月光を浴びてゐた。その他の處は、丸太小屋も、まだ黒い影の中にあつて、長い銀色の光線で市松模様になつてゐた。小屋の向側には、大きな焚火が燃え盡きて明るい餘燼となつてゐて、赤い強い反射光を放ち、柔かな淡い月光とひどく對照してゐた。人影一つも動かさず、風の音の他には物音一つしなかつた。

私は、心の中で非常に不審に思ひながら、また恐らく少しは怖くも思ひながら、立ち止つた。大きな火を焚くといふことは味方の習慣ではなかつた。實際、私たちは、船長の命令で、薪には幾分けちなくらゐであつたのだ。それで、自分のゐない間に何か悪いことになつたのではないかと気がかりになり出した。

私は絶えず影にゐるやうにして東側をこつそりと廻つてゆき、闇の一番濃い、都合のよい處で、防柵を越えた。

念に念を入れて、私は四つん這ひになり、何の音も立てずに小屋の隅の方へそろそろと進んだ。もつと近づくと、私の心は急に大いに氣樂になつた。薪の聲といふものは本來は氣持のよいものではないし、他の場合には私はそれに苦情を言つたことも度々あつたが、この時だけは、味方の

人たちが眠りながら一緒に大きく安らかに鼾をかいてゐるのを聞くと、音楽を聞くやうな氣がした。海上で當直夜番の叫ぶ聲、あの美しい「變りなあし。」といふ聲でも、これ以上に心強く私の耳に響いたことはなかつた。

その間にも、一つのことだけは疑ひがなかつた。あの人たちの夜番の仕方が非常に悪いといふことである。もし今かうして忍び寄つて來てゐるのがシルヴァーと彼の一味の者であつたなら、一人だつて夜明の光を見られまい。それといふのも船長が負傷してゐるからのことだ、と私は思つた。そして、かうして當番に就く者も少いほどの危険な状態に皆を残して出て來たことに對して、私はまた烈しく自分を責めた。

この時分には私は戸口のところまで行つて立ち上つてゐた。内はただ眞暗なので、眼では何一つ見分けることが出來なかつた。音の方は、一樣な單調な鼾の聲と、時々、私にはどうしてもわからぬ、ばたばたしたり、こつこつしたりする、小さな音とが聞えた。

兩腕を前へ差し出しながら私は落著いて入つて行つた。私は自分の場所に寝てゐて、朝になつて皆が私を見て驚く顔を見てやらう。(さう思つて、私は聲を立てずに含み笑ひをした。)

私の足が何か蹴ると動くものにぶつかつた。——それは眠つてゐる人の脚だつた。その男は寝返りをうつて唸つたが、眼は覺さなかつた。

と、その時、突然、闇の中から鋭い聲が起つた。

「八銀貨！ 八銀貨！ 八銀貨！ 八銀貨！」と小さな硬白の廻る音のやうに切間

もなく變化もなしに續けた。  
シルヴァーの緑色の鸚鵡のフリント船長だ！ こつこつと木の皮をつついてゐるのが聞えたのは、その鳥だつたのだ。どの人間よりもよく夜番をして、かうしてそのうるさい繰返し文句で私の來たことを知らせたのは、その鳥だつたのだ。

私は氣を取直すだけの暇もなかつた。鸚鵡の鋭い速い聲で、眠つてゐた人々は眼を覺して跳び起きた。そして、力強い罵り言葉と共に、シルヴァーの聲が叫んだ。――

「誰だ？」

私は振り向いて逃げようとしたが、一人の人に猛烈にぶつつかつて跳ね返り、また走り出すと今度は別の男の腕の中へ跳び込んでしまつた。その男は私を掴んでしつかりと抱きすくめた。

「松明を持って來い、ディック。」私がさうして確實に捕へられた時にシルヴァーが言つた。すると、一人の男が丸太小屋から出て行つて、やがて火のついてゐる燒木を持つて戻つて來た。

鳥

## 第六篇 シルヴァー船長

### 第二十八章 敵の宿營で

松明の赤い光が丸太小屋の内部をばつと照すと、私の懸念してゐた中でも一番悪いことが起つてゐるのがわかつた。海賊どもが小屋も食糧も占領してゐた。前のやうに、コニャックの樽もあれば、豚肉やパンもあつた。そして、私の恐怖を十倍にも増したことは、捕虜の影もなかつた。私は味方の人たちが皆殺されてしまつたのだ判斷するより他はなかつた。そして、自分もそこにゐて皆と一緒に死ななかつたことを思ふと、非常に心苦しかつた。

そこにはみんな海賊が六人ゐた。他の奴らは生き残つてはゐなかつたのだ。六人の中の五人までは立つてゐて、酔つて寢入つたばかりのところを不意に起されたので、赤い腫れぼつたい顔をしてゐた。六人目の者は脇をついて體を起してゐるだけだつた。彼は死人のやうに蒼い顔をしてゐて、頭に巻いてゐる血のにじんだ繻帯は、彼が近頃負傷したのであつて、しかもつい先頃手當をしたのだといふことを語つてゐた。私は、あの大攻撃の時に撃たれて森の中へ逃げ戻つた男がゐたことを思ひ出し、此奴がその男だといふことを疑はなかつた。

鸚鵡はのつぼのジョンの肩にとまつて、羽毛を嘴で整へてゐた。ジョン自身も、私のいつも見

慣れてゐるよりは幾らか蒼ざめてゐたし、もつといかつい顔をしてゐると、私は思つた。彼はまだ、例の談判にやつて来た時の上等な廣幅羅紗の一著を着てゐたが、それは、泥土でよごれたり、森の鋭い茨で裂けたりして、ひどく傷んでゐた。

「ふん、さうか、」と彼は言つた。「こいつあジム・ホーキンスだな、畜生！　ちよいとお立寄り、つてどこかね、え？　よしよし、まあ、友達らしく扱つてやらう。」

さう言ふと彼はブランドリーの樽に腰を下して、パイプに煙草を填め始めた。

「その松明を貸してくれ、ディック。」と彼は言ひ、それから、煙草に火を十分つけてしまふと、「ああ、それでいいよ。」と言ひ足した。「その火を薪の山の中へ突つ込んでくれる。そいから、お前たち、紳士方、坐つたらどうだい！　——ホーキンス君のために立つてなくなつていいんだぜ。ホーキンス君はお前たちをゆるして下さるだらうよ。そいつあ間違えつこなしさ。ところで、ジム、——と煙草を止めて、——「お前がここへやつて来たなあこのジョン爺も全く以て嬉しいが驚いたよ。お前がはしつこい奴だつてこたあ己が初めてお前を見た時からわかつてるさ。だが、これあどうも己にやまるで合點がいかねえぞ、全くな。」

以上の言葉に對しては、十分想像されるであらうやうに、私は何の返事もしなかつた。彼等は私に壁を背にして立たせてゐた。私は、臆せずシルヴァアの顔を見ながら、そこに立つてゐた。表面はさうぶんだ膽さうにしてゐたつもりであるが、心の中には暗澹たる絶望を抱いてゐた。シルヴァアは大いに落著いてパイプを一二服吹かし、それからまたしやべり續けた。

「ところで、なあ、ジム、お前がここへ来たからにやあ、ちつとばかし言つて聞かせることがあるんだ。己あいつもお前が好きだつた、お前がな。元氣な小僧だし、己の若くつていい男だつた時に生寫しだからよ。いつも己はお前が仲間に入つてくれて、紳士で死んで貰えてえもんだと思つてた。ところが、なあ大將、今度はお前はどうもさうしなくつちやならねえ。なるほどスモレット船長は立派な海員だ。それあ己もいつだつて白状するさ。だが紀律が厳し過ぎらあ。『義務は義務だ。』つて奴さんはよく言ふ。またそれにやあ違えねえ。お前もああの船長に近よらねえやうにしるよ。あの醫者だつてお前にやひどく怒つてゐるぜ、——『恩知らずの腕白者』つて言つてたんだ。で、手取り早えとこを言つちまへば、まづかうだ。お前は自分の組の方へは歸れねえ。彼奴らはお前に歸つて貰えたかあねえんだからね。そこで、お前が一人つきりでまた一つの組を起すとなると、こいつあどうも淋しからうて。で、さうするんでなけりや、お前はシルヴァア船長の組に入らなきやなるめえな。」

ここまではよかつた。とすると、味方の人たちはまだ生きてゐるのだ。私は、船室の人たちが私の脱走を怒つてゐるといふシルヴァアの言葉の眞實であることを幾分か信じたけれども、自分の聞いたことのために、悲しむよりは、むしろほつとした。

「お前が己たちに掴まつてゐるつてことは己は何も言はねえ。」とシルヴァアが言ひ續けた。「ほんとはさうなんだがね、間違えなしにな。己あ萬事相談づくでやる人間だ。嚇していいことになつたつてこたあ己あ一度も知らねえ。もしお前が働いてくれる氣ならだ、なあ、こつちへつくが、

いい。もし厭ならばだ、ジム、さうさ、自由に厭だつて返事するんだ。——自由で結構さ、兄弟で、どんな海員だつてこれより公平なことが言へる者があつたら、お目にかかりてえや！」

「それぢやあ、僕は返事をしなきゃいけないのかい？」と私はひどく震へた聲で尋ねた。彼のこの鼻であしらふやうな話の全體にわたつて、私は自分に迫りかかつてゐる死の威嚇を感じさせられ、頬はほてり心臓は胸の中で苦しいほど動悸うつた。

「なあ、おい、」とシルヴァーは言つた。「誰もお前に無理強ひはしねえ。篤と考えろよ。己たちあ一人だつてお前をせき立てはしねえつもりだ、兄弟。お前と一緒にゐると愉快で時のたつのがわからねえくれえだからなあ。」

「ではね、」と私は少し大膽になつて言つた。「もし僕がどちらかにきめなきゃならないのなら、僕は、ほんたうのことや、あんた方がどうしてここにゐるのか、僕の方の人たちが何處にゐるのかつてことを、知らして貰ふ権利がある譯だねえ。」

「ほんとのとこだと！」と海賊の一人が太い唸り聲で私の言葉を繰返して言つた。「ふん、そいつがわかつた奴は仕合せ者だらうて！」

「おい、お前に話しかけられるまではお前は黙つて控へてゐるがいいんだ。」とシルヴァーはその男に向つて荒々しく呶鳴つた。それから、元の優しい口調で、私に答へた。「昨日の朝のことだ、ホーキンス君、折半直に、リヴジューさんが休戦旗を持つてやつて来たんさ。『シルヴァー船長、お前は裏切られたんだ。船は行つちまつたぞ。』つてお醫者は言ふのだ。さうさな、多分己た

ちは酒を飲んで、盃を廻す景氣づけに唄でも歌つてゐたんだらう。さうぢやねえとは言はねえ。ともかく誰一人氣をつけてゐた者はなかつたんだ。で、外を見ると、驚いたな！ あの古船はるねえんさ。あの時のみんなみてえなぼかんと間拔面をした阿呆どもは見たことがねえな。いや、この己が中でも一番ぼかんとしたつて言つても、間違えなしさ。『ところで、相談をしようぢやないか。』つてお醫者は言ふんだ。己たちは相談をした。あの人と己とな。それで、己たちはここにゐることになつたつて譯さ。食物も、ブランデーも、丸太小屋も、お前たちが氣を利かして切つといてくれた薪も、まあ言はばこの結構な舟を橋頭横桁から内龍骨までそつくり、貰つたんだ。あの人たちの方は、てくてく出て行つた。何處にゐるのか己にやわからねえ。」

彼は再び靜かにパイプを吸つた。

「それからな、」と彼は話し續けた。「お前がその頭に、お前もその條約の中へ入つてゐるんだと思ひこむといけねえから、一番おしめえに聞いた言葉を聞かしてやらう。『あんた方は何人で立退くんですかい？』と己が言つたんだ。すると、『四人だ。』つてあの方は言ふのさ。——『四人で、その中一人は負傷してゐる。あの子供は、何處にゐるのか俺は知らん、畜生。また何處にゐるよと大して構はん。俺らは彼奴にやほとほと閉口した。』かうあの方は言つてたぜ。」

「それだけかい？」と私が尋ねた。

「さうさ、お前に聞かさんけりやならんことはこれだけだよ、坊や。」とシルヴァーが答へた。「と今度は僕がどちらかきめなきゃならないんだね？」

「で今度はお前がどつちかきめなきやならねえんだ。違えねえ。」とシルヴァーが言った。  
 「ぢや言はう。」と私は言った。「僕は、自分がこれから先どんなことを覚悟しなけりやならな  
 いかよくわからないやうな馬鹿ぢやない。どんな悪いことにならうと、僕は氣にかけやしないん  
 だ。君たちと一緒になつてから此方、ずるふんたくさん人の死ぬのを見て来たからね。だが一つ  
 二つ君たちに言ふことがある。」とここまで言つて来た時分には私はすっかり興奮してゐた。「ま  
 づ第一にはかういふことだ。君たちは今悪い有様になつてゐる。船はなくなる、寶は手に入らな  
 い、人數は減る。君たちの仕事はすっかり駄目になつちまつた。そこで、誰がさうしたのか知り  
 たければ言ふが、——それは僕だつたんだよ！僕は、島が見えたあの晩に林檎樽の中に入れて、  
 ジョン、君と、それから、ディック・ジョンソン、君と、それから、今はもう海の底にゐるハン  
 ヅとが話してゐるのを聞いて、一時間とたたないうちに君たちの言つたことを一語も残さずみん  
 な知らせたんだ。それから、スクーナー船はと言ふと、あれの錨索を切つたのも僕なら、君たち  
 があの船に乗せておいた人たちを殺したのも僕、あの船を君たちの中の一人だつて二度ともう見  
 られない處へ隠したのも僕だよ。勝つて笑へるのは僕の方なんだ。僕はこの事件では初手から上  
 手に出てゐるんだ。僕はもう君たちが蠅ほども怖かあない。さあ、僕を殺すとも生かすとも、好  
 きなやうにしてくれ給へ。だが一つのことだけ言つておかう。もうこれつきりだ。もし君たちが  
 僕の命を助けてくれるなら、すんだことはすんだことにして、君らが海賊をしたために裁判にか  
 けられる時にや、僕は出来るだけのことをして君たちを救つてあげよう。どちらかきめるのは君

たちの方だ。他人を殺して君たち自身に何にもならぬことをするか、それとも、僕を生かしてお  
 いて、君たちが絞首になるのを助かる證人を残しておくかだ。」

私はここで言葉を止めた。といふのは、實際、私は息が切れたし、それに、驚いたことには、  
 そこにゐる者が一人も身動きもしないで、みんなが羊のやうにただ私を見つめて坐つてゐるたから  
 である。そして彼等がまだちつと見つめてゐる間に、私は再び口を切つた。——

「それからね、シルヴァーさん、あんたはここにゐる中で一番偉い人だと思ふが、もし僕が殺  
 されるやうなことになるたなら、あんたはどうか先生に僕の死に方を知らせてあげて下さい。」

「心に留めておかう。」とシルヴァーは言つたが、非常に奇妙な口調だつたので、彼が私の頼み  
 を嘲笑つてゐるのか、それとも私の勇氣に感心してゐたのか、私にはどうしてもいづれとも判断  
 し兼ねた。

「まだ一つ言ひ添へることがある。」と例のマホガニー色の顔をした年寄の船乗——モーガン  
 といふ名の——私がプリストルの埠頭にあつたのつぼのジョンの居酒屋で見たことのあるあの男  
 ——が叫んだ。「黒犬を知つたのも此奴だつたぞ。」

「さうさ、それからな、」と船の料理番は言ひ足した。「もう一つ言ひ添へることもあるぜ、畜  
 生！ ビリー・ポーンズから海圖をかつばらつたのもやつぱりこの子供だつたよ。度々己たちは  
 このジム・ホーキンスのためにしくじつたんだ！」

「ぢやあかうしてくれるぞ！」とモーガンは罵り言葉と共に言つた。

そして彼は、二十歳の若者のやうな勢でナイフを抜いて、跳び立つた。

「止めろ！」とシルヴァーが叫んだ。「お前は何だ、トム・モーガン？ 多分お前は船長のつもりだつたらう、大方な。馬鹿めが。だが己がよく教へてやらう！ 己に逆へば、お前は三十年前からたくさん奴がお前の前に遭つたやうな目に遭ふんだぞ。——帆桁の端にぶら下げられた奴もゐるやがるんだ、畜生！ それから船の外へ抛り出された奴もゐる。みんな魚の餌食になつたものさ。己に面と向つて反對した奴で、その後でいい目に遭つた奴は、一人だつてゐねえんだぜ、トム・モーガン。そいつあ間違えつこなしだぞ。」

モーガンはちつとしてしまつた。しかし他の連中からぶつぶつ唸れ聲の不平が起つた。

「トムの方に道理があるよ。」と一人が言つた。

「己はずるぶん永え間一人にいちめられるのを我慢して来たんだ。この上またお前にいちめられてたまるもんか、ジョン・シルヴァー。」と別の者が言ひ足した。

「手前から紳士たちの中で誰かこの己と議論か喧嘩できまりをつけてえつて奴がゐるのか？」とシルヴァーは、まだ火のついてゐるパイプを右手に持つたまま、樽の上の坐り場所からぐつと前へ身を屈めながら、唸鳴つた。「どうしようつてのか言つてみる。手前からあ啞ぢやあるめえ。してえ奴にやさせてやる。己も永え年月過して来て、今になつて大馬鹿野郎めに己の面先で生意氣な眞似をさせておと思ふか？ 手前たちだつてやり方は心得てるんだ。みんな自分ぢや分限紳士のつもりなんだからな。さあ、いつだつて向つて来い。やれる奴は彎刀を手を取れ。さうすり

や、己は、杖杖をついちやるるが、このパイプが空にならねえうちに、其奴の臟腑がどんな色をしてゐるか見てやらう。」

誰も動かなかつた。誰も答へなかつた。

「それがお前たちのやり方だ、さうだろ？」と彼はパイプを口へ戻しながら言ひ足した。「さうさ、お前たちやどのみち見掛ばかりの奴らだ。相手にするほどの値打もねえ、手前らはな。多分手前たちだつて自分の國の言葉はわかるだらう。己は選ばれてここで船長になつてるんだぞ。己はずんと一番偉え人間だからこそここで船長になつてるんだぞ。手前からや分限紳士らしく勝負する氣はねえんだ。それなら、畜生、己の言ふことをきいてりやいいんさ、全くよ！ ところで、己はこの子供が好きなんだ。こないいい子供は見たことがねえ。この子はこの小屋ん中にある手前から鼠野郎を二人一緒にしたよりも以上の人間だ。で、己の言ふのはかうだ。この子に手をかける奴は己が相手になつてやる、——これが己の言ふことだ。違えねえぞ。」

この後は永い合間があつた。私は壁を背にして眞直に立つてゐて、心臓はまだ大鎚のやうに烈しく動悸うつてゐるが、しかし今では一條の希望の光が胸の中に射し込んで来た。シルヴァーは壁に凭れかかつて、腕を組み、パイプを口の隅に啣へて、まるで教會にでもゐるやうに落著いてゐた。それでも、眼は絶えずこつそりとときよろきよろし、不従順な部下を眼尻で見つてゐた。彼等の方はと言ふと、だんだんに丸太小屋の遠くの方の端へ寄り合つてゆき、彼等のひそひそと囁く低い聲が流れのやうに私の耳に絶間なしに聞えて来た。一人一人彼等はこつちを見上げ、そして

松明の赤い光がちよつとの間彼等の興奮した顔を照すのだつた。しかし彼等が眼を向けるのは私の方へではなく、シルヴァーの方へだつた。

「手前らはたんと言ふことがあると見えるな。」とシルヴァーは言つて、空中へべつと唾を吐き飛ばした。「大聲で言つて己に聞かせるか、でなきや止めちまへ。」

「失禮だがね、」と彼等の中の一人が答へた。「お前さんは規則によつちやずるぶんずばらだが、多分他の規則は守つてくれるんだらうな。ここにゐる船員は不服があるんだ。ここにゐる船員はこけおどかしはちつとも有難かねえんだ。ここにゐる船員は他の船員と同じに自分たちの権利があるんだ、遠慮のねえとを言へばね。で、お前さんの拵えた規則で、己たちは一緒に話し合つてもいいだらうと己は思ふんだ。今んとこはお前さんを船長と認めるから、お前さんの許しを願ふ譯さ。だが己は自分の権利を要求して、會議を開きに外へ出ますぜ。」

かう言つて、いやに丁寧な水夫式の敬禮をして、のつぽの、面相の悪い、黄ろい眼をした、三十五くらゐのその男は、戸口の方へすまして歩いて行つて、小屋の外へ出てしまつた。すると残りの連中も順々にそれに倣つた。一人一人が出てゆく時に敬禮をし、一人一人が何とか言譯を添へた。「規則に従つてね。」と一人は言つた。「水夫部屋會議で。」とモーガンは言つた。そんな風になんとか言つて皆が出て行き、後にはシルヴァーと私とだけが松明と共に残された。船の料理番は直ちにパイプを口から取つた。

「さて、ねえおい、ジム・ホーキンス。」と彼はしつかりした囁き聲で言つた。その聲はやつ

と聞き取れるくらゐのものだつた。「君はもう少しで殺されるかも知れんところだ。いや、もつとずつと悪いことにや、拷問されるかも知れんところだ。奴らは己を排斥しようとしてるからな。だが、いいかね、己はどんなことがあつても君に味方してやる。己にやさういふつもりはなかつたんだ。さうだ、君があんなにばすばすとしやべるまではなかつたんさ。己は、あんな大金を手に入れ損ねるし、おまけに首を絞められるとなつたんで、やけつばらになりかかつてゐた。だが己にや君が頼りになる男だつてことがわかつたんだ。己は自分にかう言つたのさ。ジョン、お前はホーキンスに味方しろ。さうすりやホーキンスはお前に味方してくれるだらう。お前はあの子の最後のカルタ札だし、それから、ジョン、あの子はお前の最後のカルタ札だつてこたあ違えねえんだぞ！ 持ちつ持たれつだ。お前が自分の證人を救へば、あの子はお前の首を救つてくれるだらうよ！ とね。」

私はぼんやりとわかりかけて來た。

「君は何もかも駄目になつたと言ふんだね？」と私は尋ねた。

「うん、全く、さうなんだ！」と彼は答へた。「船はなくなる、首もなくなる、——さういつた有様さ。一度は己もあの灣を捜してみただよ、ジム・ホーキンス。だがスクーナー船なんてまるで見えやしねえ。——で、己も強情者だが、へこたれてしまつたよ。あの會議を開いてる奴らはね、全くの馬鹿野郎の臆病者さ。己は君の命を彼奴らから救つてあげるよ、——出来る限りはだ。だがね、いいかい、ジム、——その代りにだ、——君はのつぽのジョンがぶらんこになる

のを救つてくれるんだぜ。」

私は當惑した。彼の求めてゐることはそれほど望みのないことと思はれたのだ。——何しろ、彼は永年の海賊で、初めから終りまで張本人なんだから。

「僕に出来ることは、してあげるよ。」と私は言った。

「ちやこれで話がきまつた！」とのつぼのジョンが叫んだ。「君は元氣よく言つてくれた。で、有難え！ 己に助かる見込が一つ出来た譯だ。」

彼は、薪の中に立てかけてある松明のところまでびよこびよこ跳んで行つて、パイプに新しく火をつけた。

「己の言ふことをよく聞いてくれ、ジム。」と彼は元のところへ戻りながら言つた。「己は分別のある人間だよ、さうともさ。己は今ぢや大地主の側についてるんだ。君がああ船を何處かへ無事に廻したつてことは己にやわかつてる。どんな風にしてやつたか、そいつあわからねえが、とにかくあれば無事なんだ。ハンズとオプライエンとは丸めこまれたんだらうと思ふ。彼奴らはどつちとも己は大して信用してゐなかつたよ。ところでよく聞いてくれ。己は何も訊かねえし、他の奴らにも訊かせはしねえ。勝負のついた時を己は知つてゐる。知つてゐる。それから頼りになるしつかりした若者を知つてゐる。ああ、君は若えし、——君と己とが一緒になれあたんといふことが出来るかも知れねえなあ！」

彼は樽から錫の小杯にコニャックを注いだ。

「兄弟、飲まねえか？」と彼が尋ねた。そして私が斷ると、「ちやあ、自分だけで一口やるぜ、ジム。」と言つた。「己は一杯やらなきやならねえんだ。面倒な事を控へてるんでね。面倒な事つて言へば、あのお醫者はどうして己に海圖をくれたんだらうな、ジム？」

私の顔はありありと不審の色を浮べたので、彼はその上尋ねる必要のないのを見て取つた。

「ああ、さうさ、でもくれたんだよ。」と彼は言つた。「あれにやきつと何か譯があるぜ、——あれにやあ確かに何か譯がな、ジム、——いいにしろ悪いにしろ。」

そして彼はまたそのブランドイーを一口飲んで、最も悪い事を豫期してゐる人のやうに、大きな薄色の頭を振つた。

## 第二十九章 再び黒丸

海賊どもの會議は暫く續いてゐたが、やがて一人の者が小屋へ入つて来て、私の眼には何となく皮肉に見える、さつきと同じ例の敬禮をまたやつてから、ちよつとの間松明を貸して貰ひたいと頼んだ。シルヴァーは簡単に承諾した。するとその使者は再び出て行き、後には私たちが暗闇の中に残された。

「そうら、そろそろ騒ぎが起つて来るぜ、ジム。」とシルヴァーが言つた。彼は、この時分には、



すつかり親しい打解けた口調になつてゐた。

私は一番近くの銃眼のところへ行つて、外を見た。例の大きな焚火の餘燼はもう殆ど燃え盡きて、今では極く弱くぼんやりと光つてゐるので、私にはあの密謀者たちが松明をほしがつた譯がわかつた。柵壁までの傾斜面を半分くらゐ下つたところで、彼等は一團になつて集つてゐた。一人が松明を持つてゐた。もう一人が皆の真中に膝をついてゐたが、その手に持つてゐる開いたナイフの刀身が、月光と松明の光とで違つた色に輝くのが見えた。その他の者は身を前へ屈めて、膝をついてゐる男のしてゐることを見てゐるやうだつた。その男が手にナイフと共に一冊の書物を持つてゐるのを私はどうにか見分けることが出来た。そして、どうしてそんな不似合なものが彼等の手に入つたのだらうとまだ訝つてゐると、その時膝をついてゐた者がまた立ち上つて、一同が小屋の方へ一緒に歩き出した。

「やつて来るよ。」と私は言つた。そして自分の元の場所へ戻つた。彼等を見てゐたのを見つけては自分の沽券にかかはるやうな氣がしたからである。

「よしよし、奴らを來させろ、なあ、——奴らを來させろだ。」とシルヴァーは陽氣に言つた。「己にやまだ最後の手段があるからな。」

戸が開いて、五人の男が、入つたばかりのところにごたごたとかたまつて立つたが、その中の一人を前へ押し出した。その男が一足一足と踏み出す毎にためらひながら、それでも握つた右の手を前へ差し出しながら、のろのろと進んで來るのを見るのは、他の場合だつたらざるぶんとお

かしかつたらう。

「おい、こら、さつさとやつて來い。」とシルヴァーが呶鳴つた。「取つて喰はうたあ言やしねえ。そいつを手渡ししろ、間拔め。己あ規則は知つてるよ、さうともさ。總代をやつつけるやうなことはしねえや。」

この言葉で勇氣がついて、その海賊は前よりは速く進み出て、シルヴァーに手から手へ何かを渡すと、もつと一層敏捷に仲間たちのところへ再び戻つて行つた。

料理番は渡されたものを眺めた。

「黒丸だな！ さうだろと思つてた。」と彼は言つた。「手前らはどつからこの紙を取つて來たんだ？ おやおや、こりやどうだい！ なあ、おい、これあ縁起がよくねえぞ！ 手前たちは聖書からこれを切るなんて馬鹿な眞似をしたんだな。どの馬鹿が聖書を切つたんだ？」

「ああ、それ見ろ！」とモーガンが言つた。「——「そちら見ろ。おいらの言はねえこつちやあねえ。そんなことをしていいことになる筈がねえつて、おいらが言つたんだ。」

「ふうむ、手前たちは仲間で相談してきめたんだな。」とシルヴァーが言ひ續けた。「ぢや手前らはみんなふらんこ往生することになると思ふな。どの阿呆の間拔めが聖書なんぞを持つてたんだ？」

「ディックだよ。」と一人が言つた。

「ディックだと？ ぢやあディックはお祈りをするがいいや。」とシルヴァーが言つた。「奴の

好運もこれまでだ、ディックのな。そいつあ間違えつこなしだぜ。」

しかしこの時例の黄ろい眼をしたのつぼの男が口を出した。

「おしやべりは止めろ、ジョン・シルヴァー。ここにゐる船員は、規則通りにみんなで會議を開いて、お前に黒丸をつきつけたんだ。お前も、規則通りに、そいつを裏返して、そこに書いてあることを見てくんねえ。それからしやべるがいいさ。」

「有難うよ、ジョージ。」と料理番が答へた。「お前はいつも仕事はてきばきしてるし、規則は十分心得てるし、ジョージ、己はお前を見るなあ好きだよ。さてと、とにかく、こりや何だ？ ははあ！ 『免職』と、——なあるほど、さうだな？ なかなかうまく書いてあるわい、確かに。刷つた物みてえだ、全くさ。ジョージ、お前の手蹟かい？ まあ、お前はすっかりここにゐる船員の中の頭になつてゐるんだ。お前は次にや船長になれるぜ、きつとだよ。すまねえが、ちよいとその松明をも一度取つてくんねえか？ このパイプが消えたんだ。」

「さあ、おい、」とジョージが言つた。「ここにゐる船員を馬鹿にするのもいい加減にしねえ。お前はおどけてるつもりなんだらう。がお前はもう駄目だよ。その樽から下りて来て、投票するがよからうて。」

「手前は規則を知つてゐるつて言つたやうに思ふがな。」とシルヴァーは輕蔑したやうに答へた。「ともかく、手前が知らねえにしろ、己は知つてゐるんだ。だから己はここにゐる、——己はまだ手前たちの船長だぞ、いいか、——手前たちが自分の苦情を言つて、己がそれに答へてやるまで

はだ。それまでの間は、手前らの黒丸は堅パン一つほどの値打もねえんだ。それがすんでから、考へるとしよう。」

「おお、」とジョージが答へた。「お前はちつとも心配するこたねえや。己たちや間違つたこたあしねえよ、己たちはな。第一、お前は今度の仕事をやり損ねた。——いくらお前がぶうぶうしい男だつて、これにやさうぢやねえとは言へめえ。第二に、お前は敵をこの罌から何にもならねえのに逃がしまつた。何故奴らは出て行きたがつたか？ そりや己あ知らねえ。だが奴らがさうしたがつてたこたあ確かだ。第三、お前は、己たちが奴らの出かけるところをやつつけようとすゝるのを、させなかつた。おお、己たちあお前の腹の底を見抜いてゐるんだよ、ジョン・シルヴァー。お前は奴らに内通したがつてゐるんだ。それがお前の不都合なことだ。それから、第四は、この小僧のことだ。」

「それだけか？」とシルヴァーが平然と答へた。

「これだけあれあたくさんさ。」とジョージが言ひ返した。「お前のへまのために己たちあみんなぶらんこになつて天日に曝されるだらうよ。」

「よし、ぢやあ、いいか。その四箇條に返答してやらう。一つ一つ返答してやる。己が今度の仕事をやり損ねたと？ ふむ、ところで、手前たちはみんな、己のやりたかつたことを知つてる筈だ。それから、もしその通りになつてたら、己たちあ明日といはず今晚にもヒスパニオーラ號に乗り込んで、一人残らず生きてゐて、元氣で、うめえ乾葡萄入りのプディングをたらふく食

べ、寶を船艙に一杯積み込んでた、つてことも知つて居る筈だ、畜生！ そんなら、誰がその己の邪魔をしたんだ？ 誰がこの正式の船長の己をせき立てて早まらせたんだ？ 誰が己たちの上陸した日に己にあの黒丸をつきつけて、この舞踏を始めたんだ？ ああ、面白え舞踏だよ、——遠えねえや、——ロンドンの仕置波止場でぶら下げられて繩の先でやる踊りみてえさ、全くな。だが、誰がこんなことをやつたんだ？ さうさ、それあんたスンと、それからハンツと、それから手前、ジョージ・メリーだぞ！ そして手前はそれをおせつかいな奴らの中で一人だけ生き残つて居る奴なんだ。それなのに、生意氣千萬にも己に代つて船長にならうとするなんて、——己たちみんなをこんな目に遭はせた手前がだ！ こん畜生め！ こんな大べらぼうな話つて聞いたことあねえ。」

島  
 シルヴァーはちよつと言葉を切つたが、私は、ジョージとその仲間の者たちの顔で、以上の言葉が無駄ではなかつたのを見て取ることが出来た。

「それが第一條の答だ。」と被告のシルヴァーが呶鳴つて、額から流れる汗を拭うた。小屋が震へるほど猛烈にしやべつてゐたからである。「やれやれ、ほんとに、手前たちと話してると厭になつちまふぜ。手前たちや物の辨えもなけりや物覚えも悪いと來てるんだからな。手前たちの母親は何だつて手前らを海へなんぞ出したのか己にやあわからねえ。海だと！ 分限紳士だと！ 仕立屋が手前たちに相應の商賣だらうよ。」

「さあ、續ける、ジョン。」とモーガンが言つた。「残りのもさつさと言へ。」

「ああ、残りのか！」とジョンが答へた。「ありやあなかな立派なものだな、さうぢやねえか？ 手前たちは今度の仕事はやり損ねたと言ふ。ああ！ もしどのくれえひどくやり損ねてるか手前たちにわかりやあ、きつと、手前たちやびつくりするぜ！ 己たちやもう直ぐ絞首になりさうなとこなんだぞ。それを考えただけでも己は頸が硬ばるくれえだ。多分、手前らも見たことがあるだらう、鎖で絞め殺されて、鳥がその周りに集つて居る奴らを。潮で流されてゆくのを船乗が指してるんだ。『あれあ誰だ？』つて一人が言ふ。『あれかい！ ああ、あれあジョン・シルヴァーさ。己あ彼奴をよく知つてたよ。』と別の奴が言ふ。それから上手廻しをして次の浮標の方へ船を走らせてゐると、その鎖ががちやがちや鳴るのが聞える、つて譯さ。まあ、それが己たちのゆきつくところだ、己たちみんなのな。これも此奴と、ハンツと、アングスと、その他手前たちいまましい馬鹿野郎どものお蔭なんだ。それから、第四條の、その小僧のことが聞きてえんならだ、畜生！ 言つてくれるが、其奴は人質ぢやねえか？ 人質をなくしちまはうつてえのか？ いいや、いけねえ。其奴は己たちの最後の頼みになるんだ、きつとだ。その小僧を殺すつて？ 己あ厭だよ、兄弟！ それから、第三條か？ ああ、さうだ、第三條にや言ふことがうんとある。大方、手前たちはほんとの大學出の醫者が毎日診に來てくれるのを有難えとも思はねえんだらな？——ジョン、頭を打ち割られたお前も、——ジョージ・メリー、まだ六時間とたたねえ前に瘡をつて、今の今だつてレモンの皮みてえな色の眼をしてゐるお前もさ。それから、大方、手前たちは伴船のやつて來るのも知らねえんだら、多分な？ だが、來るんだぞ。それも

そんなに永えこつちやねえ。で、さうなつて来ると人質があつて喜ぶのは誰だかわかるだろ。それからと、第二條の、己が何故取引をしたかつてことならだ、——へん、手前らがそれをして貰えたくつて己んとこへ膝をついて這えつくばつてやつて来たんだ、——膝をついてな、やつて来たんぢやねえか。それつくれえ手前たちや萎れてたんだ。——それにまた、己がそれをしなかつたら、手前らは飢死してたらうて。——だが、そんなこたあどうだつていい！ こいつを見る、——さうすりや譯がわからあ！」

さう言つて彼は床の上に一枚の紙を投げ出したが、私には直ぐにそれが何だかわかつた。——まさしく、私がああ船長の衣類箱の底で油布に包んであるのを見つけた、三つの赤い十字記號のついでる、黄ろい紙の海圖であつた。何故先生がそれを彼にやつたのかといふことは、私には想像出来ないことだつた。

しかしそのことが私には合點のゆかぬことだつたとするならば、海圖の現れたことは生き残つてゐる謀叛人どもには信じられぬことだつた。彼等は鼠に跳びかかる猫のやうにそれに跳びかかつた。海圖は手から手へと渡され、一人が別の奴からひつたかつた。そして、それを調べながら罵つたり呶鳴つたり子供のやうに笑つたりしてゐる有様は、彼等が黄金そのものをいぢつてゐるばかりではなく、更にもう無事にそれを積んで海に出てゐるやうだと、思はれるくらゐであつた。

「さうだよ」と一人が言つた。「こりや確かにフリントだ。J・Fと書いて、下に線を引いて、それに索結びみてえなものも書いてある。あの人はいつてもかう書いてたよ。」

「こりやいいや。」とジョージが言つた。「だが己たちや船がねえから、どうしてあれを持つて行くんだい？」

シルヴァーが突然跳び立つて、片手を壁にあてて身を支へ、「手前に斷つておくぞ、ジョージ。」と呶鳴つた。「もう一言生意氣な口を利かうものなら、己は手前をひつぱり出して勝負するんだぞ。どうしてだど？ へん、そんなことを己が知つてるものか？ 手前からこそそれを己に教へてくれなきやならなかつたんだ、——餘計な差出口をして己のスクーター船をなくしちまつた手前とその他の奴らとがだ、この馬鹿野郎どもめが！ だが手前らは駄目さ。それが言へるもんか。手前らにや油蟲ほどの智慧もねえんだ。だが、ジョージ・メリー、手前だつて丁寧な口だけは利けるんだし、また己がさうさせてやるぞ、いいか。」

「そいつあまづ申分のないことだ。」と老人のモーガンが言つた。

「申分がないだと！ 己もさう思ふ。」と料理番が言つた。「手前らは船をなくした。己は賣をめつけた。これぢやあ誰が偉え人間だい？ で、もう己は辭職するぜ、畜生！ さあ、もう手前らの好きな奴を選挙して船長にしろ。己はやめちまつたんだ。」

「シルヴァーだ！」と皆が叫んだ。「いつまでも肉焼き臺だ！ 肉焼き臺が船長だ！」

「ぢやさうきまつたんだな？」と料理番が叫んだ。「ジョージ、お前はどうかやらもう一度待たなきやならねえやうだなあ、おい。己が怨み深え人間でねえのがお前にや合せた。だがそれ己のやり口ぢやなかつたんだぞ。それから、兄弟、この黒丸はどうする？ もう大して役にも立

つめえな？ ディックが自分の運をそこねて自分の聖書を駄目にした。まあそれつくれえのところさ。」

「この聖書は接吻して宣誓するにやまだ役に立つだらうね？」とディックはぶつぶつ言った。彼は自分で呪ひを招いたのに明かに不安を感じてゐるのだつた。

「少し切り取つてある聖書がかい！」とシルヴァーが嘲笑するやうに答へた。「駄目さ。そんなものは小唄本ほどの利目もねえや。」

「だつて、さうかね？」とディックは嬉しさうに叫んだ。「まあ、でもね、持つててもいいだらうと思ふねえ。」

「そら、ジム、——お前にや珍しいものだよ。」とシルヴァーが言つて、例の紙を私にひよいと抛つてくれた。

それはクラウン貨幣ほどの大きさの圓い紙だつた。一番終りの紙だつたので、片側は白かつた。もう一方の側にはヨハネ黙示録の一二節が見え、——その中でもかういふ文句が私の心にぎくりとこたへた。「犬および殺人者は外に居るなり。」<sup>(註七九)</sup>その印刷してゐる側は焼木の炭を塗つて黒くしてあつたが、その炭がもう剥げかかつて私の指を少しよごしてゐたのだ。白い側には同じく炭で「免職」といふ一語が書いてあつた。私はその珍品を現在も傍に持つてゐる。が、今では文字はすっかり消えて、拇指の爪でつけたやうなかすり痕が一つ残つてゐるだけである。

それがその夜の事件の結末であつた。その後間もなく、酒がみんなにぐるりと廻されて、私た

ちは寝ることになつた。そしてシルヴァーの復讐は、高々、ジョージ・メリーを歩哨に立たせて、もし誠實にやらないと殺してしまふぞと嚇したことだけだつた。

私は永い間眼を閉ぢることが出来なかつた。確かに私には考へることがたくさんあつたのである。その日の午後自分が殺した男のことや、自分の非常に危険な立場のことや、とりわけ、シルヴァーの今やつて見せた素晴らしい藝當——片手では謀叛人どもをくつつけておき、もう一方の手では、出来るものでも出来ないものでもありとあらゆる手段によつて、和解をして自分のみじめな命を救はうと努める——のことなどについてである。そのシルヴァー自身は安らかに眠つて、高い軒をかいてゐた。それでも、彼を取巻いてゐる暗澹たる危難や、彼を待つてゐる恥づべき絞首臺のことを考へると、彼が悪人ではあつても、私の胸は彼のために痛むのであつた。

### 第三十章 宣誓解放

森の縁から呼びかける、はつきりした、力強い聲で、私は眼を覺された。——實際、私たちみんなが眼を覺されたのだ。歩哨でさへも、戸口の柱に凭れてゐたのを身を起して、睡氣さましに體をゆすつてゐるのが見えたから。——

「おうい、丸太小屋あ！」とその聲は叫んだ。「醫者が来たぞ。」

まさしくそれは醫師であつた。その聲を聞くと私は嬉しかつたが、それでもその嬉しさには夾雜物がないではなかつた。私は自分の不従順なこそそした行爲を思ひ出してどきまぎした。そして、その行爲のために自分がどんなことになつたか——どんな連中の間にゐるとどんな危険に取巻かれてゐるか——といふことを思ふと、面目なくて先生に顔が合されなかつた。

夜がまだすつかり明けきつてゐなかつたから、先生は暗い中に起きて來たのに相違ない。私が銃眼のところへ駆け寄つて外を見ると、先生は、この前一度シルヴァーが來た時のやうに、地を這つてゐる讖に膝のところまでも包まれて立つてゐるのが見えた。

「やあ、先生！ お早うござえまあす！」とシルヴァーは、直ぐにすつかり眼を覺して好人物らしいにこにこ顔をしながら、叫んだ。「ずるぶんとお早えんですねえ、全く。諺にもあります通り、喰物(くもの)にありつくのは早起きの鳥です(註八〇)。おい、ジョージ、お前、體をゆすぶり起して、リヴジ―先生が柵をお越しになる手傳ひをしてあげろ。みんな工合がようござえますよ、あんだの患者はね、——みんな工合がよくつて元氣でさあ。」

柵杖を眩の下にあて、片手を丸太小屋の側壁につけて、丘の頂に立ちながら、彼はかうべらべらとしやべり續けたが、——聲も、態度も、顔付も、全く以前のジョンであつた。

「それに、あんだが全くびつくりなさることがありますぜ。」と彼は言葉を續けた。「ここにやちつちやなお客がゐますんで、——ひつ！ ひつ！ 新規の 賄附(まわらひ)の下宿人つて譯でさ。達者でびんびんしてますよ。このジョンの直ぐ横で、船荷の宰領(註八一)みてえに寝ましたよ、——夜つびて、

枕を並べてね。」

リヴジ―先生はこの時分には柵壁を越えて料理番のかなり近くへ來てゐた。それで先生がかう言ふ時の聲の變つてゐるのが私にはわかつた。——

「ジムぢやないか？」

「まさに間違えなくそのジムで。」とシルヴァーが言つた。

先生は何も言はなかつたが、びたりと止つた。そして、また動き出すことが出来るやうになつたと思はれるまでには、何秒かかかつた。

「よし、よし、」とやがて彼は言つた。「義務第一で、遊びその後だ。お前だつてさう言ふだらうな、シルヴァー。まづお前のところのあの患者たちを診察するとしよう。」

それから直ぐ醫師は丸太小屋へ入つて來て、私には怖い顔をして頷いて會釋し、病人の間で仕事にとりかかつた。彼は、かういふ不信義な悪魔どもの間では自分の生命が一本の髪の毛に懸つてゐるやうなものだといふことは知つてゐたには相違ないが、少しの懸念もしてゐないやうな様子をしてゐた。そして、まるで平靜なイギリスの家庭を普通に往診してでもゐるやうに、自分の患者たちにいろいろとしやべつてゐた。彼の態度は皆に反應したのだらうと思ふ。といふのは、彼等も醫師に對して、何事も起らなかつたかのやうに——彼がやはり船醫であり、彼等がやはり忠實な平水夫であるかのやうに——振舞つてゐたから。

「お前は工合がよくなつてゐるよ、なあ、おい。」と彼は頭に繻帶をした男に言つた。「九死に

一生を得た人間といふのがゐるなら、それはお前のことだ。お前の頭は鐵のやうに堅いに違ひないな。それからと、ジョージ、どんな様子だ？ ひどい顔色をしてゐるな、確かに。ふうむ、お前の肝臓がな、でんぐり返つてゐるんだぞ。お前はあの薬を飲んだか？ 皆の者、この男はあの薬を飲んだかね？」

「はいはい、旦那、確かに此奴は飲みましたよ。」とモーガンが答へた。

「うむ、私もこのやうに謀叛人の醫者になつてゐる以上は、といふよりも監獄醫になつてゐる以上はと言つた方がいいんだがね。」とリヴジー先生は非常に快活な調子で言つた。「とにかく、ジョージ陛下と（陛下萬歳！）絞首臺とのために一人の命でもなくしないやうにするといふのは面目にかけて大切なことだからな。」

惡漢どもは互に顔を見合せたが、この手痛い言葉を黙つて聞き流してしまつた。

「ディックは気分がよくねえんですが。」と一人が言つた。

「よくないつて？」と醫師が答へた。「ぢやあ、ここへ來なさい、ディック、そして舌を見せて御覽。いや、これで気分がよかつたら不思議だらうて！ この男の舌を見てはフランス人だつて恐しがらるよ。こいつも熱病さ。」

「ああ、それ見ろ。」とモーガンが言つた。「聖書を裂いたからそんなことになつただ。」

「あんまり頓馬だからそんなことになつただ、——お前の言ふ眞似をするかね。」と醫師は言ひ返した。「あんまり頓馬で、よい空氣と毒氣との區別も知らず、乾燥した土地と疫病のあるい

やな泥沼との區別も知らんからだよ。まあ、大抵は——勿論これはただ私の考へだが——そのマラリヤ熱をお前たちの體から取つてしまふまでには、お前たちはみんな恐しい目に遭はなけりやならんだらう。沼地に野營するなんて、どうしてそんなことをしたんだい？ シルヴァー、お前には私も驚いたよ。お前は、何もかもひつくるめて見たところ、他の多くの者ほど馬鹿ぢやないが、しかし、どうも健康の法則の觀念と來ちや初歩も持つてゐないやうだな。」

醫師は一人一人に薬を調合してやり、彼等は全く笑止なほどへいこらしてその處方薬を飲んだが、その様子は人殺しをした謀叛人や海賊といふよりは貧民學校の生徒のやうだつた。それがすむと醫師が言つた。——「さあ、今日はこれでいい。ところで今度はあの子供とちよつと話をしたいんだがねえ。」

そして彼は私の方へぞんざいに頭を振り動かした。

ジョージ・メリーは戸口のところにゐて、苦い味のする薬を飲んだ後でべつべつと唾を吐いてゐたが、醫師のさう言ひ出した言葉を聞くなり眞赤な顔をしてくるりと振り向き、「いけねえ！」と叫んで口ぎたなく罵つた。

するとシルヴァーが平手でびしやりと樽を叩いた。

「黙れ！」と彼は呶鳴つて、ほんたうに獅子のやうにあたりを見廻した。「先生、」とそれから彼はいつもの調子で言葉を續けた。「わつしは、あんたがこの子を可愛がつてゐなざることを知つてるんで、そのことを考えてゐたんでさあ。わつしらはみんなあんたの御親切をほんとに有難

く思つてゐますし、御覽の通りにあんたを信用してゐて、薬を酒みてえに飲んでます。で、わつしはかうしたらみんな都合がいいだらうと思ふんですがねえ。ホーキンス、君は若え紳士として名譽にかけての約束つて奴を俺にしてくれねえか、——生れは貧乏だが、お前は若え紳士だからな、——逃げ出さねえといふ、名譽にかけての約束をしてくれねえかい？」

私は直ぐにその誓約をした。

「では、先生、」とシルヴァーが言つた。「あんたはあの柵の外側へちよいと出て下せえ。さうして下さりや、わつしはこの子をこつち側までつれてゆきませう。さうすれば柵越しに話が出来てせう。ぢや、さやうなら、先生。それから大地主さんとスモレット船長によろしく。」

これまではただシルヴァーの凄見幕だけで抑へつけられてゐた皆の不平は、醫師が小屋を出てしまふと直ぐに爆發した。シルヴァーは、敵味方に二股をかけてゐるとか——自分だけで別に和解をしようとしてゐるとか——仲間の者たちの利益を犠牲にするとか言つて、要するに、彼の正にやつてゐる通りのそのことを、手厳しく非難された。今度は、それが實に明白であるやうに私にも思はれたので、彼がどうして彼等の怒りを逸せられるか私には想像がつかなかつた。しかし、彼は残りの者どもと一緒にしたより二倍ものしたたか者であつた。それに昨晚の勝利は彼等の心を壓倒してゐた。彼は彼等に馬鹿だの間拔だのとあらゆる悪たれ口をたたき、私を醫師と話させることは必要なのだと言ひ、例の海圖を彼等の面先に振り廻してみせ、實探しに行くことになつてゐるその日になつて條約を破るなんてことが出来るかと尋ねた。

「いいや、そんなことが出来るもんか！」と彼が叫んだ。「條約を破るのはその時が來てのことだ。それまでは、奴さんの長靴にブランドイーを塗つて磨けと言はれても、あの醫者の奴をこまかしておくんだ。」

それから彼は火を焚きつけると彼等に言ひつけて、杖杖をついて、片手を私の肩にかけながら、傲然と外へ出た。得心させられたといふよりは彼の口達者な辯舌に黙らされて、方々にばらばらになつてゐる連中を後に残して。

「ゆつくりと、おい、ゆつくりと。」と彼が言つた。「已たちが急ぐと見ようものなら、奴らは直ぐにかかつて來るかも知れねえからな。」

それで、極くゆつくりと私たちは砂地を進んで、醫師が柵壁の向側で私たちを待つてゐる處の方へ行つた。そして、容易に話の出來る距離まで來るや否や、シルヴァーは立ち止つた。

「このことも書き留めておいて下せえまし、先生。」と彼が言つた。「それから、この子があんなに話しますでせうが、わつしはこの子の命を救つてやりましたし、そのために免職させられもしました。それにや違えごせえません。先生、人間がわつしのやうに危えことまでやつた時にや——言はば命をそつくり投げ出して向ふ見ずなことをやつた時にや——その人間に一言くれえやさしい言葉をかけてやんなすつても、大方、差支へはねえとお考えでござえませうな？ 今はわつしの命だけぢやなくつて——おまけにこの子の命にもかかはつてゐるつてことを、どうか覚えておいて頂きてえんで。で、先生、後生ですから、わつしに親切な言葉をかけて、ちつとでも望み



が持てるやうにしてやつて下せえ。」

シルヴァーは、一度ここへ出て来て仲間の者と丸太小屋とに背中を向けると、人間が變つてしまつた。頬までがこけたやうに思はれ、聲が震へてゐた。これほど眞面目な人間は一人もないくらゐであつた。

「うむ、ジョン、お前は怖がつてゐるんぢやないかね？」とリヴジー先生が尋ねた。

「先生、わつしは臆病者ぢやありません。さうですよ、わつしはね、——そんなに臆病者ぢやありません。だが正直に白状しますが、わつしは絞首臺のことを思ふとぞくぞくするんです。あんたは立派な正直な人だ。あんたみてえな立派な人は見たことがねえ！　で、あんたがわつしのした悪いこともお忘れにならねえだらうが、わつしがどんないことをしたかつてこともお忘れにならねえ、つてこともわつしは知つてますよ。そこで、わつしはあつちへ行つて——この通りにね——あんたとジムとを二人きりにしておきますぜ。で、このこともわつしの手柄として書きつけておいて下せえ。これだつてずるふんと無理をしてやつてることですからね、さうですとも！」

さう言ひながら彼は少し後へ戻つて、話し聲の届かないところまで行き、そこで木の切株に腰を下して口笛を吹き始めた。そして、時々その座席の上でぐるりと廻つて、私と醫師との方を見たり、部下の不従順な悪黨どもの方を見たりした。その悪黨どもは、焚火——それを彼等は頻り

に再び焚きつけてゐた——と小屋との間の砂地を行つたり來たりして、小屋から豚肉とパンとを運び出して朝食の用意をしてゐたのである。

「さうか、ジム、君はここにゐたんだね。」と先生は悲しさを言つた。「自業自得でどうも仕方がない、ねえ、君。全くのところ、私には君を責める氣はない。が、親切であつても不親切であつても、これだけは言つておきたい。スモレット船長が丈夫だつた時には、君は跳び出さうとはしなかつた。そしてあの人が悪くなつて、どうにも出来ない時だつたので、あれはどうも全く卑怯なことだつたのだよ！」

私はこの時には泣き出したことを白状しよう。「先生、」と私は言つた。「勘忍して下さい。僕は十分自分を責めました。僕の命はどうせないものです。そして、もしシルヴァーが僕を庇つてくれなかつたら、僕は今時分は死んでゐたでせう。それで、先生、これを信じて下さい。僕は死ぬのはかまひません、——それが僕には當然なのでせうから、——しかし僕の心配するのは拷問です。もし彼奴らが僕を拷問するとなると——」

「ジム、」と先生が私の言葉を遮つたが、その聲はすつかり變つてゐた。「ジム、私はそんなことをさせておけん。さあ、跳び越せ。逃げ出さう。」

「先生、僕は誓言したんです。」と私は言つた。

「わかつてるよ、わかつてるよ。」と彼は叫んだ。「だが、ジム、今はそんなことは仕方がない。非難も恥も、一切合財、私が引受けるよ、ねえ、君。だが君をここへ残しておくことは私に

は出来ないんだ。さあ、跳べ！一飛びで外へ出られる。二人で羚羊のやうに逃げ出さう。」

「いいえ。」と私は答へた。「あなたは御自分ならそんなことをなさらないといふことはよく御存じです。あなただつて、大地主さんだつて、船長さんだつてさうです。僕だつてそんなことはしません。シルヴァーは僕を信用したんです。僕は誓言したんですから、戻つて行きます。けれども、先生、まだ僕にはお話することが残つてゐたんですよ。もし彼奴らが僕を拷問するとなると、僕はひよつとして一言くらの口を滑らしてあの船が何處にあるかといふことを言ふかも知れません。といひますのは、僕は船を取戻したんです。一つには運がよかつたのと、一つには冒険をやつたのと。あれは、北浦の、南の濱の、高潮線の直ぐ下のところにおいてあります。半潮の時にはきつと高く水を離れてゐるでせう。」

「船をね！」と先生がびつくりして言つた。

私が大急ぎで自分の冒険のことを話すと、先生は無言のまま私の言ふことをしまひまで聞いてゐた。

「どうもこれには宿命といつたやうなものがあるね。」と彼は私が話し終へると言つた。「事毎に、私たちの命を救つてくれるのは君なのだ。それなのに、私たちが君に命をなくさせるやうなことをすると君は思ふかい？ そんなことをしたら實にすまん譯だよ、君。君は奴らの陰謀を見つけた。君はベン・ガンを見つけた。——あれは君がこれまでにした中で一番よい行ひで、また、君がこれから九十まで生きようとも、あれ以上によいことは出来ないだらう。おお、さうさう、

ベン・ガンのことを言へばだね！ あれは實にいたづら者だよ。おい、シルヴァー！」と先生は大きな聲で叫んだ。「シルヴァー！——一事お前に忠告するがね、」と彼は料理番が再び近づいて來ると言葉を續けた。「あの寶を探しにゆくのはあんまり急がんだ方がいいぜ。」

「さうですねえ、先生、わつしは出来るだけのことではありますが、どうもそりやあむづかしいですね。」とシルヴァーが言つた。「失禮ですが、わつしはあの寶を捜すことで自分の命とその子の命を繋いでるだけなんです。それにやあ違えありません。」

「ぢや、シルヴァー、」と醫師は答へた。「もしさうなら、もう一步進んで言つておかう。寶を見つけた時には用心をしるよ。」

「先生、」とシルヴァーが言つた。「男と男の話としちや、そりやあ何だか奥歯に物の挟まつてるやうな言ひ方ですね。あんたがどうしようとしてゐるなさるのか、どうして丸太小屋を出なさつたのか、どうしてあの海圖をわつしに下さつたのか、わつしにやわからねえ。わかるもんですかい？ それでも、わつしは眼をつぶつて、望みの持てる言葉一つも聞かされずに、あんたの言ひつけ通りにして來たんです。だが、いや、今のはひど過ぎる。もしあんたが思つてなさることをきつぱりわつしに言つて下さらねえんなら、ちよいとさう言つて下せえ。さうすりやわつしだつて成行にまかせますから。」

「いやね、」と醫師は考へこみながら言つた。「私にはそれ以上言ふ権利がないのだ。それは私の秘密ぢやないんだからなあ、シルヴァー。でなけりや、きつと、お前に話してやるんだが。し

かし私は自分の言へるだけのことをお前に言ふとしよう。一步だけ先へ出て言ふのだ。でない、と船長に叱られるからねえ、きつと！ 第一に、私はお前にちつとばかり望みを持たせてやらう。シルヴァー、もし私たちが二人ともこの狼の罾から生きて出られたら、私は、僞誓だけはしないが、自分の全力を盡して、お前を救つてやらう。」

シルヴァーの顔は晴々とした。「先生、あんたがわつしの母親でも、きつと、それ以上のことは言へますまいよ。」と彼が叫んだ。

「まあ、それが私の第一の讓歩だ。」と醫師は言ひ足した。「第二のは一つの忠告だがな。その子を始終お前の直ぐ傍において、もし助けの要する時には、おういと大聲で呼んでくれ。そして私はお前に加勢しに行つてやらう。私がでたらめを言つてゐるかどうかは、それでお前にもわかるだらう。ぢや、さやうなら、ジム。」

そしてリヴジ先生は柵越しに私と握手し、シルヴァーに頷いて會釋して、足早に森の中へ入つて行つた。

### 第三十一章 寶探し——フリントの指針

「ジム、」とシルヴァーは私たち二人だけになると言つた。「もし己がお前の命を救つたんなら、

お前は己の命を救つてくれたんだ。それは忘れねえよ。先生がお前に逃げろつて合圖したのを己は見たんだ、——この眼尻でな、見たとも。それから、お前がいやですて言ふのも見たぜ、聞くやうにはつきりとね。ジム、これで己は君に一つ借りが出来たよ。あの攻撃がしくじつてから此方己あ初めて望みが持てたんだ。それも君のお蔭さ。ところで、ジム、己たちはこれからあの寶探しに行かなくちやならんのだがね、これも封緘命令で、行つてみるまではわからねえといふ奴でな、己あ氣が進まねえんだ。で、お前と己とは、言はば互に持ちつ持たれつで、しつかりくつついてゐるなきやいけねえ。そしてどんなことがあらうと首が助かることにしようぜ。」

ちやうどその時、一人の男が焚火のところから朝飯の支度が出来たぞと私たちを呼んだ。それで、私たちはやがて砂地の此處彼處に坐つて堅パンとフライにした鹽漬肉とを食べ始めた。彼等は牛を一頭丸焼するに適當なくらゐるの火を焚いてあつた。そしてそれが今非常にかつかと盛んに燃えてゐるので、風上から漸くその火に近づけるだけで、その方からでも用心をしなれば近づけなかつた。それと同じ浪費的な氣持で、彼等は食べ切れる三倍もの肉を料理したやうであつた。そして一人の奴は、譯もなくげらげら笑ひながら、残つた分を焚火の中へ投げ込んだ。火は、かういふ珍しい燃料を抛り込まれて、益々盛んにごうごう音を立てて燃えた。私は今までにあんなに明日のことを氣にかけない人たちを見たことがない。その日暮しといふのが彼等のやり方を説明し得る唯一の言葉である。そして、彼等は小競合には頗る大膽で直ぐにけりをつけてしまふけれども、食物を浪費したり歩哨が眠つたりするのでは、とても永びく戦争などには全然不適當だ

といふことが私にはわかつた。

シルヴァーでさへ、肩の上にフリント船長をとまらせて、盛んに食べながら、彼等の思慮のなさに對して一言の非難もしなかつた。そして、彼がそれまでにこの時ほどの狡猾さを示したことは一度もないと私は思つたので、そのことは私を一層驚かせたのだ。

「さうさ、兄弟、」と彼は言つた。「肉焼き臺グレイヒキヤウがゐるこの頭で以てお前たちのために考えてやるてえのは、お前たちにや任せなことでせよ。己はほしかつたものを手に入れたんだ、さうともなるほど、奴らは確かに船を持つてゐる。何處に持つてゐるのか、己はまだ知らねえ。だが、己たちは寶を見つけさせえすりや、方々跳び廻つて探しあてるさ。さうなれば、兄弟、ボートを持つてゐる己たちの方が勝ちだと思ふな。」

彼は、口一杯に熱い鹽漬豚肉を頬張りながら、こんな風にしゃべり續けた。かうして彼は皆の希望と信頼とを回復した。同時に自分の希望と自信とをも取戻したのだらうと思ふ。

「この人質のことを言へばね、」と彼は話し續けた。「さつきのが、この子のひどく好きな連中との話しじまひだらうと思ふよ。己はちよいといふことを聞いたが、それもこの子のお蔭だ。だがそれはもうすんでしまつたことさ。寶探しに行く時に己はこの子に綱をつけてつれて行くでしょう。何故つて、いいかい、何か事の起つた場合の用心に、當分は、己たちはこの子を黄金みてえに大事大事にしておくんだからな。船も寶も兩方とも手に入つて、仲間で陽氣に海へ出るやうになつたら、その時にやあな、己たちはホーキンス君を説きつけて味方に誘うてよ、無論、いろいろ

ろ盡してくれたお禮に、分前もやるとしようよ。」

皆がこの時上機嫌だつたのは不思議ではなかつた。私はと言ふと、すつかりしよげてゐた。シルヴァーが今言つた計畫が實行出来るやうになれば、既に二重に裏切者である彼は、それを採用するに躊躇ちゆうそしないだらう。彼はまだどちらの陣營にも足をかけてゐた。それで、彼が、私たちの側へついて精々絞首を辛うじて免れるよりは、海賊どもと一緒に富と自由とを得る方を選ぶだらうといふことには、少しの疑ひもなかつた。

いや、そればかりではなく、よし彼が餘儀なくリヴジ―先生との約束を守らねばならないやうな事になつたとしても、その場合でさへ私たちの前にはどんなに危険があつたらう！ 彼の手下の者たちの疑念が確實なものとなつて、彼と私とが命がけて戦はなければならなくなつた時には——彼は不具かたじけなくで、私は子供——相手は五人の偏強で敏捷な水夫たちだから——どんなことになるだらう！

かういふ二重の懸念にかたて加へて、味方の人たちの振舞にもまだどうしても解けぬ謎があつた。柵壁から出て行つたことも説明がつかないし、海圖を譲つたことも合點がゆかぬし、更に一層わからないのは、先生がシルヴァーに「寶を見つけた時には用心をしるよ。」と最後に警告したことだつた。で、どんなに私が朝飯の味も碌々わからなかつたか、どんなに不安な心を抱いて海賊どもの後について寶を捜しに出發したかといふことは、諸君にも容易にわかるだらう。誰か見る人がゐたら、私たちはずるぶん珍妙な様子に見えたらう。みんなよごれた水夫服を著

て、私を除く他はみんな十分に武装してゐた。シルヴァーは、腰に大きな彎刀を佩び、四角い裾の上衣の一つ一つのポケットにピストルを一挺ずつ入れてゐる他に、體に二挺の鐵砲を——一挺は前に一挺は後に——吊り下げてゐた。その上にも彼の奇妙な風體を完全にするために、フリント船長が彼の肩に棲つて意味もない船乗の言葉をいろいろでたらめにべちやべちやしやべり散らしてゐた。私は腰に綱を巻かれて、船の料理番の後に従順について行つた。彼はその綱の括りつけてない方の端を、時には空いてゐる方の手で持ち、時には強い齒で啣へてゐた。どう見ても、私はまるで踊り熊といふ恰好でひつばられてゐるのであつた。

他の人々はいろいろな荷物を背負つてゐた。或る者は鶴嘴やシャヴェル——それがヒスパニオリラ號から彼等が陸へ持つて來た物の中で一番必要な物だつたのだから——を持ち、また或る者は晝食の用意に豚肉やパンやプランデーを背負つた。かういふ食糧が皆もとは味方の貯藏物であつたのを私は見て取つた。それでシルヴァーが前晩言つた言葉のほんたうであることがわかつた。もし彼が醫師と契約を取極めなかつたならば、彼と謀叛人たちとは、船に逃げられたのだから、ただ清水を飲み、狩獵をしてその獲物を食べて、命を繋ぐより他はなかつたに違ひない。ところが、水はあまり彼等の口に合はないのだし、船乗といふものは大抵射撃がうまくない。おまけに、食物がそんなに缺乏してゐる時には、火薬がどつさりあるといふことはありさうにもなかつたのだ。

さて、このやうに支度して、私たち一同は——確かに日蔭にゐなければならぬ例の頭を割つた奴までも——出立し、一人一人とばらばらに濱の方へ行つて、もの二艘の快艇のある處へ來た。この快艇までが海賊どもの酔つて馬鹿騒ぎをした痕を留めてゐて、一艘は腰掛梁が一つ壞れてをり、二艘とも泥だらけで塗もかひ出してなかつた。安全のために二艘とも持つて行くことになつた。そこで、人數を二つに分けて、碇泊所の水面に乗り出した。

漕いでゆく間に、海圖のことで多少議論が起つた。例の赤い十字記號は、無論、指標としては餘りに甚しく大き過ぎたし、それに、裏面の備考の文句も、次に掲げるやうに、幾分曖昧なところがあつた。それは、讀者も思ひ出されるであらうが、かう書いてあつたのである。——

「北北東より一ポイント北に位して、遠眼鏡の肩、高い木、骸骨島東南東微東、十フィート。」

だから、高い木が主な目標なのであつた。今、私たちの眞正面では、碇泊所は二百フィートから三百フィートまでの高さの高原で劃られてゐて、その北は遠眼鏡山の傾斜した南の肩に接し、南の方へ向つてはまた隆起して、後、橋山と言はれてゐるごつごつした峻岨な高地になつてゐた。この高原の頂には異つた高さの松の樹がたくさん生えてゐた。此處彼處に、違つた種類の松の樹が附近の樹々よりも正味四五フィートも高く聳えてゐるので、その中のどれがフリント船長の

さした「高い木」であるかといふことは、その場所へ行つて、羅針儀の示度で定めるより他はないのであつた。

しかし、さういふ譯ではあつたけれども、ボートに乗つてゐる連中は誰も彼も、まだ半分も海を渡らない先から、もう自分の好きな木を擇り出してゐた。のつぼのジョンだけは肩をすくめて、彼等にそこへ行くまで待つてをれと言つた。

寶

私たちは、シルヴァーの指圖で、腕をあまり早く疲らせないやうにと、ゆつくりと漕いだ。そしてずるぶん長い間舟に乗つてから、第二の川——遠眼鏡山の森の割目を流れ下つてゐる川——の口に上陸した。そこから、左へ曲つて、高原の方へ傾斜地を登り始めた。

島

初めのうちは、ねとねとした泥深い地面と、こんがらかつてゐる沼地の植物とのために、進むのがなかなか捗らなかつた。けれども、だんだんと山は峻しくなりかけ、足の下も石がちになつて来て、樹木もその性質が變り、もつと間が開けて生えてゐるやうになつて来た。實際、私たちが今近づいてゐるのは島でも非常に氣持のよい處であつた。香の強い金雀花や、花の咲いてゐる多くの灌木が、殆ど草に取つて代つてゐた。緑色の肉豆蔻の木（ココナツ）の茂みが、赤い幹をして廣い影をつくつてゐる松の樹と共に、此處彼處に散在してゐた。そして肉豆蔻の芳香は松の樹の香氣とまじつてゐた。その上に、空氣は澄んでゐてすがすがしく、強い日光の中では、このことは素晴しく爽快に感じられた。

一行は扇の形に廣く擴がつて、大聲をあげたりあちこちに跳んだりして進んだ。その眞中あた

りに、他の者たちとは大分後れて、シルヴァーと私とがついてゆき、——私は例の綱に繋がれ、彼は滑り易い砂礫の上をひどくはあはあ喘ぎながら登つてゐた。實際、時々私は彼に手を貸してやらねばならなかつた。でなければ彼は足を踏み外して山を轉げ落ちたに違ひない。

かうして半マイルばかり進んで、高原の頂上に近づいてゐた時に、一番左の方にゐた男が、おちけたやうに大聲で喚き出した。続けざまに幾度も叫び聲を立てたので、他の者もその男の方向へ走り出した。

「寶をめつけた筈あねえよ。」とモーガン爺が、右の方から私たちの傍を急いで通り過ぎながら、言つた。「あれあずつとてつべんにあるんだからな。」

實際、私たちもその場所へ行つてみると、それは全く違つたものだつた。かなり大きな一本の松の樹の根もとに、緑の蔓草に絡まつて、その蔓草は小さい骨を幾分か持ち上げてさへゐるが、人間の骸骨が、衣服の屑片と共に、地面の上にあつたのである。誰も彼もちよつとの間はぞつとしたと私は思ふ。

「此奴は船乗だつたんだぜ。」とジョージ・メリーが言つた。彼は、他の者よりは大胆だつたので、骸骨のずつと近くへ行つてゐて、衣服の襤褸を調べてゐたのだ。「ともかく、これあ船乗の服だ。」

「さうともさ、そりや多分さうだらうとも。」とシルヴァーが言つた。「こんな處に僧正さまもめつかるめえからな。だが、この骸骨の寝方はどうだい？ これあ自然ぢやあねえな。」

實際、もう一度見直すと、その死體が自然の姿勢になつてゐると想像するのは不可能であるやうに思はれた。多少亂れてゐる（それは、多分、鳥がその死體を啄んだためになつたのか、あるひはだんだんと遺骸を取巻いて來た蔓草が徐々に生ひ茂つたためになつたのであらう）のを別にすれば、その男は完全に眞直に横つてゐて、——兩足は一つの方向を指し、兩手は、水へ跳び込む人の手のやうに頭の上へ伸ばして、ちやうどその反對の方向を指してゐるのであつた。

「俺のぼけた馬鹿頭にも一つ考えついたことがあるよ。」とシルヴァーが言つた。「ここに羅針儀がある。あすこに骸骨島のでつぺんが齒みてえに突き出てる。ちよいと方位を取つてみてくれろ、その骸骨の向いてゐる方のな。」

それをやつてみた。死體は眞直に島の方向を指してゐたし、羅針儀は正しく東南東微東を指示した。

「さうだらうと思つてた。」と料理番が叫んだ。「これあ指針だよ。この線を眞直に行くと北極星と結構なお賣があるつて寸法さ。だが、畜生！ フリントのことを思ふと身内がぞくぞくするぞ。これも奴さんの洒落に違えねえ。奴さんとあの六人の奴だけがここへ來て、奴さんが其奴らを一人残らず殺しちまつた。それから此奴一人だけをここへひつぱつて來て、羅針儀に合せて寝かしたんだよ、あん畜生！ 此奴あ骨が長えし、髪の毛が黄ろいな。さうだ、これあアラダイスだらう。お前はアラダイスを覺えてるだろ、トム・モーガン？」

「ああ、ああ、覺えてるよ。」とモーガンが答へた。「彼奴あおいらに借金があつたんだよ、さ

うなんだ。それにここへ上陸する時にやおいらのナイフを持つて行きやがつたぜ。」

「ナイフつて言やあ、どうして奴のナイフがここらにころがつてゐねえんだろな？」と別の男が言つた。「フリントは水夫のポケットから物を抜き取るやうな人間ぢやなかつたし、鳥だつてあんなものは持つて行くめえがなあ。」

「違えねえ、そりやほんとだ！」とシルヴァーが叫んだ。

「ここにや何一つ残つてやしねえ。」とメリーがまだ骸骨の中を探りながら言つた。「銅貨一枚なけりや煙草入れ一つもねえや。これあどうも當り前ぢやねえと思ふな。」

「うん、確かに、さうだ。」とシルヴァーが同意した。「當り前でもなけりや、有難くもねえ、つてところさ。いやどうも驚くねえ！ 兄弟。だが、もしフリントが生きてたら、ここはお前たちにも己にもよくねえ處だつたらうぜ。彼奴らも六人だつたが、己たちも六人だ。そして彼奴らは今骸骨になつてゐるんだからな。」

「おいらはあの人の死んだのをこの眼で見んだ。」とモーガンが言つた。「ピリーの奴がおいらをつれて入つたんさ。すると、あの人はもう死んで眼の上に銅貨をのつけてゐたよ。」

「死んだとも、——さうさ、確かにあの人は死んぢまつたよ。」と繃帯をした奴が言つた。「だが、もし幽霊つてもものが出るすとすりや、フリントの幽霊は出るだらうて。氣の毒に、あの人はよくねえ死に方をしたからな、フリントは！」

「さうさ、その通りだつたよ。」と別の者が言つた。「あの人は怒つたり、ラムを持つて來いっ

て嘔吐つたり、また唄を歌つたりしてゐた。唄と言やあの人は『十五人』ばつかしたつたなあ、兄弟。で、ほんとのところを言や、己ああれからつてものはあの唄を聞くなあ好きぢやねえんだ。ありやあえらく暑い時で、窓が開けつ放しになつてたんで、あの唄がとつてもはつきり聞えて来たよ。——でもその時にやもうあの人には死の網がかかつてたのさ。」

「おい、おい、」とシルヴァーが言つた。「その話はもうよせよ。奴さんは死んぢまつたんだし、幽霊になつて出て来もしねえよ。少くも晝のうちには出て来はしめえ。そいつは間違えつこなしだ。心配は身の毒さ。さあ、ダブルン金貨を探しに前進だ。」

私たちは出發するにはした。が、太陽がかんかん照つてぎらぎらする晝間であつたにも拘らず、海賊どもはもう分れ分れになつて森の中を走つたり喚いたりせずに、互に並んで歩き、息をひそめて話した。あの死んだ海賊の恐しさが皆の心にしみこんでゐたのだ。

### 第三十二章 寶探し——樹の間の聲

一つには今の騒ぎで氣が減入つたのと、また一つにはシルヴァーや病氣の連中を休息させるために、一行の者全體は、高地の頂上に達すると直ぐ、腰を下した。

その高原は西の方へ幾らか傾斜してゐたので、私たちの休んだ場所からは、どちら側にも廣い

展望が見渡せた。前には、樹々の梢の上に、寄波で縁取られてゐる森の岬が見えた。背後には、碇泊所や骸骨島が見下せたばかりではなく、東の方に——例の出洲と東側の低地とを全く越えて——渺茫たる外海までが見えた。私たちの眞上には遠眼鏡山が聳え立つて、一本松が點々と生えてゐたり、絶壁で黒くなつてゐたりした。聞える物音としては、島のぐるり中から響いて来る遠くの碎け波の音と、叢林の中で鳴く無数の蟲の聲だけであつた。人影一つなく、海上には帆影一つない。眺望の廣大さまでがその寂寥の感じを一入増した。

シルヴァーは、腰を下すと、彼の羅針儀で方位を取つた。

「骸骨島から一直線のあたりには、『高い木』は三本ある。」と彼は言つた。「『遠眼鏡の肩』つてのは、あそこの少し低くなつた處のことだらうと思ふな。もう金をめつけるなあ造作のねえ事さ。先に腹を拵えてえやうな氣もするな。」

「おいらは腹が空いてやしねえ。」とモーガンが唸るやうに言つた。「プリントのことを思つたんで空かねえんだらう——と思ふんだ。」

「ああ、でも、お前、お前はあの男の死んでるのを有難えと思へ。」とシルヴァーが言つた。

「あの男は人相の悪い奴だつたな。」と別の海賊が身震ひしながら叫んだ。「おまけに、顔が青くつてね。」

「ありやあラムのためになつたんだよ。」とメリーが言ひ足した。「青い！　うむ、青かつたねえ。それあほんとの言葉だよ。」



あの骸骨を見つけてこんなことばかりを考へるやうになつてからは、彼等はだんだんと低い聲で口を利くやうになり、今では殆ど囁き聲くらゐになつてゐたので、彼等の話し聲は森の静寂を殆ど破らなかつた。と、突然、私たちの前面の樹立の真中から、力のない、高い、震へ聲で、節も文句もよく知つてゐるあの唄を歌ひ始めるのが聞えて來た。――

「死人箱しびるばこにやあ十五人――

よいこらさあ、それからラムが一纏と！」

この時の海賊どものやうにひどくびつくりした人たちは私は一度も見たことがない。魔法をかけられたやうに六人の者は顔色を失つてしまつた。跳び上る者もゐたし、他の者にしがみつくるもゐた。モーガンは地面にへたばつた。

「ありやフリントだ、遠え――！」とメリーが叫んだ。

その唄は始まつた時のやうに突然止んだ。――誰かが歌ひ手の口に手をあてたかのやうに、歌の半ばで急に中絶した、とでもいふ風であつた。緑の梢の間から日光で輝いてゐる澄んだ大氣の中をずつと遠く流れて來たので、私にはその唄は軽やかに心地よく聞えた。だから他の連中がそんなに恐しがつてゐるのは不思議であつた。

「おい、」とシルヴァーは、灰色になつた唇で言葉を出さうと努めながら、言つた。「こいつあ

いけねえ。出かける用意をしろ。これあどうも變なこつた。己にはあの聲は誰だかわからねえ。だが、あれあ誰かが悪戯わるわざをしてるんだ、――誰か正體のある人間がだ、それにや遠えねえ。」

かう言つてゐるうちに彼は勇氣を取戻し、それと共に顔色も幾分ついて來た。既に他の者たちも彼の勵ます言葉に耳を藉しかけて、少し正氣に返つてゐたが、その時、また同じ聲が聞え出した。――今度は唄ではなくて、微かな遠くからの呼び聲で、それが遠眼鏡山の谷間にもつと微かにこだました。

「ダービー・マグロー、」とその聲は哀哭する――それがその聲を最もよく言ひ現す言葉であつた――やうに言つた。「ダービー・マグロー！　ダービー・マグロー！」と幾度も幾度も繰返し、それから少し聲を高めて、ここには書かない罵り言葉と共に、「ラムを船尾へ持つて來をい、ダービー！」と言つた。

海賊どもは地面に根が生えたやうに立ち竦み、眼玉が顔から跳び出さうであつた。その聲が消えてしまつて永くたつても、彼等は猶も無言のまま恐しさうに前を見つめてゐた。

「もう確かだぜ！」と一人が喘ぐやうに言つた。「歸らうよ。」

「あれあああの人の死ぬ時の言葉だつた。」とモーガンが呻くやうに言つた。「あの人がこの世で一番おしめえに言つた言葉だ。」

ディックは自分の聖書を取り出して、べらべらと祈禱した。彼は、船乗になつて悪い仲間に入る前には、よい育ちであつたのだ。

それでも、シルヴァーは参らなかつた。齒をがちが鳴らしてゐるのが私には聞えたが、しかし彼はまだ降参してゐなかつた。

「この島にやダービーのことを聞いた奴は誰もゐねえ筈だ。ここにゐる己たちの他には一人だつてゐねえ筈だが。」と彼は呟いた。それから、強ひて元氣を出して、「兄弟、」と叫んだ。「己はあの金を取りにここへ来たんだ。人間にだつて悪魔にだつて負けやしねえぞ。フリントが生きてる時だつて己は奴がちつとも怖かなかつたんだ。死んでる彼奴なんか怖えもんか。ここから四分の一マイルとねえ處に七十萬ポンドつて金があるんだ。青つ面をした大酒飲みの老いぼれ海員の一——それも死んでる奴が怖えつてつて、さういふ大金に尻を見せ逃げるなんて分限紳士が、何處の世界にあるけえ？」

しかし彼の手下の者たちが元氣を盛り返す様子は一向になかつた。實際、むしろ、彼の言葉が死者に對して不遜なのに益々恐しがるやうだつた。

「止めろよ、ジョン！」とメリーが言つた。「幽靈に逆ふなよ。」

その他の者たちに至つては皆すつかり恐しがつて返事をすることも出来なかつた。彼等はそれだけの勇氣があつたならでんでに逃げ出したことであらう。だが恐怖のために彼等は互に寄り合ひ、ジョンの大膽さが自分たちを助けてくれるかのやうに、彼の直ぐ近くゐた。彼の方は、自分の弱氣をかなりに抑へつけてゐた。

「幽靈だと？ うむ、さうかも知れねえ。」と彼は言つた。「だが、己には腑に落ちねえことが

一つある。山彦がしたな。ところで、影のある幽靈なんて誰も見たことがねえ。とすればだ、幽靈に山彦なんかあつてどうするものかね？ そいつは變だろ、確かなに？」

この論據は私には甚だ薄弱に思はれた。しかし何が迷信家の心を動かすかわからぬもので、私の驚いたことには、ジョージ・メリーが大いに安堵した。

「うむ、そりやさうだな。」と彼が言つた。「お前は利口だよ、ジョン、確かに。さあ、引返すんだ、兄弟！ 己たちややり口が間違つてると思ふよ。考えてみると、なるほど、あれあフリントの聲みてえだつたが、やつぱり、あの人の聲そつくりぢやなかつたぜ。あれあ誰か他の奴の聲に似てたな、——あれああのう——」

「ベン・ガンさ、きつと！」とシルヴァーが呟鳴つた。

「うん、さうだ。」とモーガンが、膝をついてゐたのを跳び立ちながら、叫んだ。「ありやベン・ガンだよ！」

「それだつてあんまり變りはねえだろ？」とディックが尋ねた。「ベン・ガンだつてここに生きてゐねえことは、フリントと同じだ。」

しかし年をとつた方の海員たちはこの言葉を鼻であしらつた。

「なあに、ベン・ガンなんか誰も氣にかけやしねえ。」とメリーが叫んだ。「死んでゐるやうが生きてゐるやうが、誰も氣にかけやしねえや。」

彼等の元氣が恢復し、顔色も普通になつて來た様は、驚くべきほどであつた。間もなく彼等は

一緒にしやべり出し、時々話をやめて聞耳を立てた。それつきり何の聲も聞えて来なかつたので、やがて皆は道具を肩に擔つて再び出發した。メリーは、骸骨島から一直線に皆を歩かせるために、シルヴァーの羅針儀を持つて先に歩いて行つた。彼の言つたのはほんたうだつた。死んでゐるようが生きてゐるようが、ペン・ガンのことなど誰も氣にかけはしなかつた。

ディックだけはまだ例の聖書を手に持つて、歩きながら恐しさうにあたりを見廻してゐた。しかし誰も彼に同情する者はなく、シルヴァーなどは彼の用心を冷かしさへした。

「己あ言つたらう」とシルヴァーが言つた。——「お前は聖書を駄目にしたんだつて己あ言つたらう。誓言をするだけの役にも立たなくなつたものを、幽霊が怖がるとでもお前は思つてるのか？ これつぼちの値打もねえぜ！」と彼は、杖杖でちよつと身を支へながら、太い指をぼきつと鳴らした。

しかしディックは氣が樂になる筈もなかつた。實際、その若者が病氣に罹つてゐるのが間もなく私にははつきりわかつた。暑氣と、疲勞と、今の事の衝擊とで早められて、リヴジー先生の豫言した熱病が、明かにずんずんとひどくなつてゐたのだ。

その頂上は、このあたりでは開けてゐて氣持よく歩けた。前に言つたやうに高原は西の方へ傾斜してゐるので、私たちの進む途は少し下り坂になつてゐた。松の樹の大きいや小さいのが廣く離れて生えてゐたし、肉豆蔻や躑躅の叢の間でさへ、廣く開けた空地が熱い日光に焼けてゐた。私たちは、島を突つ切つて殆ど北西に進んで行くと、一方では、遠眼鏡山の肩の下に益々近づき、

また一方では、私が一度草舟の中で揺られて震へてゐたことのあるあの西側の灣が益々廣く見渡せた。

そのうちに例の高い木の中の一番初めの木のところへ著いたので、方位を取つてみると、その木ではないとわかつた。二番目の木もさうだつた。三番目の木は一叢の下生の上に二百フィート近くも高く空中に聳え立つてゐた。巨人のやうな植物で、赤い幹は小屋ほどの大きさがあつた。その周囲の廣い樹蔭では歩兵一箇中隊でも演習が出来たらう。これは島の東の海からも西の海からも遠くから目につくし、海圖に航海目標として書き入れられてゐたかも知れないくらいのものでつた。

しかし今私の道連の者どもの心を動かしたのは、その木の大きさではなかつた。それは、その擴がつた樹蔭の下の何處かに七十萬ポンドの黄金が埋めてあるといふことであつたのだ。彼等が近づくにつれ、金のことを思ふ心はさつきまでの恐怖を呑みこんでしまつた。彼等の眼はざらざらと燃えた。足は次第に速く軽くなつた。心は、彼等の一人一人を彼方で待つてゐるあの幸運、

一生涯中寶澤と快樂とをさせてくれるあの財寶に、すつかり夢中になつてゐた。シルヴァーは、ふうふう言ひながら、杖杖をついてびよこびよこ跳んで行つた。彼の鼻孔は眼で震へてゐた。その熱したてられてらした顔に蠅がとまると彼は狂人のやうに罵つた。私に括りつけてある綱を荒々しくひつぱり、時々は恐しい顔付をして私の方を振り向いた。確かに彼は少しも自分の氣持を隠さうとはしなかつた。そして確かに私はその彼の氣持を印刷物のやうに讀み

取つた。かうして黄金の直ぐ近くへ来ると、他のことはすべて忘れてしまつてゐたのだ。彼のした約束も醫師から聞いた警告も二つとも過去の事だつたのだ。そして、彼が寶を手に入れ、夜陰に乗じてヒスバニオーラ號を見つけて出して乗り込み、この島にゐる正直な人々を一人残らず叩き殺して、初めにもくろんでゐた通りに、罪惡と財寶とを積み込んで出帆してしまひたいと思つてゐるのだといふことは、私には疑ふことが出来なかつた。

かういふ懼れで心が亂れてゐたので、寶探しの連中の速い歩調に後れずについて行くのは私には辛かつた。折々私は躓いた。シルヴァーが綱を荒々しくひつぱつたり人殺しのやうな眼付で私を睨みつけたりしたのは、その時だつたのだ。私たちより後れてしまつて、今では殿となつてゐるディックは、熱が上り續けてゐるので、一人でべちやくちやと祈つたり罵つたりしてゐた。それも亦私のみじめさを増したが、その上、擧句の果に、私は、神をも敬はぬあの青い顔をした海賊が——唄を歌つたり酒を持つて来いと喚びたりしながらサヴァナで死んだといふ男が——嘗てこの高原で手づから六人の同類を殺したといふ慘劇のことを思つて、惱まされたのであつた。今はこのやうに平和なこの森も、その時は悲鳴で鳴り響いたに違ひない、と私は思つた。そして、さう思つただけでさへ、その悲鳴がまだ鳴り響いてゐるやうに思はれてならなかつた。私たちは今や茂みの縁に来た。

「ぼんざあい、兄弟、みんな一緒に行くんだぜ！」とメリーが叫んだ。そして先頭にゐる者が急に駆け出した。

と、突然、十ヤードと先へ行かないうちに、彼等が立ち止つたのが私たちに見えた。低い叫び聲が起つた。シルヴァーは、魔に憑かれた者のやうに柀杖の足で土をはね跳ばしながら、歩む速さを二倍にした。そして次の瞬間には彼と私もびたりと停つた。

私たちの前には大きな掘つた穴があつた。側面が落ち込んで、底に草が萌え出てゐるところからみると、極く昨今に掘つたものではなかつた。この穴の中には、二つに折れた鶴嘴の柄と、幾つもの荷箱の板が散らかつてゐた。その板の一つに、海象號といふ名——フリントの船の名——が、烙鐵で烙印を押してあるのを、私は見た。

すべてが疑ふ餘地のないほど明白であつた。隠してあつた物は見つけれられて奪はれてしまつたのだ。七十萬ポンドはなくなつてしまつたのだ！

### 第三十三章 首魁の没落

この世の中にこれほどの顛倒は決してなかつた。その六人の者は銘々まるでぶん殴られでもしたかのやうだつた。しかし、シルヴァーだけには、その打撃は殆ど直ちに過ぎ去つた。それまでは彼は競馬馬のやうにあの金のことばかりにひたすら心をはやらせてゐたのであつた。ところが、それが忽ちにしてびたりと止められたのである。そして彼は少しもあわてず、氣を取直し、他の

者たちがまだ失望を自覚するだけの餘裕がないうちに自分の計畫を立て變へてしまった。

「ジム」と彼が囁いた。「これを持って、面倒の起つた時の用意をしてるてくれ。」

そして彼は二つの銃身のあるピストルを一挺私に渡してくれた。同時に彼は北の方へ靜かに動き出して、數歩行つてその穴を私たち二人と他の五人との間にあつた。それから私を見て、「なかなか危いことになつたぞ。」と言ふかのやうに頷いてみせたが、實際、私もさうだと思つた。彼の顔付は今はずつかり親しうになつてゐた。こんな風に絶えず變るのに私も反感を起して、「君はまた寢返りうつたんだね。」と囁かずにはゐられなかつた。

彼にはそれに答へるだけの餘裕がなかつた。海賊どもが、罵り喚きながら、相次いで穴の中へ跳び降り始め、板を脇へ投げ出しながら、指で掘り出したのである。モーガンが金貨を一枚見つけた。彼は罵り言葉を續けざまに吐きながらそれを差し上げた。それは二ギニー金貨で、十五秒ほどの間彼等の手から手へと渡されてゐた。

「二ギニーだぜ！」とメリーが、それをシルヴァーに振つてみせながら、呶鳴つた。「これがお前の言ふ七十萬ポンドけえ？ お前は商賣のうめえ人間ぢやあなかつたかね？ お前は今までに何一つやり損ねたことのねえ男だと、この唐變木の間拔めが！」

「ずんずん掘つて見ろよ、手前たち。」とシルヴァーは落著き拂つて横柄に言つた。「豚胡桃でも出て来るだらうぜ、きつとな。」

「豚胡桃だ！」とメリーは金切聲で繰返した。「兄弟、あれを聞いたか？ うん、確かにあの男は何もかもみんな知つてたんだぞ。奴の面を見ろ。ちやんとあそこに書いてあるぜ。」

「へん、メリー。」とシルヴァーが言つた。「また船長になるつもりか？ 手前は押の強え野郎だよ、全く。」

しかし今度は誰も皆全然メリーの味方をした。彼等は、恐しい眼付をして背後を振り向きながら、穴から這ひ上りかけた。ただ一つだけ私たちに都合のよささうなことを私は認めた。彼等は皆シルヴァーと反對の側に上つて行つたのである。

かうして、私たちは、一方に二人、もう一方に五人、穴を間にして立つたが、誰一人第一撃を始めるだけの勇氣を出す者はなかつた。シルヴァーは身動きもしなかつた。杖杖について眞直に立つたまま、彼等を見つめて、いつもの通りに自若としてゐるやうに見えた。確かに、彼は勇敢な男であつた。

たうとう、メリーは口を利いた方がよいと思つたらしかつた。

「兄弟」と彼が言つた。「奴らはあすこに二人つきりだぞ。一人は、已たちみんなをここまでつれて来て、已たちをこんなぶまな目に遭はせやがつた、老いぼれの不具だ。もう一人は、己が心の臟を抉り出してくれようと思つてる餓鬼だ。さあ、兄弟——」

彼は聲を張り上げ片腕を振り上げて、明かに突撃の指揮をするつもりだつた。しかしちやうどその時——ばあん！ ばあん！ ばあん！——と三發の小銃弾が茂みの中から飛んで来た。メリー

一は眞逆さまに穴の中へ轉がり落ちた。頭に繻帶をした男は獨樂のやうにくるくるつと廻つてから、横向にばつたりと倒れて、その場で死んだが、まだびくびく動いてゐた。他の三人はくるりと向を變へて一所懸命に逃げ出した。

瞬きする間もないうちに、のつぼのジョンは跪いてゐるメリーにピストルの二つの銃身から發射した。そしてメリーが斷末魔の苦悶をやりながら彼の方に眼をぐるりと向けると、彼は、「ジョージ、己がお前を往生させてやつたのだね。」と言つた。

同時に、醫師と、グレーと、ベン・ガンとが、肉豆蔻の木の間から、まだ煙の出てる銃を持つて私たちのところへ跳んで來た。

「前へ！」と先生が叫んだ。「全速力だ、みんな。奴らとボートの間を斷たなきやならん。」

それで私たちは非常な速さで駆け出して、時には胸のところまである藪の中も突き抜けて走つて行つた。

しかしシルヴァーだけは私たちに後れずについて來ようと一所懸命になつてゐたのだ。その男が胸の筋肉が張り裂けさうなくらゐるに杖をついて跳びながらやりおほせた業は、普通の健全な體の人間でもとても及ばぬ業であつた。これは先生もさう言つてをられる。さういふ譯で、私たちが傾斜面の頂上に著いた時には、彼は既に私たちより三十ヤードくらゐの後にあるので、今にも息も止りさうになつてゐた。

「先生、」と彼は呼びかけた。「あすこを御覽なさい！ 急ぐこたありませんぜ！」

確かに、急ぐ必要はなかつた。高原のもつと開けた處に、三人の生き残つた者たちが、初めに駆け出したと同じ方向に、眞直に後、橋山の方へ、まだ走つてゐるのが見えた。私たちは既に彼等とボートとの間にゐるのだ。それで、私たち四人は腰を下して息をついたが、その間に、のつぼのジョンが、顔の汗を拭ひながら、ゆつくり私たちに追ひついて來た。

「どうも有難うございました、先生。」と彼が言つた。「あんたは、わつしとホーキンスにとつちや、ちやうどいい時に來て下せましたやうで。で、やつぱりお前なんだな、ベン・ガン！」と言ひ足した。「うん、お前は確かに面白え奴だよ。」

「俺はベン・ガンだよ、さうさ。」と島に置去りにされた男は、もちもちして鰻のやうに體をくねらせながら、答へた。「で、」と彼は大分永く間をおいてから言ひ足した。「變りはねえかい、シルヴァーさん？ まづ達者だよ、有難う、つてとこだらう。」

「ベン、ベン、」とシルヴァーは呟いた。「お前に一杯喰はされようとはな！」

醫師は、謀叛人どもが逃げる時に棄てて行つた鶴嘴を一挺取りに、グレーを戻らせた。それから、ボートのある處まで私たちがぶらぶらと山を下つて行く間に、先生はそれまでに起つた事を手短に物語つてくれた。その話はシルヴァーが心から興味を持つたものであつた。そして薄馬鹿の置去り人のベン・ガンが始めから終りまでその主人公なのであつた。

ベンは、島中を永い間ただ一人でさまようてゐる間に、例の骸骨を見つけた。——その所持品を掠奪したのは彼であつたのだ。彼は寶を見つけた。そしてそれを掘り上げた（あの穴の中に

折れてゐたのは彼の鶴嘴の柄であつた。彼はその寶を背負つて、高い松の樹の根もとから、島の北東隅の二つ峯の山にある洞穴まで、うんざりするほど何度も何度も往復して運び、ヒスパニオーラ號の到着する二箇月前から、寶はそこに安全にしまつてあつたのである。

醫師は、あの攻撃のあつた日の午後、この祕密をベン・ガンから聞き出すと、また、その翌朝、碇泊所に船のゐなくなつたのを見ると、シルヴァーのところへ出かけて行つて、今ではもう無用のものになつた例の海圖を彼にやり、——ベン・ガンの洞穴にはガンが自分で鹽漬にした山羊の肉が十分に貯へてあるので、シルヴァーに食糧もやり、——柵壁から二つ峯の山まで安全に移る機會を得るために何もかもやつてしまつた。その山の方にゐれば、マラリヤに罹る恐れもないし、金の番をすることも出来たからである。

「君について言へばね、ジム」と先生が言つた。「私はさうしたくはなかつたんだ。だが私は、義務を守つてゐる人たちにとつて一番いいと思つたことを、したのだよ。で、君がその人たちの中の一人でなかつたとすれば、それは誰の咎だつたらうかね？」

その朝、海賊どもが先生のために怖い失望をすることになつてゐるので私がその捲添へを喰ふに違ひないといふことに気がつく、先生は洞穴までずつと駆け通して歸り、船長を護るのに大地主さんだけを殘して、グレーと置去り人をつれて出發し、あの松の樹の傍の近くゐられるやうにと、島を對角線に突つ切つて進んで行つた。けれども、間もなく私たちの方の一行が先に進んでゐることがわかつたので、足の速いベン・ガンを前に走らせて、一人で彼の出来るだけ

のことをさせることにした。その時に、彼は昔の船友達の迷信を利用してやらうと思ひついた。それが大いにうまく當つたので、グレーと醫師もやつて来て、寶探しの連中の到着しないうちに既に待伏せしてゐることが出来たのである。

「ああ」とシルヴァーが言つた。「ホーキンスをつれて来たのはわつしにや任せでした。さもなければ、あんたはジョン爺をずたずたに切らせて、何とも思ひなさらなかつたでせうよ、先生。」

「何とも思はなかつたらうて。」とリヴジー先生は機嫌よく答へた。

そしてこの時分には私たちは快艇のところへ著いてゐた。醫師は鶴嘴でその中の一艘を打ち壊し、それから私たちみんなはもう一艘の方に乗り込んで、北浦をさして海路で廻つて行かうと出發した。

それは八九マイルの航行であつた。シルヴァーは、もう殆ど死にさうなくらゐるに疲れてゐたけれども、私たち他の者と同様にオールを取らされ、舟は間もなく穩かな海の上をずんずんと飛ぶやうに進んだ。間もなく私たちは海峡を通り抜けて、島の南東の角を廻つた。そこは四日前にヒスパニオーラ號を曳綱で曳いて入つた處である。

二つ峯の山の傍を通り過ぎる時に、ベン・ガンの洞穴の黒い入口と、その傍に銃に凭れて立つてゐる人の姿が見えた。それは大地主さんだつた。私たちはハンケチを打ち振つて萬歳を三唱したが、シルヴァーの聲も誰にも劣らないほど熱誠にそれに加はつた。

更に三マイル進み、ちやうど北浦の口を入つたところで、私たちの出會つたのは他ならぬ、ひとりりで動いてゐるヒスパニオーラ號だつた。この前の満潮で浮き上つたのだ。そしてもし南の碇泊所のやうにひどい風があつたり強い潮流があつたりしたならば、船はもう二度と見られないところへ流れて行つてしまつたか、あるひは何處かへ坐礁してどうにも出来なくなつてしまつてゐたらう。しかし實際は、大樁帆が破損した以外には、悪くなつたところは殆どなかつた。それで、別の錨をつけて、それを一尋半の水の中へ落した。私たち一同は、ベン・ガンの寶藏に一番近い地點であるラム入江へと、再び漕いで廻つた。それからグレーが一人だけで快艇を漕いでヒスパニオーラ號へ戻り、そこで番をしてその夜を過すことにした。

濱から洞穴の入口までは緩い傾斜をなして上つてゐた。その頂上で、大地主さんが私たちを出迎へた。私には彼は懇ろに親切にしてくれて、私の脱走したことについては、叱るにも褒めるにも一言も言はなかつた。シルヴァーが丁寧なお辭儀をすると、少しむつと赤い顔をした。

「ジョン・シルヴァー」と彼は言つた。「お前は非常な悪黨で詐欺師だ、——實に驚くべき詐欺師だよ。私はお前を告訴すると言はれてゐる。だから、しないつもりだ。しかし死んだ人たちが磨石のやうにお前の野にぶら下つてゐるのだぞ。」

「どうも有難うござえます、はい。」とのつぼのジョンは、またお辭儀をしながら、答へた。

「私に有難うなんてよくも言へたもんだ！」と大地主さんが叫んだ。「私としては自分の義務を非常に怠ることになるんだ。退いてゐろ。」

それから私たちみんなは洞穴へ入つた。そこは廣い風通しのよい場所で、小さな泉と清水の水溜りがあり、その上には羊齒が蔽ひかかつてゐた。床は砂地であつた。大きな焚火の前に、スモレット船長が寝てゐた。そして、遠くの方の隅には、大きな山のやうな貨幣と、四邊形に積み上げられた黄金の棒とが、焚火の焰にただぼんやりとちらちら光つてゐるのが見えた。それが、私たちが手に入れようとして遙々やつて來た、そしてまたヒスパニオーラ號から既に十七人の生命を失はさせた、フリントの寶なのであつた。それを集めるために、どれだけ多くの血が流され悲しみが味はれたか、どれだけ立派な船が海原で船底に孔をあけて沈められたか、どれだけ勇敢な人々が眼隠しされて船側の板を歩かせられて海に落ちたか、どれだけの大砲の彈丸が撃たれたか、どれだけだけの恥辱と虚偽と殘虐とが行はれたか、恐らく、生きてゐる人間でそれを語り得る者は一人もなかつたらう。だが、それらの罪惡にそれぞれ與り、またそれぞれその報酬に與らうと望んでその甲斐のなかつた人間が、その島にまだ三人ゐるのであつた。——シルヴァーと、年寄のモーガンと、ベン・ガンとだ。

「來給へ、ジム。」と船長が言つた。「君は君の繩張ではいい子供だよ、ジム。だが君と私がもう一度一緒に航海に出ようとは私は思はんな。君は生れつきあまり人氣者なので私には手に負へんよ。そこにゐるのはお前だな、ジョン・シルヴァー？ おい、何しにここへ來たのだ？」

「わつしの義務をやりに戻つて來ましたんで、はい。」とシルヴァーが答へた。  
「ふむ！」と船長が言つた。そしてそれつきり何も言はなかつた。



その夜私が味方の人たちに圍まれて食べた晩餐の何と楽しかつたことか。また、ベン・ガンの鹽漬の山羊の肉や、ヒスパニオーラ號から持つて来た幾つかの珍味や一罇の年經た葡萄酒で、その食事の何とおいしかつたことか。確かに、それ以上に樂しげな幸福な人々はまたとなかつたに違ひない。そして、そこにはシルヴァーもゐて、殆ど焚火の光の届かない後の方に坐つてゐたが、しかしうまさうに食べ、何でも用のある時には直ぐに前へ跳んで来るし、私たちの笑ふ時にはおとなしく聲を立ててそれに加はりさへした。——全く、航海に出かけて来た時と同じあの柔和な、慇懃な、從順な船員であつた。

### 第三十四章 それから結末

その翌朝、私たちは早くから働き始めた。この恐しくたくさんの黄金を濱まで陸路で一マイル近く運搬し、そこからボートでヒスパニオーラ號まで三マイル運搬するのは、そのやうな小人數の働き手にはずるぶんの仕事であつたからである。まだ島をうろついてゐる三人の奴は、大して私たちに面倒をかけなかつた。山の肩のところに歩哨を一人だけ立たせておけば如何に不意に襲つて來ても十分大丈夫だつたし、その上、彼等は戰鬪にはもう十二分に懲々してゐると私たちは思つたのだ。

だから作業はどしどし進められた。グレーとベン・ガンとはボートで往復し、彼等の行つてゐる間にその他の者は濱に寶を積み上げた。網の端にぶら下げた二本の金の棒は、大人一人に十分な荷で、——それを持つてのろのろと歩けるくらゐのものだつた。私は、運ぶのには大して役に立たないので、一日中洞穴の中にあつて、せつせと金貨をパン囊の中に詰め込んでゐた。

それは實に珍しい蒐集物だつた。いろいろな貨幣のある點ではピリー・ボーンズの箱の中にあつた金と同じであつたが、それよりはずつとたくさんでもありずつと種々雑多でもあつたので、私にはそれを種類分けするのがこの上もなく面白かつた。イギリスや、フランスや、スペインや、ポルトガルなどの貨幣があり、ジョージ金貨や、ルイ金貨もあれば、ダブルン金貨、ダブル・ギニー金貨、モイドー金貨、セクイン(註八四)金貨もあり、過去百年間のヨーロッパのあらゆる國王の肖像を刻した貨幣があるかと思ふと、絲の束か蜘蛛の巢のやうに見えるものを押し刻した珍奇な東洋の貨幣もあり、丸い貨幣に四角い貨幣、それから頸にかけでもするかのやうに眞中に孔を穿つた貨幣まであつて、——世界中の殆どあらゆる種類の金がこの蒐集物の中にあつたに違ひないと思ふ。數はと言へば、確かに秋の木の葉のやうにあつたので、私の背中は屈んでゐるために痛くない、指はそれを擇り分けるのでづきづきしたくらゐであつた。

次の日もまた次の日もこの作業が続いた。毎日夕方になると一財産が船に積み込まれるのだが、しかし次の一財産が翌朝を待つてゐるのだつた。そして、この間中、私たちはあの三人の生き残つてゐる謀叛人の消息を少しも聞かなかつた。

たうとう——三日目の晩だつたと思ふが——先生と私とが、島の低地を見下せる山の肩のところをぶらぶら歩いてゐると、その時、下の眞暗な闇の中から、叫んでゐるやうでもあり歌つてゐるやうでもある聲が風に運ばれて來た。私たちの耳に届いたのはほんの少しで、その後は直ぐ元の静寂に返つた。

「可哀さうにな。あれあ謀叛人どもだよ！」と先生が言つた。

「みんな酔つ拂つてゐるんで。」とシルヴァーの聲が私たちの背後からした。

シルヴァーは全然自由を許されてゐたと言つてもよく、また、毎日劍もほろろの扱ひを受けてゐたにも拘らず、自分ではもう一度すつかり特權を與へられた親しい従者になつたつもりであるやうだつた。實際、彼がさういふ馬鹿にされた待遇を實によく忍んで、絶えず飽くまでも慇懃にみんなに取入らうと努めてゐたことは、非常なものであつた。それでも、誰も彼を犬以上にはあしらはなかつたと思ふ。さうでないのは、ベン・ガンか、私くらゐのもので、ベン・ガンは昔の按針手クオイクマスケをやはりひどく恐れてゐたのだし、私は事實彼に感謝すべきことがあつたのだ。尤も、實際、私には他の誰よりも彼を悪く思つてもいい理由もあつたやうに思ふ。といふのは、彼があゝの高原で新たな裏切りを企たくらんでゐるのを見てゐたからであるが。さういふ次第で、醫師が彼に答へたのはかなり素氣なかつた。

「酔つ拂つてゐるか譚語だんごを言つてゐるかだ。」と先生が言つた。

「仰しやる通りでござえますよ。」とシルヴァーが答へた。「そして、どつちだつてちつとも構

やしません、あんたにもわつしにも。」

「お前は自分を慈悲深い人間だと言つてくれとは言ふまいな。」と先生は冷笑しながら答へた。「で、私の氣持を聞いたらお前は驚くかも知れんよ、シルヴァー君。だがもし彼等が確かに譚語を言つてゐるものとわかればだ——あの中の少くとも一人が熱病に罹つてゐることはまづ確かなんだからな——私はこの野營地から出て行つて、自分の體にはどんな危険を冒さうとも、自分の醫術の助けをあの連中に藉してやらねばならん。」

「失禮ですが、あんた、そりやあいけませんよ。」とシルヴァーは言つた。「あんたの御大切ごたいせつな命がなくなりませうからね。違えありません。わつしは今ちやすつかりあんたの側についてゐるんです。だから味方の人を滅らせたかありません。あんたは勿論のことです。あんたにや御恩を受けてゐますからね。だがあそこの下にゐる奴らと來ちやあ、約束を守るやうな奴ちやござえません、——さうですとも、守りてえと思つたつて守れねえ奴らでさあ。おまけに、あんたが約束を守るつてことも、奴らにや信じられねえんですから。」

「うん、さうだらう。」と先生が言つた。「お前は約束を守る人間だよ。それは私たちも知つてゐるさ。」

さて、それがその三人の海賊について私たちの得た殆ど最後の消息であつた。ただ一度だけ私たちはずつと遠くで一發の銃聲を聞き、彼等が獵をしてゐるのだらうと推測した。會議が開かれて、彼等を島に棄てて行かねばならぬといふことにきまつた。——これにはベン・ガンが非常に

喜んだし、グレイが大いに賛成したといふことは、言つておかねばならない。私たちは、かなり多くの火薬と弾丸と、鹽漬の山羊の肉の大部分と、數種の薬と、他の幾つかの必需品と、道具類と、衣類と、一枚の餘分の帆と、一二尋の綱と、それから醫師の特別の希望で煙草の立派な贈物とを、残しておいてやつた。

それが殆どその島での私たちの最後の行爲であつた。それ以前に、私たちは寶を船に積み込んでしまひ、何かの難儀のあつた場合の用意にと十分の水と山羊の肉の残りとを運び入れておいたのだ。そして遂に、或る朝、私たちは、自分たちに思ふままに出来るのは殆どそれだけだつたが、錨を揚げ、嘗て船長が防柵で掲げてその下で戦つたあの國旗を翻しながら、北浦を出帆した。

間もなく私たちにわかつたことだが、例の三人の奴は私たちの思つたよりも近くで私たちを見てゐたに違ひない。といふのは、瀬戸を抜け出る時には、船は南の岬の極く近くを進まなければならなかつたが、その岬の砂の出洲に彼等が三人とも一緒に跪いて、哀願するやうに兩腕を擧げてゐるのが見えたからである。彼等をそんなみじめな有様に残してゆくのは、私たちみんなに憐みの心を起させたと思ふ。けれども私たちはまた暴動の起るやうな危険を冒すことは出来なかつたし、それに彼等を國へつれて歸つて絞首臺に送るのは親切が却つて仇になるやうなものであつたらう。醫師は彼等に聲をかけて、食糧品を残しておいてやつたことと、それが何處にあるかといふことを知らせてやつた。しかし、彼等はやはり私たちの名を呼び續けて、後生ですからお慈悲にこんな處に残して行つて死なせないで下さいと哀訴してゐた。

たうとう、船が尙もその針路を續けて、今では聲の届かないところへずんずん進んでゐるのを見ると、その中の一人——どの男だつたかわからない——が噎れた叫び聲をあげながら跳び立つて、銃を肩にあてたかと思ふと、一發ぶつ放した。その弾丸はシルヴァーの頭上を越え大橋帆を貫いてびゆうつと飛んで行つた。

その後は、私たちは舷牆の蔭に隠れてゐたが、その次に私が顔を出して見た時には彼等はもう出洲から姿を消してしまつてゐて、その出洲さへも次第に遠ざかつて殆ど見えなくなつてゐた。それが、とにかく、そのことの終りだつた。そして正午前には、私の何とも言へぬほど嬉しかつたことには、寶島の一番高い岩までが青い水平線の下に没してしまつた。

私たちは人員がひどく足りなかつたので、船中の者は誰も彼も働かなければならなかつた。——ただ船長だけは船尾に敷いた敷蒲團に横つて命令を下してゐた。よほど恢復してはゐたけれども、まだ安靜を要したからである。私たちはスペイン領アメリカ(註八五)にある一番近い港に船首を向けた。それは新水の水夫がなしに歸航するといふ危険を冒すことは出来なかつたからだ。ところが今はまだそれがなかつたものだから、方向不定の風が吹いたり疾強風が二度も吹いて來たりして、そこへ著かないうちに私たちは皆へとへと疲れてしまつた。

ちやうど日没の頃に、船は陸地に圍まれた實に美しい灣内に投錨した。すると直ぐに、海岸から黒人やメキシコ・インド人や混血人などの一杯に乗つてゐる小舟が周圍に漕ぎよせて來て、果物や野菜を賣りつけたり、海の中へ小錢を投げて貰つて潜つて取らせてほしいと言つたりした。

そんなにたくさんのにこにこした愛嬌のある顔（殊に黒人）や、熱帯の果物の香味や、とりわけ、町にともれ始めた灯影は、あの島に滞在してゐた間の陰惨な血腥いいろいろな事と對照して、全く恍惚とさせるほどであつた。先生と大地主さんとは、私をつれて、宵の口を陸で過さうと上陸した。ところが、そこで二人はイギリス軍艦の艦長に逢つて、その人と話しこみ、その人の軍艦へ一緒に行き、短く言へば、非常に愉快で時の移るのも忘れてしまつたので、私たちがヒスパニオーラ號の舷側に歸つて來た時には夜がもう明けかかつてゐたのであつた。

ベン・ガンがただ一人で甲板にゐたが、私たちが船に上るや否や、馬鹿に體を振りながら、私たちに白狀を始めた。シルヴァーが逃げたのだ。數時間前に彼が岸からやつて來た小舟に乗つて逃げ出すのを、その置去り人は見て見ぬ振りをしてゐたのであつた。そして今、彼は、さうしたのはただ私たちの命を救ひたかつたため、もし「あの一本脚の男が船に残つてた」なら、私たちの命はきつとなくなつたらう、と斷言した。しかし、それだけではなかつた。料理番は空手では行かなかつた。彼は誰も氣づかない間に隔壁を切り抜いて、多分三四百ギニーくらゐ入つてゐる貨幣の囊を一つ、これから先の放浪の用意にと、持つて行つたのである。

それくらゐの廉い金で彼を厄介拂ひしたことを皆は喜んだと私は思ふ。

さて、かいつまんで話せば、私たちはその港で數人の船員を雇ひ入れて、無事に歸航を續け、ヒスパニオーラ號がブリストルに到着したのは、ちやうどブランドリーさんが伴船の準備をしようと考へかけてゐた時であつた。出帆した時に乗つてゐた人々で船と一緒に戻つて來たのは五人

だけだつた。まさしく、「残りの奴は酒と悪魔が片附けた」のだ。尤も、確かに、私たちは、あの海賊どもの歌つた――

「七十五人で船出をしたが、  
生き残つたはただ一人。」

といふその船ほどのひどい目には遭はなかつた譯であるが。

私たちは皆、その賣をたつぷり分けて貰つて、銘々の性質に従つて、利口にか愚かにか使つた。スモレット船長は今では海上生活を止めてゐる。グレイは自分の貰つた金を貯蓄したばかりではなく、急に立身したいといふ望みを起して、自分の本職を勉強した。そして今では立派な全帆裝船の副船長でその共同所有者の一人になつてゐる。それに結婚もして、子供もある。ベン・ガンはと言ふと、彼は千ポンド貰つたのであるが、それを三週間で使ひ果すか無くするかしてしまつた。いや、もつと正確に言へば、十九日間だ。何故なら、二十日目にはまた金を貰ひにやつて來たのだから。それから、彼は、まさしく島で懸念してゐた通りに、門番にして貰つた。今でもやはり生きてゐて、多少馬鹿にされてはゐるが、村の子供たちに非常に好かれてゐて、日曜日や聖徒祭日には教會での名うての唱歌者になつてゐる。

シルヴァーのことは、私たちはあれから消息を聞いたことがない。あの恐しい一本脚の船乗は

たうとう私の生涯からすっかり消え失せてしまった。しかし、恐らく彼は黒人の細君にめぐり逢つて、多分まだその細君やプリント船長と一緒に安樂に暮してゐることだらう。さうであつてほしいものと思ふ。といふのは、あの世では彼の安樂になれる見込は極く少いからだから。

銀の棒と武器(註八六)とは、私にはよくわからぬけれども、多分、プリントの埋めた處にまだあるのだらう。そして確かにそこにあらうがどうだらうが私の構つたことではない。牛と荷馬車の綱とでひつばられようとも、私はあの呪はれた島へはもう二度と行かないつもりだ。そして今でも私のみる一番の悪夢は、あの島の岸にどどうつと打ち寄せてゐる波の音を聞く時か、または、「八銀貨！ 八銀貨！」といふプリント船長の鋭い聲が耳の中に鳴り響いて、寢床の中でがばと跳び起きる時なのである。

## 註

〔買ふのを躊躇する人に〕

- 一 キンググストンヤ、……………クーパー。——「キンググストン」はウィリアム・ハンリー・ジャイルズ・キンググストン（一八一四—一八八〇）。「勇者バランクティン」はロバート・マイケル・バランクティン（一八二五—一八九四）。共にイギリスの少年文學の作者である。「森と波とのクーパー」はアメリカの小説家ジェームズ・フェニモア・クーパー（一七八九—一八五二）をさす。未開拓時代のアメリカ大陸を描いた五部作、及び海洋文學を以て有名であり、それらの作品は少年の讀物としても喜ばれてゐる。二行後の「それらの人や彼等の創造物」とは、これらの作家やその作中人物のことである。前節の「置き去り人」については、本文の第十五章に説明されてゐる。

〔第一篇 老海賊〕

- 二 「ベンボー提督屋」。——ジョン・ベンボー（一六五三—一七〇二）といふ十七世紀末のイギリスの有名な提督の名を屋敷にし、その肖像を看板にしてゐる宿屋である。尙、この宿屋は居酒屋も兼ねてゐるのである。
- 三 船員衣類箱。——船員が航海中に衣類その他の所持品を入れる木製の箱。船の水夫部屋の舷側にびつたり嵌るやうに、普通は、側が少し傾斜して、底よりも蓋の方が小さくなつてゐる。
- 四 辨髪が……………——往時の水夫は短い辨髪を下げてゐた。
- 五 「死人箱にやあ……………」——西インドの海賊のことを歌つた唄の最初の二行である。第二行は疊句リフレインになつてゐる。「死人箱」といふのは西インド諸島中の一つの小島の名、海賊船がその死人箱島に乗り上げ九時に助か

つたのは僅か十五人の海賊とラム酒が少しとだけであつたといふ。それからこの幾句が出てゐるのであつて、幾句の方は唄の本筋には無関係なのである。第一行を水夫長が歌ふと、第二行の幾句を水夫たちが合唱して、「よいこらさあ」の「さあ」に當るところで、力を合せて、鐘を捲き揚げる絞盤の挺をぐいと廻し、オにまた水夫長が歌ひ、合唱がそれに續くのである。

- 六 驛遞馬車。——宿驛と宿驛との間を定期に往復する乗合馬車。鐵道が出来る前の主要な交通機關であつた。
- 七 ブリストル。——ブリストルはこの物語の時代にはイギリスでの第二の大きな海港であつた。
- 八 板歩かせ。——舷から海へ突き出した板を眼隠しして歩かせ、海中へ陥つて溺死させることで、十七八世紀頃に海賊が彼等の捕虜を殺すために用いた方法である。
- 九 ドウライ・トーテューガズ。——メキシコ灣のフロリダ半島の南方の海上にある一群の珊瑚礁。
- 一〇 スペイン海。——往時、南アメリカの北岸のカリブ海に面した地方一帯の海を漠然と指した名稱。スペイン本國と當時のスペイン領アメリカとの航路に當り、昔盛んに海賊が出没した。
- 一一 兩手を揉み絞る。——苦しみ、悲しみ、悶えの時などの身振り。
- 一二 髮粉。——この頃の紳士は假髮をつけてゐたので、その假髮にふりかける粉のこと。
- 一三 彎刀。——この頃の船乗のよく持つてゐた、重い、彎曲した刀。
- 一四 ぶらんこ。——「ぶらんこ往生」、即ち絞殺、絞刑のこと。
- 一五 刺絡針を取つて……。——昔の醫術に、刺絡と言つて、血管を刺して血を出す療法があつたのである。
- 一六 黒犬なんぞは……。——英語の「黒犬」といふ語は「不機嫌」といふ意味でもあり、「黒犬を背負ふ」は「不機嫌である」、「機嫌が悪い」といふことを意味する。その意味を使つた洒落である。
- 一七 聖書に書いてある……。——新約全書使徒傳第一章第二十五節に「既にユダは此つとめを離れて其住

くべき處に往きたり。」とある。「聖書に書いてあるあの男」はこのイスカリオテのユダをさし、「往くべき處」は地獄のことである。

- 一八 サヴァナ。——北アメリカの大西洋岸にある港。今の合衆國のジョージア州にある。
- 一九 ダブルーン金貨や……。——「ダブルーン金貨」は往時のスペインの金貨。「ルイドル金貨」はルイ十三世時代に初めて鑄造されて大革命まで通用してゐたフランスの金貨。「ギニー金貨」は十七世紀後葉から十九世紀初葉まで流通してゐたイギリスの金貨。「八銀貨」は表にR（ハレーアルの意味）の字を記してあるスペインの古銀貨である。この物語は冒頭に書いてあるやうに一七——年代のことであるから、當時はこれらの貨幣が流通してゐたのであるが、ギニー金貨以外は外國の貨幣であるから、勘定が出来ないのである。
- 二〇 ジョージ金貨。——當時流通してゐた聖ジョージの像を刻したイギリスの貨幣。
- 二一 嗅鹽。——婦人などに用ふる鼻で嗅がせる氣附藥。
- 二二 黒髯。——木名エドワード・テイイチ。スペイン海を荒し廻つた殘忍不敵な有名な海賊。
- 二三 トウリニダッド。——西インド諸島中の最南の島。スペイン海にある。
- 二四 スペイン港。——トウリニダッド島の首都。
- 二五 バーム礁島。——北アメリカのフロリダ半島の西海岸にある島。タムパ灣を港内に有するタムパ灣の入口にある。
- 二六 カラカス。——南アメリカのヴェネズエラの首府。
- 二七 とつくの昔に珊瑚に……。——人間が海に沈んで死ぬと骨が珊瑚になると昔は考へられてゐたからである。
- 二八 島の地圖。——巻頭の地圖参照。尙、第三篇以後に於ては物語の進行に従ひ必要に應じてこの地圖を屢々参照のこと。
- 二九 一ポイント。——羅針盤の周圍の三十二分の一。即ち直角の八分の一の角度。

## 〔第二篇 船の料理番〕

- 三〇 スクーナー船。——縦帆式帆装の帆船。時には四櫓または五櫓のものもあるが、普通二櫓あるひは三櫓である。帆が縦帆式であることは特に第五編のために記憶されること。
- 三一 ホーク。——イギリスの有名な提督エドワード・ホーク（一七〇五—一七八一）のこと。一七四七年と一七五九年とにフランスの艦隊と戦つて破つたことがある。
- 三二 水夫らが揚錨絞盤の周りを……歩き廻る。——即ち、絞盤を廻して錨を捲き揚げ、出帆すること。
- 三三 悪しき者虐遇を息める處。——冥土のこと。舊約全書ヨブ記第三章第十七節に「彼處にては悪しき者虐遇を息め、倦み憊れたる者安息を得。」とある。
- 三四 杖杖。——跛者などが腋の下にあてて歩くに用ふる丁字形の杖。撞木杖。
- 三五 三孔滑車。——船で静索や支索を張つたりその他の目的に用ひる繩索を通す三箇の孔のあいてゐる滑車。圓くて、孔が三ついてゐるので、顔を罵つて三孔滑車かと言つたのであらう。因に、これらの船乗たちはその會話に頻りに海語を用ひてゐる。
- 三六 船底潛らせ。——長い窓でたぐつて一舷から他舷へ、または船首から船尾へ、船底の水を潜り越させる刑罰のこと。往時イギリスやオランダの海軍で一種の懲罰として重罪人に科したものである。
- 三七 中央刑事裁判所。——ロンドンの往時の有名な裁判所。
- 三八 ボー街。——一七四九年に建てられたロンドンの有名な警察裁判所のある街の名。
- 三九 一クオート。——ガロンの中の四分の一。わが六合賦。
- 四〇 封緘命令。——或る時期まで、または船艦などが或る地點に達するまでは、開封すべからざる命令。その時期またはその場所に到つて初めて開封して任務を知るのである。

- 四一 圓材。——船では櫓、桁、防材などをいふ。
- 四二 肉焼き臺。——大きな肉をのせて焙る鐵製の枠のこと。料理室で使ふものであるから、それを料理番のジョン・シルヴァーの綽名にしたのである。
- 四三 イングランド船長。——實在した有名な海賊、ネッド・イングランドのこと。
- 四四 マダガスカルにも……——マダガスカル島は往時インド洋の海賊が根據地とした島。マラバーはインド南西の海岸、スリナムはオランダ領ギアナのこと、プロヴィデンスはカリブ海にある島、ポートベローはパナマ地峽の北岸にあつた港、いづれも昔海賊に荒された土地であつた。
- 四五 ゴア。——インドの西海岸にあるポルトガルの植民地。
- 四六 頭を突き出す。——怒つた時の態度。
- 四七 コーソー要塞。——アフリカの黄金海岸にあつたイギリスの要塞。
- 四八 ロバーツ。——海賊バーソロミュー・ロバーツのこと。最後に軍艦と戦闘して死んだ。
- 四九 デーヴィス。——海賊ハウエル・デーヴィスのこと。大膽無類の海賊だつたが、部下の一人に殺された。前のロバーツはこの男の後継指揮者であつた。
- 五〇 何百ファージングの代りに何百ポンドと……——ファージングは四分の一ペニーといふ小額であり、一ポンドは二十シリング、一シリングは十二ペンスであるから、ポンドはファージングの約一千倍近くに當るのである。
- 五一 「分限紳士」といふのは……——海賊は、拘捕やこそ泥や普通の強盗などを輕蔑して、自分たちを戲れに「分限紳士」と稱してゐたのである。
- 五二 仕置波止場。——テムズ河のロンドンの波止場にあつた、海賊どもが鎖で絞殺されて日に曝された仕置場。

五三 キッド船長。——有名な海賊ウィリヤム・キッド。彼は後にボストンで捕へられてイギリスへ送られ、一七〇一年にロンドンの仕置波止場で絞殺された。

〔第三篇 私の海岸の冒険〕

五四 高潮線。——海濱に残る高潮即ち満潮の跡。

五五 投銭戯。——小籠を投げて穴の中へ入つたものを取る子供のやる賭戯。

五六 闘ひ、殺害、不意の死。——イギリス教會公定祈禱書の中にある文句である。

〔第四篇 柵壁〕

五七 三點鐘。——船では、時刻を報ずるに、零時半に時鐘を一點打ち、一時に二點打ち、以下半時間毎に一點づつ加へて打ち、八點に至ると、當直の交代時間となり、また一點に返るのである。故に、四時、八時、十二時が八點鐘の時刻であり、一時半は三點鐘である。

五八 「リリパリアロー」。——一六八六年頃に作られたアイルランドの舊教徒を諷刺嘲笑した政治的歌謡。「リアロー、リアロー、リリ・パリアロー」云々といふ疊句があるのである。一六八八年の革命の勃發に興つて力があつたと言はれ、革命の間及びその後イングラッド中で非常に流行し、軍隊や人民に盛んに歌はれた。

五九 カムバランド公爵。——ジョージ二世の第三子、イギリスの將軍であるウィリヤム・オーガスタス（一七二一—一七六五）。

六〇 フォンテノイ。——あるひはフォントノア。ベルギーの村。ここで、一七四五年五月十一日、カムバランド公の率いたイギリス、オランダ、オーストリアの聯合軍五萬が、フランス軍七萬と戦つて敗れた。兩軍の死傷は頗る多

大であつたと傳へられてゐる。

六一 詰開き。——航海用語で、帆船が出来るだけ風上に向つて帆を揚げ、風の来る方に近く帆走し上ること。ここでは船長がその語を比喩的に用ひたのである。

六二 海賊旗。——黒地に白く頭蓋骨と二つの交叉した大腿骨とを染め抜いた海賊の旗。

六三 半潮。——満潮と干潮との中間。

六四 パルマ・チーズ。——パルマはイタリア北部にある州で、その地方で製するチーズは古くから有名であつた。

六五 「いざ、乙女よ、若人よ。」——イギリスの昔の歌謡。

六六 口笛を吹いて風を呼ぶ。——風の時には口笛を吹けば風が吹き出すといふ船乗の迷信があつたのである。

註 〔第五篇 私の海の冒険〕

六七 兩權。——譯語がないので假にかう譯しておく。兩端に水掻の扁平部がある權で、舟の左右兩側で交々水を掻くのである。

六八 革舟。——木の骨組に獸皮を張つて造つた原始的な小舟。今日でもウニールズ、アイルランド、フランスなどの河川湖水で漁夫が用ひる。極く軽くて背負つて運ぶことが出来るのである。

六九 滄。——舟底のたまり水。

七〇 南の方へ。——これは原作者の誤りであらう。「北の方へ」でなければならぬ。

七一 一ジル。——一クオートの八分の一。わが約八分の一合近くの量。

七二 間切る。——帆船が風上に向つて進む時の言葉で、兩舷を代る代る風にあてて風上に向つて電光形の航路で進行することをいふ。この時は南風だから、北の岬を廻つてそこから北浦まで南の方へ帆走するには、間切らなければな



らないのである。

七三 北東の角。——この「北東」の語は妥當ではない。「北西」の誤りであるかも知れない。でなければ「北の鯉の北東の角」の意味であらう。

七四 ようそろ。——船の向が現在のままでよしといふ意味を舵手に傳へる命令の言葉。

七五 横静索。——櫓を左右側方に支持するために櫓頭から兩舷へ張つてある静索。

〔第六篇 シルヴァー船長〕

賣

七六 折半直。——船では甲板當直は四時間交代であるが、午後四時から八時までには折半されて二時間交代に行はれる。その間を折半直といふ。船には折半直はないのだから、この語は原作者の誤りであらう。

七七 仕立屋が手前たちに相應の商賣。——イギリスでは「仕立屋は九人で男一人前」といふ諺もあつて、仕立

屋が男らしからぬ商賣として輕蔑されてゐたのである。

島

七八 クラウン貨幣。——王冠を刻した貨幣。銀貨で五シリリングの價格であるから、相當大きなものである。直径一寸三分くらゐもあつた。

七九 「犬および殺人者は外に居るなり」。——聖書の最後の頁にあるヨハネ黙示録第二十二章第十五節の中に

ある句。

八〇 諺にもあります通り、食物にありつくのは……。「早起きの鳥は蟲を捕へる」といふ諺がある。

八一 船荷の宰領。——商船の航海中船荷の上に乗る添うて守り送る人。上乘とも言ふ。

八二 肩をすくめる。——輕蔑、冷淡、不快などの身振り。

八三 死んだ人たちが磨石のやうに……。——新約全書マタイ傳第十八章第六節の中に「磨石をその頸に

懸けられて海の深みに沈められん方……」云々とある句から言つた言葉である。

八四 ダブル・ギニー金貨。……。「ダブル・ギニー金貨」は四十二シリリングに當るイギリスの昔の金貨。

「モイドー金貨」はポルトガルの往時の金貨。「セクイン金貨」は昔のヴェニス共和国の金貨。

八五 スペイン領アメリカ。——往時、中央アメリカ及び南アメリカには、現在の諸國の獨立する以前に、廣大なス

ペイン領があつた。現今でもそれらの地方ではスペイン語が行はれてゐる。

八六 銀の棒と武器と。——第六章「船長の書類」の中にある地圖の裏の文句参照。

岩波文庫  
1230-1231

昭和十年十月二十五日印

10.10.25

發行

發行所

東京市神田區  
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話〇〇一八七・〇〇一八八番  
九段一〇三番(小賣部専用)  
振替口座東京二六二四〇番

譯者

佐々木直次郎

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地  
白井赫太郎

精興社印刷

實島★★

定價四十錢

(永井製本)

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を小數者の書齋と研究室とより解放して街頭に屢なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すの全書が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

古事記 田成友校訂	土佐日記 池田龜雄校訂	梁塵秘抄 佐佐木信綱校訂
新日本書紀 上巻 黒板勝美編	神樂歌・催馬樂 武田祐吉編	新山家集 佐佐木信綱校訂
新日本書紀 中巻 黒板勝美編	倭漢朗詠集 山田孝雄校訂	水鏡 和田英松校訂
新日本書紀 下巻 黒板勝美編	枕草子(春曙抄) 上 池田龜雄校訂	松浦宮物語 峰須賀富子校訂
新萬葉集 上巻 佐佐木信綱編	枕草子(春曙抄) 中 池田龜雄校訂	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂
新萬葉集 下巻 佐佐木信綱編	枕草子(春曙抄) 下 池田龜雄校訂	藤原定家(附定家) 佐佐木信綱校訂
白萬葉集 上巻 佐佐木信綱編	源氏物語(一) 島津久基校訂	新金槐和歌集(附補) 寶藤茂吉校訂
白萬葉集 下巻 佐佐木信綱編	源氏物語(二) 島津久基校訂	中世歌論集 久松潜一編
文萬葉集 下巻 佐佐木信綱編	源氏物語(三) 島津久基校訂	方丈記 山田孝雄校訂
祝詞・壽詞 千田 登編	源氏物語(四) 島津久基校訂	保元物語 語岸谷誠一校訂
古語拾遺 加藤玄智校訂	源氏物語(五) 島津久基校訂	平治物語 語岸谷誠一校訂
竹取物語並附録 島津久基校訂	紫式部日記 池田龜雄校訂	平家物語 上巻 山田孝雄校訂
伊勢物語 屋代弘賢校訂	更級日記 西下經一校訂	平家物語 下巻 山田孝雄校訂
古今和歌集 尾上八郎校訂	三條西榮花物語 上 三條西公正校訂	東關紀行・海道記 玉井幸助校訂
	三條西榮花物語 中 三條西公正校訂	十六夜日記 玉井幸助校訂
	三條西榮花物語 下 三條西公正校訂	神皇正統記 山田孝雄校訂
	大鏡 和田英松校訂	神皇正統記 山田孝雄校訂
		神皇正統記 山田孝雄校訂

徒然草 西尾實校訂  
 謡曲選集 野上豐一郎編  
 閑吟集 狂言小歌集 藤田徳太郎校註  
 好色一代男 和田萬吉校訂  
 好色一代女 和田萬吉校訂  
 好色五人女 和田萬吉校訂  
 西鶴 西田萬吉校訂  
 木朝 西田萬吉校訂  
 武道傳來記 和田萬吉校訂  
 武家義理物語 和田萬吉校訂  
 日本永代藏 和田萬吉校訂  
 世間胸算用 和田萬吉校訂  
 西鶴織留 和田萬吉校訂  
 奥の細道その他 伊藤松字校訂  
 芭蕉七部集 伊藤松字校訂  
 芭蕉俳句集 藤原退蔵校註  
 芭蕉連句集 小宮豐隆編  
 芭蕉書翰集 藤原退蔵校註

芭蕉花屋日記 小宮豐隆校訂  
 風俗文選 伊藤松字校訂  
 燕村七部集 伊藤松字校訂  
 燕村俳句集 藤原退蔵校註  
 松の落葉 藤田徳太郎校註  
 國性三重帷 近松門左衛門作  
 會我合 近松門左衛門作  
 心中天の綱 和松門左衛門作  
 會根崎 近松門左衛門作  
 用明天皇職人 近松門左衛門作  
 酒落本 高木好次校訂  
 玉勝間(上) 本居宣長校訂  
 玉勝間(下) 本居宣長校訂  
 うひ山ふみ 本居宣長校訂  
 鈴屋答問 本居宣長校訂  
 玉木くし 本居宣長校訂  
 雨月物語 鈴木秋成校訂  
 註良寛詩集 原田勲平校訂

椿説弓張月 上巻 和田萬吉校訂  
 椿説弓張月 中巻 和田萬吉校訂  
 椿説弓張月 下巻 和田萬吉校訂  
 胡蝶物 語 和田萬吉校訂  
 新一茶俳句集 藤原井泉水編  
 おらが春・我春集 藤原井泉水校訂  
 遺編父の終焉日記 藤原井泉水校訂  
 東海道膝栗毛 十返舎一九作  
 柳多留 上巻 西原柳雨校訂  
 柳多留 中巻 西原柳雨校訂  
 柳多留 下巻 西原柳雨校訂  
 浮世風呂 和田萬吉校訂  
 浮世床 和田萬吉校訂  
 萬載狂歌集 野崎左文校訂  
 徳和歌後萬載集 野崎左文校訂  
 忍ぶの徳 太阿阿編校訂  
 鼠小僧 河竹繁俊校訂

赤垣源藏・仲光 河竹繁俊校訂  
 辨天小僧 河竹繁俊校訂  
 風の平右衛門 河竹繁俊校訂  
 笠森禮三 河竹繁俊校訂  
 實錄先代萩 河竹繁俊校訂  
 孝子善吉 河竹繁俊校訂  
 加賀 河竹繁俊校訂  
 改訂版花傳書 野上豐一郎校訂  
 申樂談義 野上豐一郎校訂  
 能作書・覺習條條 野上豐一郎校訂  
 至花道書 野上豐一郎校訂  
 入木道三部集 野上豐一郎校訂  
 歌舞音樂略史 小中村清短著  
 俗樂旋律考 上原六四郎著  
 論畫四種 坂崎垣編  
 茶の 本村同書三著

都鄙問答 石田梅巖校訂  
 手島堵庵心學集 白石正邦編  
 鳩翁道話 石川謙校訂  
 蘭學事始 杉田玄白著  
 一蘭言志四錄 山田一太郎校訂  
 經濟要錄 佐藤信淵校訂  
 報徳記 富田高慶校訂  
 二宮翁夜話 福住正兒重記  
 海舟座談 藤本善治編  
 日本道徳論 西村茂樹校訂  
 福澤撰集 福澤諭吉著  
 文明論之概略 福澤諭吉著  
 寒 藤原宗光著  
 日本開化小史 田口加吉著  
 内村鑑三隨筆集 内村鑑三著  
 清澤文集 清澤藩之著  
 綱島梁川集 安倍能成編

現代文學  
 新曲浦映 島内邊著  
 うたかたの記(他三篇) 島外著  
 護持院ヶ原の敵討 島外作  
 左千夫歌集 土屋文明校訂  
 左千夫歌論抄 土屋文明編  
 二人女 房尾崎紅雲著  
 子規歌集 正岡子規著  
 墨汁一滴 正岡子規著  
 病牀六尺 正岡子規著  
 仰臥漫錄 正岡子規著  
 漾 集 夏目漱石著  
 坊つちやん 夏目漱石著  
 草 枕 夏目漱石著  
 行 人 夏目漱石著  
 こゝろ 夏目漱石著

日本思潮

硝子戸の中夏目歌石著★  
 道 草夏目歌石著★  
 明 暗上巻夏目歌石著★  
 明 暗下巻夏目歌石著★  
 風流佛・一口飯 幸田露伴著★  
 五重塔 幸田露伴著★  
 自然と人生 徳富蘆花著★  
 北村透谷集 島崎藤村編★  
 文道 透遺稿 金築松桂譯★  
 観音岩 前篇川上眉山著★  
 観音岩 後篇川上眉山著★  
 源をぢ他二篇 國木田獨歩著★  
 運命論者他二篇 國木田獨歩著★  
 號 外他六篇 國木田獨歩著★  
 蒲團・一兵卒 田山花袋著★  
 生 田山花袋著★  
 田舎教師 田山花袋著★

晩翠詩抄 土井晩翠著★  
 にてく り へ 樋口一葉著★  
 藤村詩抄 島崎藤村自選★  
 千曲川のスケッチ 島崎藤村著★  
 生ひ立ちの記 島崎藤村著★  
 櫻の實の熟する時 島崎藤村著★  
 飯倉だより 島崎藤村著★  
 春を待ちつつ 島崎藤村著★  
 風流儀法他三篇 高濱虚子著★  
 上田敏詩抄 茅野蒼々編★  
 有明詩抄 蒲原有明著★  
 泣菫詩抄 薄田位重著★  
 宜言 有島武郎著★  
 長塚節歌集 曹藤茂吉選★  
 入江のほとり 正宗白鳥著★  
 生まざりしならば 正宗白鳥著★  
 煤 煙森田草平作★

和解・或る 男志賀直哉著★  
 小僧の神様他十篇 志賀直哉著★  
 白秋詩抄 北原白秋著★  
 白秋抒情詩抄 北原白秋著★  
 海神丸 野上彌生子著★  
 大石良雄 野上彌生子著★  
 そ の 妹 武者小路實篤著★  
 幸福者 武者小路實篤著★  
 人間萬歳 武者小路實篤著★  
 友情 武者小路實篤著★  
 波 山本有三著★  
 青銅の基督 長興善郎著★  
 陸奥直次郎 長興善郎著★  
 出家とその弟子 倉田百三著★  
 布施太子の入山 倉田百三著★  
 偷盜 盜井川龍之介著★  
 侏儒の言葉 井川龍之介著★

河 童 芥川龍之介著★  
 厭世家の誕生日 佐藤春夫著★  
 (他六篇)

英・米文學

ユートピア (理想郷) トマス・モア著★  
 ベーコン隨筆集 神吉三郎譯★  
 フォースタス博士 松尾相照譯★  
 闘技者サムソン ミルトン作★  
 プレイク抒情詩抄 露岳文章譯註★  
 パーリンズ詩集 中村爲治譯★  
 ラム沙翁物語 野上彌生子譯★  
 イン・メモリアム 入江直樹譯★  
 イノック・アーデン 入江直樹譯★  
 クリスマス・カロール 森田草平譯★  
 爐邊のこぼろぎ 本多顯彰譯★  
 プラウサウ 露 勇譯★  
 ニングサ 露 勇譯★  
 喜劇 論 相良徳三譯★

エレホン ヤミユル・パトリック著★  
 ベーター論集 田部重治譯★  
 ハーディ短篇集 森村 豊譯★  
 幻想を退ふ女 (他六篇) 森村 豊譯★  
 ハーディ短篇集 森村 豊譯★  
 月下の戀劇 (他五篇) 森村 豊譯★  
 フラカゲイ東西文學評論 十一卷 三郎共  
 オ・ヘルン 三郎共譯★  
 新アラビヤ夜話 スティヴンソン作★  
 ジーキル博士と 岩田良吉譯★  
 ハイド 氏 スティヴンソン作★  
 獄中記 オスカ・ワイルド著★  
 人と超人 市川又彦譯★  
 裸夫の家 市川又彦譯★  
 思想の達し限る限り 相良徳三譯★  
 (原名ノトセラ時代に關し) 相良徳三譯★  
 聖女チヨウウン 野上彌一譯★  
 (デヤンヌ・ダルク) 野上彌一譯★  
 ビータア・パン 本多顯彰譯★  
 アイルランド童話集 山宮 允譯★  
 隊を組んで歩く妖精達 山宮 允譯★  
 争 闘 ゴールズワージ作★  
 静寂の宿 本多顯彰譯★  
 ニリシイズ (一) ジェイムズ・ジョイス著★  
 森田・名原他四名譯★

ユリシイズ (二) ジェイムズ・ジョイス著★  
 ユリシイズ (三) ジェイムズ・ジョイス著★  
 ユリシイズ (四) ジェイムズ・ジョイス著★  
 ユリシイズ (五) ジェイムズ・ジョイス著★  
 マンスフィールド 崎山正毅譯★  
 スケッチ・ブック アーヴィン・グレイ作★  
 短篇集 高垣松雄譯★  
 自然論 エマソン著★  
 短篇集 佐藤 清譯★  
 緋文字 佐藤 清譯★  
 エヴァンジェリン ロングフェロー作★  
 ボウ黒猫 (他六篇) 森田 豊譯★  
 ホキツ草の葉 有島武郎選譯★  
 マン草集 村岡花子譯★  
 王子と乞食 マク・トウエン作★  
 小公 子 若松賤子譯★  
 あしなが 子 若松賤子譯★  
 おちがさ 子 若松賤子譯★

獨・塊文學

賢者ナータン	大庭米治郎作	★
フアウスト第一部	森 崎外郎	★
フアウスト第二部	森 崎外郎	★
ヘルマンとドロテア	佐藤通次郎	★
若いエルテルの悩み	茅野蒼々	★
ギルヘルム	久野 久	★
ギルヘルム	久野 久	★
ギルヘルム	久野 久	★
たぐみと戀	實吉捷郎	★
グレンシニク	常 良	★
ヴァイルヘルム・テル	井井政隆	★
黄金寶壺	石川道雄	★
全グリム童話集第一	金田鬼一	★
全グリム童話集第二	金田鬼一	★
全グリム童話集第三	金田鬼一	★
全グリム童話集第四	金田鬼一	★
全グリム童話集第五	金田鬼一	★
全グリム童話集第六	金田鬼一	★
維納の辻音楽師	石川 健次郎	★
みれん	森 崎外郎	★
アナトール	小宮 豊隆	★
佛・白文學		
ボリウクト	木村 太郎	★
人間嫌ひ	關口 存男	★
愛と偶然との戯れ	進藤 誠一	★
マノン・レススコ	河 盛好	★
懺悔録上巻	石川 健次郎	★
懺悔録中巻	石川 健次郎	★
懺悔録下巻	石川 健次郎	★
ポオルとワイルジニ	木村 太郎	★
アドルフ	大塚 幸男	★
スタン赤と黒上巻	桑原 武夫	★
スタン赤と黒下巻	桑原 武夫	★
パールムの僧院上巻	前川 堅市郎	★
パールムの僧院下巻	前川 堅市郎	★

戀愛論	上卷 前川 堅市郎	★
戀愛論	下卷 前川 堅市郎	★
從兄ボンス	前篇 水野 亮	★
從兄ボンス	後篇 水野 亮	★
知られざる傑作	水野 亮	★
海邊の悲劇他三篇	水野 亮	★
エトルリアの遺	杉 健夫	★
コロメン	杉 健夫	★
カルメン	杉 健夫	★
屋根裏の哲人	木村 太郎	★
楮 姫	吉村 正一	★
プチ・ショウズ	八木 さわ子	★
陽気なタルタラン	小川 泰一	★
風車小屋だより	堀田 徳子	★
昔がたり	大井 征	★
ノア・ノア	前川 堅市郎	★
過	去 岸田 國士	★
氷島の漁夫	吉江 露松	★
お菊さん	野上 豊一郎	★
女の一生	杉 健夫	★
生の誘惑(原名イウ)	前田 昇	★
頭飾(他七篇)	前田 昇	★
水の上	吉江 露松	★
別れも愉し	岸田 國士	★
ジヤン	豊島 與志雄	★
ジヤン	豊島 與志雄	★
ジヤン	豊島 與志雄	★
ジヤン	豊島 與志雄	★
ジヤン	豊島 與志雄	★
ジヤン	豊島 與志雄	★
クリストフ	豊島 與志雄	★
クリストフ	豊島 與志雄	★
クリストフ	豊島 與志雄	★
愛と死との戯れ	片山 敏彦	★
獅子座の流星群	片山 敏彦	★
パリュウド	小林 篤雄	★
法王廟の抜穴	石川 健次郎	★
田園交響樂	川口 篤	★
若き日の手紙	外山 裕夫	★
母への手紙	三好 達治	★
青い鳥	若月 紫蘭	★
露西亞文學		
オネーギン	米川 正夫	★
スペードの女王	神 西 清	★
イワノ・イワノヴィチ	原 久一	★
キツチとが嘘をした話	伊吹 山次郎	★
外 套	伊吹 山次郎	★
昔氣質の地主たち	伊吹 山次郎	★
検 察 官	米川 正夫	★
現代のヒーロー	中村 白雲	★
皇帝フョードル	中村 白雲	★

ルードイン	原久一 訳	★
初恋	米川正夫 訳	★
煙	原久一 訳	★
春の水	原久一 訳	★
ブウニンとバブリン	小沼 建 訳	★
トウルグ	小沼 建 訳	★
トウネフ	小沼 建 訳	★
散文詩	西 清 訳	★
貧しき人々	原久一 訳	★
罪と罰 第一巻	中村白雲 訳	★
罪と罰 第二巻	中村白雲 訳	★
罪と罰 第三巻	中村白雲 訳	★
罪と罰 第四巻	中村白雲 訳	★
永遠の良人	原久一 訳	★
悪霊 第一編	米川正夫 訳	★
悪霊 第二編(上)	米川正夫 訳	★
悪霊 第二編(下)	米川正夫 訳	★
悪霊 第三編	米川正夫 訳	★
カラマゾフの兄弟 第一巻	米川正夫 訳	★
カラマゾフの兄弟 第二巻	米川正夫 訳	★
カラマゾフの兄弟 第三巻	米川正夫 訳	★
カラマゾフの兄弟 第四巻	米川正夫 訳	★
少年時代	米川正夫 訳	★
結婚の幸福	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第一巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第十巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第十一巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第十二巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第十三巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第十四巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第十五巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第十六巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第十七巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第十八巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第十九巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二十巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二十一巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二十二巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二十三巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二十四巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二十五巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二十六巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二十七巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二十八巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第二十九巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三十巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三十一巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三十二巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三十三巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三十四巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三十五巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三十六巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三十七巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三十八巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第三十九巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四十巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四十一巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四十二巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四十三巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四十四巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四十五巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四十六巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四十七巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四十八巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第四十九巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五十巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五十一巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五十二巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五十三巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五十四巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五十五巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五十六巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五十七巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五十八巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第五十九巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六十巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六十一巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六十二巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六十三巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六十四巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六十五巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六十六巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六十七巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六十八巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第六十九巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七十巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七十一巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七十二巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七十三巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七十四巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七十五巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七十六巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七十七巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七十八巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第七十九巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八十巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八十一巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八十二巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八十三巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八十四巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八十五巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八十六巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八十七巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八十八巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第八十九巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九十巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九十一巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九十二巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九十三巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九十四巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九十五巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九十六巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九十七巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九十八巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第九十九巻	米川正夫 訳	★
戦争と平和 第一百巻	米川正夫 訳	★

三人姉妹	米川正夫 訳	★
櫻の園	米川正夫 訳	★
シベリヤの旅他三篇	神西 清 訳	★
接吻・可愛い女性二篇	原久一 訳	★
神々の復活(一)	米川正夫 訳	★
神々の復活(二)	米川正夫 訳	★
神々の復活(三)	米川正夫 訳	★
神々の復活(四)	米川正夫 訳	★
幼年時代	湯浅芳子 訳	★
サーニン 上巻	中村白雲 訳	★
サーニン 下巻	中村白雲 訳	★
南歐・北歐文學 其他		
希臘羅馬神話	野上彌生子 訳	★
クオレ 愛の上巻	前田 眞 訳	★
クオレ 愛の下巻	前田 眞 訳	★
恐ろしき媒	永田實定 訳	★
作り上げた利害	永田實定 訳	★
子守唄	永田實定 訳	★
繪なき繪本	安藤 隆 訳	★
即興詩人 上巻	安藤 隆 訳	★
即興詩人 下巻	安藤 隆 訳	★
村のロメオとユリア	草間平 訳	★
アミエルの日記(一)	河野 一 訳	★
アミエルの日記(二)	河野 一 訳	★
アルプスの山の娘	野上彌生子 訳	★
ブランドン	角田 俊 訳	★
キイランド短篇集	前田 眞 訳	★
島の農民	草間平 訳	★
大海のほとり	小宮 隆 訳	★
父	小宮 隆 訳	★
令嬢 ユリエ	小宮 隆 訳	★
稲妻	小宮 隆 訳	★
幽霊	小宮 隆 訳	★
論	語 武内 義雄 訳	★
孔子家語	藤原 正 校	★
子思子	藤原 正 校	★
菜根譚	山口 常 訳	★
鹽鐵論	曾我部 龍 訳	★
陶淵明集	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 上巻	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 下巻	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之一	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之十	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之十一	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之十二	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之十三	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之十四	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之十五	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之十六	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之十七	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之十八	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之十九	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二十	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二十一	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二十二	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二十三	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二十四	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二十五	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二十六	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二十七	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二十八	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之二十九	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三十	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三十一	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三十二	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三十三	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三十四	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三十五	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三十六	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三十七	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三十八	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之三十九	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四十	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四十一	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四十二	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四十三	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四十四	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四十五	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四十六	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四十七	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四十八	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之四十九	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五十	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五十一	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五十二	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五十三	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五十四	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五十五	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五十六	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五十七	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五十八	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之五十九	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六十	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六十一	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六十二	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六十三	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六十四	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六十五	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六十六	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六十七	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六十八	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之六十九	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七十	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七十一	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七十二	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七十三	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七十四	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七十五	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七十六	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七十七	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七十八	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之七十九	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八十	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八十一	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八十二	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八十三	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八十四	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八十五	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八十六	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八十七	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八十八	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之八十九	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九十	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九十一	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九十二	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九十三	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九十四	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九十五	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九十六	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九十七	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九十八	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之九十九	藤山 又四郎 訳	★
李太白詩選 卷之一百	藤山 又四郎 訳	★

支那通俗古今奇觀 漢主人 著  
小島集 通選 集 青木正兒校註  
魯迅選集 佐藤春夫譯  
朝鮮童話選 金素雲譯編  
朝鮮民話選 金素雲譯編

**文藝評論**

ボワロー詩 學 丸山和馬譯註  
マルクス・エンゲルス 論 上田 進譯編  
文學史の方法 瀧沼茂樹著  
佛蘭西文學史序説 關根秀雄著  
ゴッティ社会學上より見た 大西克禮譯  
ヨール社会學上より見た 大西克禮譯  
ヨール社会學上より見た 大西克禮譯  
ヨール社会學上より見た 大西克禮譯  
ヨール社会學上より見た 大西克禮譯  
この後の者にも ラスキーン著  
建築の七燈 高橋松川著

**歴史**

ラス・胡麻と百合 石田憲次譯  
回想のセザンヌ 有島生馬譯  
ベレン歴史とは何ぞや 坂口 昂譯  
伊太利文藝 上巻 村松恒一郎著  
復興期の文化 上巻 村松恒一郎著  
世界人類史物語 上巻 鈴木 厚著  
世界人類史物語 下巻 鈴木 厚著  
世界人類史物語 下巻 鈴木 厚著

**哲學・教育**

フラスクラテスの辯明 久保 勉譯  
トング リト 阿部次郎譯  
フアラポロタゴラス 菊池豊一郎譯  
スピノ 哲學體系 小尾 治譯  
スピノ 知性改善論 島中 尚志譯  
人間機械論 杉 捷夫譯  
ヒューム人性論 太田 善男譯  
トング 純粹理性批判上巻 天野 貞祐譯

コンプロロゴリーメナ 桑木 貞祐譯  
カン 實踐理性批判 宮本和吉譯  
ヘーゲル哲學の批判 (他一篇) 佐野文夫譯  
將來の哲學の 根本命題 福村晋六著  
唯一者とその所有 草間平作著  
唯一者とその所有 草間平作著  
唯一者とその所有 草間平作著  
自然認識の限界について 坂田徳男著  
マルクス哲學の貧困 木下 半治譯  
マルクス ドイツ社会主義 清 譯  
エンゲルス イデオロギー 三 木 清譯  
反デュリング論 上巻 長谷部文雄譯  
反デュリング論 下巻 長谷部文雄譯  
フオイエルバツハ論 佐野文夫譯  
エンゲル 自然辯證法上巻 加古 誠二譯  
エンゲル 自然辯證法下巻 加古 誠二譯  
この人を見よ 加古 誠二譯  
反時代的考察上巻 井上 政次著  
反時代的考察下巻 井上 政次著

**幸福**

世界觀の研究 ヒル平作著  
七大哲人 オイケン著  
ケール博士隨筆集 久保 勉著  
人間の精神 立花 祐雄著  
哲學とは何か、ゲイネル著  
イマヌエル・カント 河東 潤著  
歴史と自然科学・道 藤田英雄著  
永遠の相下に他三篇 藤田英雄著

**宗教**

アウグスの懺悔録 フォン・ハルトマン著  
テインの懺悔録 山谷省吾譯  
基督教者の自由 石原 隆著  
イ エ ス 林 達夫著  
法 句 經 萩原 來譯註  
臨 濟 録 朝比奈宗源譯註  
法華義疏 上巻 藤德太子御製  
法華義疏 下巻 藤德太子御製  
弘法三教指歸 加藤精神譯註  
上人愚迷發心集 高瀬承殿校註  
歎 異 抄 金子大榮校訂

**自然科学**

正法眼藏隨聞記 和辻哲郎校註  
日蓮上人人文抄 姉崎正治校註  
一遍上人語錄 藤原 正校註  
國夢中間答 佐藤泰隆校註  
禪海一潮 今北 洪川著  
アラプスの紀行 矢島祐利譯  
アラプスの水河 (主に談話的) 矢島祐利譯  
アラプスの水河 (主に科學的) 矢島祐利譯  
天才と遺傳 上巻 甘粕石介著  
天才と遺傳 下巻 甘粕石介著  
雜種植物の研究 小泉 丹著



フアール 昆蟲記 山田吉彦 著  
 第二分冊・第五分冊・第九分冊  
 第十分冊・第十二分冊・第十三分冊  
 第十四分冊・第十七分冊・第十八分冊  
 第二十分冊 既刊 定價各★★

生命の不可思議 上巻 後藤格次 著  
 生命の不可思議 下巻 後藤格次 著  
 自然美と其驚異 板倉勝忠 著  
 チヤールズ 小泉丹 著  
 ランブラクの博物學者 岩田良吉 著  
 家畜系統史 加茂一 著  
 科學の價值 田邊元 著  
 科學と方法 吉田洋一 著  
 科學者と詩人 平林初之輔 著  
 科學的に見たる 寺田實登 著  
 科學的宇宙觀の變遷

法律・政治  
 アリストアテナイ原 岡田 著  
 テレスニアの國家 岡田 著

君 主 論 マキアヴェリ 著  
 法の精神 上巻 宮澤俊輔 著  
 法の精神 下巻 宮澤俊輔 著  
 人間不平等起原論 本田再代 著  
 民 約 論 平林初之輔 著  
 權利のための闘争 日沖重昭 著  
 近代民主政治 一 松山武 著  
 近代民主政治 二 松山武 著  
 近代民主政治 三 松山武 著  
 近代民主政治 四 松山武 著  
 近代民主政治 五 松山武 著  
 慣習と權利 青山道夫 著  
 法と國家 堀貞 著

經濟・社會  
 ケネー經濟表 増井幸雄 著  
 ス國富論 上巻 氣賀勲重 著  
 オオ富に關する省察 永田清 著

マル初版人口の原理 高野岩三郎 著  
 經濟學及課稅之原理 小泉信三 著  
 地 代 論 山口正吾 著  
 ミル 自 傳 西本正英 著  
 資本論初版鈔 長谷部文雄 著  
 賃労働と資本 長谷部文雄 著  
 賃銀・價格および利潤 長谷部文雄 著  
 フランスに 於ける内亂 木下半治 著  
 マル擴大人問題を論ず 久留間敏雄 著  
 家族・私有財産及エンゲルス 著  
 國家の起源 西澤雄 著  
 住宅問題 加田哲二 著  
 エンゲルス空想より科學へ 渡野 晃 著  
 道徳的經濟的基礎 シュワブ 著  
 經濟的財價值 ポエム・パウル 著  
 の基礎理論 長 守 著  
 資本論解説 大里傳平 著  
 經濟學入門 佐野文夫 著  
 資本論 上巻 長谷部文雄 著

資本論 中巻 長谷部文雄 著  
 資本論 下巻 長谷部文雄 著  
 資本論 再論 長谷部文雄 著  
 ローザ・ルクセン 松井圭子 著  
 プルグの手續 松井圭子 著  
 戰 争 論 上巻 馬込健之助 著  
 戰 争 論 下巻 馬込健之助 著  
 エンゲルス原始基督教史考 喜多野清一 著  
 カウツキー基督教の成立 喜多野清一 著  
 フツツ 労働者綱領 小泉信三 著  
 暴 力 論 上巻 木下半治 著  
 暴 力 論 下巻 木下半治 著  
 ベル婦人論 上巻 草間平作 著  
 ベル婦人論 下巻 草間平作 著  
 婚姻の諸形式 木下史郎 著  
 戀愛と結婚 上巻 原田 實 著  
 戀愛と結婚 下巻 原田 實 著  
 マルクス・エンゲルス傳 長谷部文雄 著  
 ニン何を爲すべきか 平田良 著

カール・マルクス (他五篇) 伊 藤 弘 著  
 レーニンの (他五篇) 伊 藤 弘 著  
 ゴオリキーへの手紙 中野重治 著  
 ニン帝國主義 長谷部文雄 著

御註文に就て

- 此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。
- 内容の厳選 古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。
- 最低の廉價 出来る丈安く手に入られる様に、小さい形の中に、澤山の内容を盛る形式を採りました。
- 購求の自由 しかも購者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。
- 印刷の鮮明、校正の正確。製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。
- 體裁は菊半裁判、紙裝、平福百穂畫伯裝幀。
- 活字は八ポイントを用ひました。
- 約百頁を單位として每一つでそれを扱はし。★一つ毎に二十錢の定價です。
- ★一つを1に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。
- 番號はただ發行順に従つて之を退ふものであります。

- ★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。
  - 定價(及送料)は左表の通りです。
- |       |       |      |
|-------|-------|------|
| ★     | 定價二十錢 | 送料二錢 |
| ★★    | 四十錢   | 四錢   |
| ★★★   | 六十錢   | 四錢   |
| ★★★★  | 八十錢   | 六錢   |
| ★★★★★ | 一圓    | 六錢   |
- 御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なのでから必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一割増に願ひます。

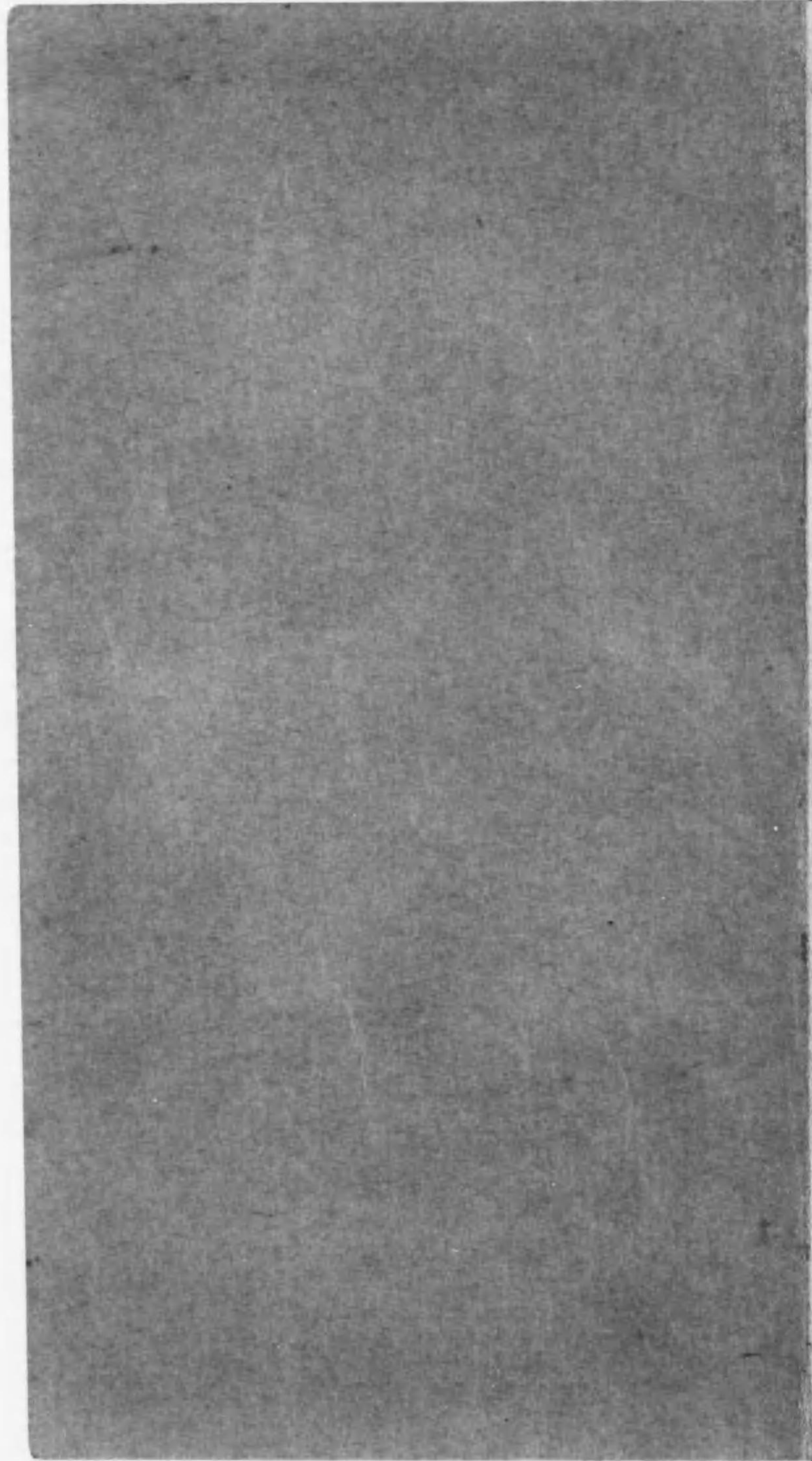
最新刊

チエイムズ チヨイス	ジャン・クリストフ (五)	反時代的考察 下卷	世界觀の研究	パリュウド	過去	過	芭蕉 臨終記	昔がたり (ピエル・ノジエール)	寶島	フィリップ 短篇集	
森田龍口 小野村山藤共譯	名原小野村山藤共譯	井上政次 著	山本英一 著	アンドレ・ジイド 譯作	ポルト・リッパ 譯作	岸田國士 譯作	照山憲順 譯	小宮豐隆 校訂	アナトール・フランス 著 杉捷夫 譯	ステイヴンソン 著 佐々木直次郎 譯	淀野隆三 譯
★★★	★★★	★★★	★	★	★★★	★★★	★★★	★	★★★	★★★	★★★

569  
14

告 豫 刊 近

フランツ・シユウベルト	註譯 楚	孫	ロ テ ィ の 結 婚	牡 猫 ム ル の 人 生 觀 上 卷	銀	千	高 野 聖 ・ 眉 か く し の 靈	キ タ ・ セ ク ス ア リ ス	農 業 全 書	訂校 道 二 翁 道 話
辻 グ ロ ウ 一 グ 譯 著	橋 本 循 譯 註	阿 山 多 俊 介 譯 註	落 ビ エ ル ・ 津 ロ テ ィ 譯 作	秋 山 フ 六 郎 マ 兵 衛 譯 作	中 勘 助 作	鈴 木 三 重 吉 作	泉 鏡 花 作	森 鷗 外 作	土 屋 喬 雄 校 訂	石 川 謙 校 訂
★★	★★★	★★	★★	★★	★★	★	★	★	★★★	★★



波岩



終